夢無き者は夢を見る ver.5

フリスタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢無き者は夢を見る　ｖｅｒ．５

【Ｎコード】
Ｎ８４３８Ｖ

【作者名】
フリスタ

【あらすじ】
特に夢なんて無い。でも、歌や可愛いモノが好き。そんな普通の男子学生である霧崎ツカサ。彼は自分自身だけの神様である『守護神』という存在の変な親心から異世界への旅を命じられる。向かうは『ネギま！』の世界。彼はどんな夢を見るのか？

プロローグ　～夢無き者は旅に出る～（前書き）

お久しぶりの方はお久しぶりです。初めての方は初めまして。

彼が、霧崎ツカサが帰ってきました。

知ってる人でも新鮮さを味わえるように努力していきます。

この作品でやりたいことも増えましたしね。

では、行きますか。

『夢無き者は夢を見る』超大型アップデート版　ｖｅｒ．５

……スタートです。

プロローグ　～夢無き者は旅に出る～

1人の男の話をしよう。

え～と、彼は、頭は悪くはない。運動神経は平均より少し悪いのかな。度胸は、……いや度胸もないね。まぁ、力が無いからかな。借金はしてないが、金の余裕もない。顔は、普通だな。うん。普通だ。話が上手いわけでもない。性格は、俗に言う『やさしい人』。

ちなみにだが、隠れファンみたいのが数名いるね。ただ、「彼女いるだろうなぁ」という感じで少し距離を置かれているのと、彼自身の過去によって特定の相手はいない。特技と呼べるものは、炊事洗濯掃除等だ。片親ということもあり人並みより出来る様だ。

そんな彼の夢は、……ありゃ、夢もない。まぁ、歌は好きみたいだけが……。他にはぁ……？　可愛いものが好きで、「自分も可愛い姿になれたら……」という憧れみたいなものを持っているね。う～ん。やはりというか、少し変わった子だ。まぁ誰でも変ってると言えば変ってるんだけどね。

ん？あぁ、そうだろうね。他人から見れば、彼はつまらない人間に当たるだろう。いや、でもね、中々どうして、良い素材だよ彼は。あぁ、そろそろ彼の名前、彼がこれからどうなるのかを紹介をしようか。彼の名前は、霧崎（キリサキ）　士（ツカサ）。現在は学生さんだな。

さて、道案内を始めますか。

ツカサは落ちていた。文字通り上から下へだ。落下運動は止まらず、寧ろ加速を続ける。何故落下しているかと言うと、数分前に何とも言えない感情が沸き上がったからだ。

ツカサは、（本屋に向かっていたはず）と思いながらも、通ったことの無い道を歩き、気付けば知らない建物の非常階段を登っていた。足は止まらない。この建物に用なんてないのに、たまに身体任せにぼーっ　としたりもしながら、また気付けば屋上に出ていた。足はまだ止まらない。手摺りを越え、（流石にマズイ）と思い　ながらも身体は止まらない。止められない。

『やっときたな。俺、誘導の才能ねぇな』

どこか楽し気な声が聞こえた気がしたが、落下運動は始まっていた。走馬燈というものは見えない。まぁ、あまり楽しい人生でもなかったため、別に良いのだが。地面には落ちなかった。地面をすり抜けたかの様に、行った事はないが、宇宙空間の様な場所に出ていた。

「ようこそ。霧崎ツカサ」

「……どちら様ですか」

「よしよし、落ち着いてるね、俺はお前らで計ると神様ってヤツだ」

「……俺にどうしろと？」

「簡単な事だよ。異世界に行って楽しんでこい」

「それは、貴方に何のメリットが？」

「バラしちまうとな、俺はお前の守護神なんだよ。他の誰でもないお前だけの神様なんだ。お前がつまらなそうに　日々を過ごしてるの見てな」

「俺は別に……」

「あぁ、俺は神様だから全部お見通しだぞ。楽しんでこいよ。【ネギま！】の世界だ。好きだろ？　お前の知識にある能力は付けてやる。無制限だぞ～」

「それは、マンガやアニメの魔法とか技とかですか」

「あぁ、ちなみに能力の代価や、後遺症もないし、失敗もない。例えば、技名を言うだけで発動したり、その魔力はほぼ無限だから消費も無視していい。魔法なら始動キーが要らないってことだ。あと、お前色んなカード持ってたろ？その能力も使えるからな、それも知識の内だし。ほれ、カードデッキ。持っていけ」

「……チート」

「そうそれだチート。あ、それとお前歌好きだろ？　それも能力にしてやる」

「は、はぁ……その世界で俺は何をしたら……」

「言っただろ。楽しんでこいって、原作を破壊しても構わない。原作通りに過ごしても構わない。お前だけの物語を作ってこいよ。取り敢えず不老不死にしておく、止めたくなったら言え、いつでも見てるから」

「でも、違う世界に行っても、俺は……」

「それも大丈夫だ。容姿も変えてやる。どんなのが良い？」

「へ？　あ……えと、じゃあ……身長は低めで……」

「あ、まてまて。頭に思い浮かべるだけでいい。……これはイリヤスフィールじゃ無いな。似ているが……。それにＦＦ７のＡＣ仕様のクラウド装備ね。……ふむ、良し完璧だ。装備品は投影で出せばいいだろう。さ、新しい人生の門出だ。ほれ、これはオマケだ」

「指輪？」

「ただの指輪じゃない。魔法とかの媒介になるやつだ。媒介が何も無いのに魔法が使えるのもおかしいと思われるからな。よし、じゃあ行って来い」

そして、霧崎ツカサはこの世から姿を消し、

『守護神』を名乗る霧崎ツカサだけの神様の変な親心を与えられ、

無制限とも言えるチートな能力を貰い、

夢を見て来いと言われた。

向かうは『ネギま！』の世界。

挑むは夢無き者。

勝ち取るは夢なり。

プロローグ　～夢無き者は旅に出る～（後書き）

感想は随時受付中です。

復活記念だ。存分にお祝いの言葉を述べるがよいぞ。ぬはははッ！！

……嘘です。

本当にお待たせし、温かいご支援いただいた方々に心よりの感謝を。

さて、プロローグの変更点で行くと、霧崎ツカサは『可愛くなりたい』という願望があったということ。他は特に変えてないかな？

物足りないかな？　安心してください。本編からは頑張りますので。覚えている方や、保存してくれていた方は、「おぉ？」と思う点も出て来るかと思います。……多分。……やっぱ忘れてください。ハードルあげてどうするんだw

主人公設定（前書き）

絵を入れてみる！！

……大丈夫か？

駄目だ。だいじょばない！！

主人公設定

主人公
霧崎（キリサキ）　士（ツカサ）

頭は悪くはないが良くもない。要領も良くはない。

＜容姿＞

元々は可愛いモノに憧れを持つ男で守護神によって願いは叶った。
Ｆａｔｅのイリヤスフィールで性別は男。（男の娘）
戦闘時やイベント時などはＦＦ７ＡＣ仕様のクラウドの服。
私生活では動きやすい地味な服が多いが、地味な服でも絵になってしまうようだ。
＞ｉ２９３１６―３７７１＜

＜ステータス＞
筋力：Ｂ～ＥＸ
魔力：Ａ～ＥＸ
幸運：Ｂ
敏捷：Ｃ～ＥＸ
耐久：ＥＸ
歌力：ＥＸ

＜能力＞

◆歌エネルギー（魔法版アニマスピリチア）◆

歌でバリアーを作り、相手の魔法攻撃などを防ぐ事が出来る。
歌で、味方と認識した者の魔力を回復する事が出来る。
人に活力や癒しの効果を与えられたりもする。
※アニマスピリチア：元ネタ、『マクロス７』主人公　熱気バサラの固有能力（？）異常に精神が強い者を指す。これによりバサラは何者にも折れず屈せず歌い続けてきた。

◆投影・錬成◆
知識にあるものは何でも作成可能。ツカサが念じない以上、破壊・損傷・劣化は無い。どんな強力なものを作成しても後遺症は残らないが、あくまでも知識にあるもののみの作成に限定。

◆多重影分身◆
最大１０００人に分身できる。分身が経験したことなどは分身を解除した時、本体に全てフィードバックされる。例えば１０００人で腕立て伏せを1回やって分身を解いたら、１０００回やったことになる。努力チート。

◆始動キー要らず◆
呪文詠唱の必要がない。ノリで詠唱することもある。

＜武器や道具＞

◆合体剣◆
ＦＦ７ＡＣクラウド専用武器。合計６本の剣からなり、敵が多いときには分離して戦う事もある。『超究武神覇斬ｖｅｒ．５』を放つ際は強制的に全て分離される。ツカサの持つカードのインストール機能等も付いており、魔法の杖としても使用される。

＞ｉ２９３１７―３７７１＜

◆魔力媒介の指輪◆

神様から貰ったもの。あまり意味無し。

◆カード◆

ＭＴＧ・ガンバライド・ガンダムＷａｒのカードなども使用可能。マクロス７からは音響システムのみ使用。Ｆａｔｅのサーヴァントのタロットカードはサーヴァントの一時的な召喚が可能になる。

無色のカードはオリジナルのカードが作成可能。

……オマケ

＞i293155—3771＜

にょろーん♪

ちゅかささん。

主人公設定（後書き）

徐々に増やしたり、書き直したりしますので、少し乱雑かもw

「これも書いて欲しい」とかあれば言って下さい。努力してみます。

第０１話「紅き翼」（前書き）

お腹が減った時はご飯を食べる。これは当たり前の事です。

でも、お腹が減っているのにも拘らず、自分のご飯が目の前でひっくり返されたらどうでしょうか？

そう、君は今、怒っていいんだ。

第０１話「紅き翼」

Ｓｉｄｅ　ツカサ

真っ白な道を勝手に進んでいく俺の身体。でも、もう昔の体じゃなくて、想像した通りの姿になっている。髪は長く、イリヤの髪の色だ。顔までは今は確認できないが……まぁ恐らく可愛らしい美少女になっているのだろう。

イリヤスフィールがＦＦ７ＡＣのクラウドのコスプレをしているようにしか見えない。そんな姿を想像しながら俺は少しニヤけてしまう。夢なのかもしれないけど、覚めてほしくない気持ちがある。ネギま！の世界。俺に何ができるんだろうか。とりあえず鏡が見たい。

＜出来ない事はない。あ、それとお前歌好きだろ？　それも能力にしてやる＞

先ほどの神様の言葉を思い出す。

「出来ないことはない……か。……っ！？」

少し遅れて自分から発せられた声にも驚く、綺麗な声だ。自分で聞いているから多少のズレはあるかも知れないが、歌いたくても声が綺麗に出せずに歌えなかった曲もこれなら……。再びニヤけてしまう。

他にも試してみることにした。知識にあることなら出来るって言っていた。だったら……。出来る。鋼の錬金術師の錬成陣無しでの錬成。大佐の指鳴らしによる発火。Ｆａｔｅの投影。ＮＡＲＵＴＯの影分身。どれも体に負担を感じない。

腰に備え付けられたカードデッキを取りだす。様々な種類のカードがある。仮面ライダーにマジック・ザ・ギャザリング。ガンダムにマクロスに真っ白な無色のカード。そして、Ｆａｔｅのサーヴァントのタロットカードまである。

「出来ないことは無い……何でも出来る……」

（くぅ～～～……）

……お腹空いた。ネギま！の世界に着いたら、まずはご飯食べたいな。流石にご飯も食べずにお腹を膨れさせることは想像できない。つまり、ご飯はきちんと食べましょうってことだ。

そして、視界が開けた。……俺は――――――森の中にいた。

「……木しか見えない」

そう、着いた場所は森だった。

神様……ここはどこでしょうか？　いきなり迷子です。

（く～きゅるるる～）

「は、早く何とかしないと餓死の危機かも知れない……」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ナギ

「あー……腹減った……」

駄目だ……食い物がない。飛竜に乗るアルも詠春もお師匠も無言だ。

「このペースですと、街まであと数時間でしょうかね～」

「何！？　死んじまうよ！　飯～飯～！！」

「うるさいぞナギ。お前が考え無しに最後の食糧までも食べたんだろうが」

うっせーぞ詠春。お師匠も俺に同意してるのか呆れている。

「お主に呆れておるのじゃ。全く……む、アレで良いのではないか？」

「大トカゲですか……」

「仕方ないな」

「トカゲ！？　旨いのか！？」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ツカサ

飛べばよかったんだね。飛ぶって事はそこまで難しいことでも無かった。イメージだ。想像だ。それだけで体は宙に浮く。後は加速とか、方向転換とかもイメージで出来る。神様の言っていた知識にあることなら何でも出来るっていうのは、こういうことだったんだと身を以って理解した。少し変な違和感とかは当然あったけど、慣れるのにそこまで時間はかからなかった。

でも、一番の問題は空腹だ。これは時間は解決してくれない。逆に死へのカウントダウンをされている気すらする。しばらく飛んでいると、遠くに煙が上がっているのが見えた。その下には火のような灯りも見える。

視覚を強化して、更に詳細を見る。

お、おぉ～見える。遠くまでよく見える。マサイ族も目じゃないね！　って、あれは！？

「な、ナギ・スプリングフィールド？　ゼクトにアルに詠春だ！」

本物だ～。漫画の中の人に早々会えるなんて感動だなぁ……。俺は【紅き翼（アラルブラ）】の面々の場所へ挨拶しに行こうと思った。しかし、なんて挨拶すればいいんだろう？

あれ？　でもラカンがいないぞ？　いや、このシーンってどこかで……。いや、お腹が空き過ぎてまともに何も考えられないよ……。
（きゅ～くるるるるぅ～……）
あっ！　お腹が減ってるのを切っ掛けに分けてもらう感じで話しかければ良いんじゃない？　良いよね？　駄目かな？　ええい！
行くぞ！　いや、待てよ。何か忘れてるぞ。すごく嫌な予感がする。ご飯食べられない予感がしてしまうのはなぜだ？　そこにご飯があるというのに……この胸騒ぎはなんだ？

「……あっ！！」

ドガッ！！

そうだ。このシーンだ。ラカンが初めて紅き翼と接触したシーン。つまり、食事中に大剣を投げ、それは鍋をひっくり返すものだった。その思い描いた通りのシーンが目の前で繰り広げられている。
一気に鍋の具材が吹き飛ぶ、いや、当然ながら鍋もだ。宙に散りばめられていく肉は空中で軌道を変えてナギ・アル・ゼクトによって拾われていく。俺は美しい軌道を描いてひっくり返っていく鍋の行く末を見守っていた。

あ、やっぱり詠春に被さった。

……じゃない！！　お、俺の飯！！　俺の……俺のぉ……！！

「食事中失礼～！！　俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！！
いっちょやろうぜッ！！」

……ふふふ……ふはははは……ジャック……ラカン。その登場シーンは実に愉快だった……我　関せずに本で読んでいるだけならな

……だが、貴様はやってしまった。俺の空腹時に、俺の目の前で……俺の飯を……！！

※：この時点ではまだツカサの所有権（ごはん）にはなっていません。

そうだ。ちょうどいい。きさまには。じっけんだいになってもらおう。

さんざんつかいたおして。ぼろぞうきんのようにすててやる。

「……投影開始（トレース・オン）――――」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ナギ

「いやぁ～ラッキーだったな～詠春がどうしても食べたいって言う時によ～！！」

「言っとらんわ！！　って！　ナギおまっ……！　何　肉を先に入れてるんだよ！？」

「トカゲ肉でも旨いのかのぅ？」

「お師匠もそう思いますよね！　旨そうなモンが先で良いだろうよホラホラ」

「ワシはそんな事言っておらんぞ。人の話を聞かん奴じゃな～……まぁ良いが」

「バッ　バカ　火の通る時間差というものがあってだな。まずは野菜を……」

「あー！　うっせ！　うっせーぞえーしゅん！」

「フフ……詠春。知っていますよ。日本では貴方のような者を『鍋将軍』…と、呼び習わすそうですね」

「ナベ・ショーグン！？」

「つ、強そうじゃな……」

「分かったよ詠春。俺の負けだ今日からお前が鍋将軍だ」

「全て任す。好きにするが良い」

「鍋奉行じゃ…うーん…嬉しくないなー……」

俺たちは食事休憩ということで、賑わった。ジャパニーズ・ソースである醤油は最強だということが分かった。マジでうめぇ！

ドカッ！！！

他愛もない話を始めた時、それは突然降ってきた。大剣だ。天空から勢いよく突き刺さった大剣は、その場にあった鍋をふっ飛ばし、

詠春以外は飛散する肉を死守した。

「食事中失礼〜！！　俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！！
いっちょやろうぜッ！！」

「なんじゃ？　あのバカは」
「帝国のって訳じゃなさそーだな」

もぐもぐ　んぐんぐ　と食事を進めながら冷静にお師匠と俺は登場した傭兵だという『ラカン』を観察している。

「フ……フフフフ……食べ物を粗末にする者は……な、なんだ！？」

あ、詠春がキレた。そう思った矢先だった。詠春が瞬動でラカンに接敵しようとした瞬間だ。突然の凄まじい魔力に俺たちは後ろを振り返った。

「なんだあのバカ魔力！？」
「あのお嬢ちゃんか……？」

「……投影開始（トレース・オン）　――――工程完了（ロールアウト）。全投影（バレット）、待機（クリア）　――――停止解凍（フリーズアウト）、全投影連続層写（ソードバレルフルオープン）……！！」

ここからでは聞き取れない詠唱が、少女の背後を紅く染めていく。そして、少女の後ろから剣や槍が無数に出現していく。そして、その全てはあのバカ煩いジャック・ラカンという男に向いている。そして、その切っ先は飛んで行った。剣の雨だ。数十本に1本ぐらいの頻度で大呪文クラスの魔力を込められている武器もある。

「どーしたー！　来ねーのかぁー！！　来ねーならこっちから……っ！？　だ、誰だそのお嬢ちゃんは！？　情報には無かったぞ！？　ぬおっ　武器の嵐か！？」

「や、やるな。アイツあの剣の雨を何とか凌いでやがるぜ」

「いえ、駄目みたいですよ？」

アルがそう零した瞬間。

「壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）」

ドガァァァァァンッ！！！

ジャック・ラカンなる男は大爆発に巻き込まれていた。３６０。全方位からの爆発する無数の武器に包まれていた。

「うお～耳鳴りがするぜぇ……なんだったんだ？　殺し屋とかか？」

「ふふふ、そうだとしたら可愛らしい殺し屋さんですね」

「こっちに来るようじゃが……？」

何本収納が出来るのか疑問が浮かぶソードホルダーは少女の服の一部だ。そんな黒い革の衣服で身を包み、綺麗な髪をした少女は俺と同い年ぐらいだろうか？　その目はとても印象的だった。これまた　その容姿に不釣り合いなほどの目をしていたのだ。虚ろというか……飢えているというか……。

「な、なんだよ？　やるのか？」

少女は俺たちの前で立ち止り、口を開いた。

「ご……ご飯ありませんか？」

……　……　……　……　マジで飢えてたのかよ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ツカサ

もぐもぐ　むしゃりむしゃり　ぺろ　がつがつがつ！

「あ、醤油ください！」

「あ、あぁ……どうぞ」

もしゃもしゃ　ぱっくんちょ！　ぴちゅーん。

ピロピロピロピロ♪

「ふぅ～……ごちそうさまでした！！トカゲって割と美味しいんですね～」

「ん？　醤油を知ってたな？　……旧世界から？　日本を知ってい

るのか？」

「あ～、はい。一応そういうことになります。あ、申し遅れました。俺の名前は霧崎ツカサって言います。一応、日本人です」

「日本人だったのか……そうか？」

詠春はそう言いながら、日本人らしからぬ俺の姿に頭を悩ませているようだ。

「あぁ、俺は……」

「あ、知ってます。ナギ・スプリングフィールドさん。その師匠さんのゼクトさん。アルビレオ・イマさん。（えっと今はまだ『近衛』じゃないんだよね……）青山詠春さん。紅き翼の方々ですよね。で、あそこで倒れてるのがジャック・ラカンさん」

俺は指差し確認しながら名前を宛てていく。

「へぇ、知られてるんだな。で？　たまたまキャンプ張ってた俺たちに飯を分けてもらおうと思ったら、あのバカが鍋をひっくり返したから怒りで我を忘れて攻撃した。反省はしていないと？」

「えぇ、極限に近い状態だったので……すみません。反省もそこまでしてません」

「お、俺に謝りやがれ……しかし、やるな……お嬢ちゃん……。あんたのデータも集める様にするぜ……」

あ、ジャックが起きた。

「ごめんねジャック。あ、お詫びに治してみようか。
回復魔法は初めてなんだけどね。ちなみに俺は男だから。＜ケアルガ＞」

「実験台かよ！？　……おぉっ！？　すげぇな。回復が一瞬だとは……しかし、お前らにこんな仲間がいるとはな……」

「あ？　俺たちも会ったばかりだぞ。鍋をひっくり返したお前が悪い」

「ふふふ、食べ物の恨みは怖いということですね」

「……つーか男！？」

「ワンテンポ遅ぇ！！」

その後ジャック・ラカンは二言三言話してナギ達の仲間になっていった。もう仲間になるんかい。確かしばらくナギと戦ってからじゃなかったのか？　もう原作が崩れ始めたのか？

「ところで、変わった呪文を使うんじゃな？　どこで習ったんじゃ？」

俺は回答に困ってしまう。こういう時、どう答えていいかわからないの。という訳で、俺は笑って指を上に向けて「アッチ……？」と答えた。

「答えられんなら良いがのぅ。ところで、本当に女ではないのか？」

「ふふふ、とても可愛らしいですがね」

「あ、はい。男です」

可愛いものに憧れていた俺としては照れる。俺に対して『可愛い』は褒め言葉だ。

「なぁ、ツカサって言ったよな？　どこに所属してるんだ？　一人なら俺たちの仲間にならないか？」

紅き翼に入れる！？　あー……いや、でも一緒に行動してもな～……。あっそうだアリカ様に会いに行こう！！　で、後で合流すればいいよね？

「御誘いは嬉しいんですけど、ちょっと『ウェスペルタティア王国』に行きたいと思いまして……」

「もう行くのか？」

「また会えますよ『紅き翼（アラルブラ）』の皆さん。それでは……。……あの」

「ん？　なんだよ？」

「また会ったときは、仲間にしてくれますか？」

「……へっ　もう仲間だろ？」

「ふふふ、そうですね。仲間が少しの間一人旅するだけですね」

「待っておるぞツカサ」

「今度会ったら1度本気でヤりあおうぜ、勝ち逃げは許さねぇからな」

「皆さん……はい！　行って来ます！

……あ、『ウェスペルタティア王国』ってどっちでしょうか？」

ズルッと数名こける。だって知らないんだもん。アルに地図を貰い、方角を教えてもらい、俺は紅き翼と別れた。向かうのは『ウェスペルタティア王国』だ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ナギ

「お師匠。ツカサは、ツカサの魔力とか……何て言ったらいいんだ」

「ワシも考えていたのじゃが、そこまで悩むのに何故仲間にしようとしたのじゃ？　もう仲間じゃが」

「ナギはロリコンなんだろ、「歳は近かったろうが！！」いやショタコンか「それも違ぇ！」」

「ったく筋肉達磨のアホが。……確かに、あの魔力には正直ビビッたし、やったら勝てる気もしなかった。でも……」

「いい子でしょうね」

「そうじゃな。悪いことは出来ないやつじゃろうな」

「あぁ……。……またな、ツカサ」

Side out

第０１話「紅き翼」（後書き）

感想は随時受付中です。

次回予告　ｏｐｅｎ　ｙｏｕｒ　ｅｙｅｓ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｄｒｅａｍ.

「はい　どーもー守護神でなぅ」

「な、なぅ？」

「ん……くぅ……もう食べられない……こともない」

「どっちじゃ！？」

「あの……今晩のご飯ください……ませんか？」

「くっ……明日の朝まで我慢してください」

次回『可愛いモノは牢屋に入れましょう』

第０２話「可愛いモノは牢屋に入れましょう」（前書き）

『限界』というものがある。

その壁にぶつかった時に、
大半の人は壁の向こう側へ行くことを諦める。

では、壁を壊す能力が与えられたら……。

彼は今、壁を壊す努力をしている。

そう、千の力で駆け上がっていく。

第０２話「可愛いモノは牢屋に入れましょう」

≪　～～～♪　≫

朝日が昇り始める早朝。歌が聞こえる。それは空を飛んでいる黒い服に身を包んだ少女からだった。少女は自分自身ぐらいある大きな剣の腹に乗り、『ウェスペルタティア王国』の城下町に辿り着いていた。長時間に及ぶ飛行は少女を疲弊させていたが、そんなことはお構いなしに彼女のテンションは上がっていた。

ここで訂正しておこう。少女に見えるこの人物。実は男である。つまり言われなければ少女と間違えるのは当然ともいえる容姿の少年である。期待した方々には申し訳ないと思う。それでも良いという人には感謝したいと思う。

さて、この少年のテンションが疲弊しているにもかかわらず上がっているのは、ハイになっているからに他ならない。気持ちよく歌えるから？　近いが違う。眠らなくてテンションが上がるアレなのか？　少し遠退いた違う。正解は、彼は元々この世界の住人ではなく転生者だからだ。無制限ともいえる能力に、歌は大好きだったが『平均ぐらいに上手い』レベルから、『ぱなく巧い』レベルにまでなっていて、楽しくて仕方がないのだ。彼は転生する直前までは疑問などの気持ちで満たされていたが、今は違う。もう一度言おう、本当に楽しくて仕方がないのだ。

そんな彼、霧崎ツカサの歌が何故に急激に巧くなったのか？

『絶対音感』という感覚がある。勘違いしている方もいるかも知れないが、これは決して天性のモノというわけではない。習得でき

るものだ。しかし、『臨界期』があり、3～5歳くらいの間に意識的に訓練をしないと身に付けることは不可能に近い。

そして、ツカサは（自ら願ってではあるが）本来の身体から急激に身体を縮ませた。そして、その体躯は女性に近い物へと変化した。この逆成長とも言える人体の奇跡の働きを利用し、神は無理矢理にこの能力を知識と共に捻じ込んだ。絶対音感の厳しい音階領域に身を置く者は、どんな音でも煩わしく感じる様になり、体調不良や頭痛を持ってしまう者もいる。当然、その辺りも考慮しての能力だ。こと『音』というモノに関して言えば、ツカサが苦しむことは皆無といっていいだろう。

≪　～～～♪　≫

そんな頃、城下町でも最も早く開店し最も遅くに閉店する老舗は仕込みということもあって店の入り口を開けて、店内・店外の掃除から今日も一日を開始していた。自然と流れてくるその空からの歌に、掃除していた男は聞き惚れてしまう。その歌声で気分良く今日も一日を始められるようだ。

それもそのはず、彼の歌には特殊能力が備わっている。ツカサが意識して歌えば、それは治癒・魔力回復・モチベーションの向上などにつながる。敵からの魔法攻撃に対しては障壁（バリア）になる。何気なく歌っている時でも今の様に癒しなどの効果は高い。魅了に近いモノもあるその歌は、朝焼けの空へと静かに響き渡っていた。

Ｓｉｄｅ　ツカサ

朝焼けに染まる街を眺めながら『Ｂｕｔｔｅｒ－Ｆｌｙ』をのんびり風な感じで歌いながら空を飛ぶ。皆さんおはようございます。霧崎ツカサです。

ナギさん達、紅き翼と分かれて１か月ほどだろうか？　地図は貰ったんだけど、その間に能力とか？　歌とか？　色々試して勉強はしたんだけど。ただ、一向に目的地には着かなかった。歌は上手くなってるよ？　投影とか錬成も上達してきているさ。でも方向音痴はどう鍛えていいのか分からなかったんだ。地図だけじゃ何もわからんよ。いやぁ～おなか減った時は魚とかドラゴンを狩ったりしたよ。

たまに街とかを見て回ったりとかもした。で、「ウェスペルタティア王国はどっちですか？」と聞いては行き過ぎていたり、別方向に行ってたりしたわけだ。

――――２週間ほど前。

「はい　どーもー守護神でなぅ」

「な、なう？　どうかしたんですか？」

空に浮かぶ島々を飛び回ってウェスペルタティア王国を目指している時だった。もちろん迷子中だったんだけど……。

「道に迷っているお前に良いモノ持って来たぞ。

お前が現実世界で、ずーっと欲しがってたギターだ」

「ほぁ！？　マジだ！　かっこいい～！！」

そんな事があり、俺はギターを手に入れた。その真っ黒に銀色の装飾がラインのように入っているギターは、形。デザイン。ボディ鳴り。お金をためて何時か……と思っていたギターだ。

「……って、道に迷っているのと関係ない！？」

「何言ってんだよ。ギター練習しながら目的地目指せばいいだろう？」

む、一理ある……のか？

「はい、じゃあ回収しま～す」

「ちょっ！　何で！？」

「何でも、何も、『あげる』なんて言ってないだろ？　触ったんだから構造とかは理解出来ただろ？投影できるようになっただろ？これも借り物だから返さなきゃならんのよ」

「あ、あぁそう言うことですか……構造理解とか全く考えてなかったんで、もう一回触らしてもらっていいですか？」

「おう、早く能力に慣れるんだな」

それから、森の中とか人気のない所で、『ＮＡＲＵＴＯ』の『多重影分身の術』を使用して１０００人で練習しまくった。まだ普通の生活してた頃は少し弾いては投げ出していたけど、影分身を解いた時のギター練習量というのが通常の１０００倍になるわけだから、そりゃあ凄かった。自分でも分かるほどに上達していったよ。

ギターの腕前は凡才だった俺だけど、与えられた能力である『絶対音感』と『影分身』で効率よくギターの腕前は上がって行っている。今は、歌うのとギター弾くのを同時にやることを練習中だ。これぱかりは結構時間が掛かりそうだ。でも、もう投げ出したりなんかしない。好きなものは好きって言えるようになったんだ。やっぱり音楽が好きだ。歌って、ギターも弾けるようになりたいんだ。

と、そんなこんなで２週間が経ち。今はやっと最初の目的地。『ウェスペルタティア王国』に辿り着いた。……何回か通り過ぎた気がしないでもない。

「こちらスネーク。大佐、見張りが多すぎる。これは進入は難しそうだ」
「ふぅむ、スネーク。装備の中にステルス迷彩があっただろう。それを使え」
「駄目だ大佐。ステルスは完全じゃないから見つかる可能性がある。見つかったら終わりだ」
「ならばステルス迷彩を装備して、コントローラーの△ボタンを押してみろ」
「大佐、それは他の作品の能力を取り入れるということか」

「私達も他の作品の存在だ。問題あるまい」

そんな独り言を言いながら、『ステルス迷彩』『ＥＣＳ』『ミラージュコロイド』を重ね掛けして、城の中を進む。

どうも、皆さんこんにちは。最近楽しくなってきた霧崎（キリサキ）　士（ツカサ）です。何でも出来るって素晴らしいですね。異世界に来るまでは、壁にぶち当たってはヒーヒー言いながら時間をかけて、よじ登るように生きてきたので、こういった世界は面白いです。おや、あれは……。

「大佐、目標を確認した。間違いない王女殿下だ」

「人の目がありすぎるな。スネーク、夜まで待つんだ。私室へ侵入し、周りが寝静まるまで待つんだ」

私室へって、犯罪の香りしかしないよ大佐。まぁ自作自演な俺なんだけど。ついでに流石に１日以上寝てないからベッドを借りよう。眠すぎる……あ、良い香り。……すぅ……すぅ……。

そして、夜。

ガチャ、バタン。

「……ふぅ。　……っ！？　誰だ！　……子供？」

「ん……くぅ……もう食べられない……こともない」

「どっちじゃ！？」

「（ビクッ）っ！？　あ、……あわわ！　す、すみません殿下！怪しいかもしれませんが、怪しいものではございません。少し殿下

とお話したいと思いまして、勝手ではありますがこの殿下の私室にて待機しておりました。べ、ベッド借りました！」

「……何用じゃ」

「あ、ありがとうございます殿下。私の名前は霧崎　士といいます」

「ツカサ……」

ほっ、とりあえず話を聞いてくれそうだ。えっと……。

「日々の『帝国』と『連合』の調停役、お疲れの程は私には計り知れません。しかしながら、いくら話し合いの席を設けても戦争は起こります。わっ！　お、怒らないで聞いてください。私はアリカ様の味方です」

「……味方？」

「情報を先にお渡ししましょう。帝国は王都オスティアを狙っていることは知っていますか？」

「やはりそうなのか。というか、ツカサが知っていることが疑問なのだが」

「直接オスティアに攻められたことは？」

「いや、過去にそういった侵攻作戦は行われていない」

「なら、その内にでも攻めてきます。」

「なっ！？　まだ予定されている会合があるのだぞ！」

「　彼らには関係ありません。話し合いで済まないなら実力行使して来るはずですから。話し合いで解決できる問題でもありませんからね」

「……」

「それから……あ、そうそう『黄昏の姫御子』の力は使わ無い様にしませんとね」

「どこまで知っておるのじゃ……」

少し苛立ちが見える。全てを信じているわけではないが、否定も出来ないことだからだろう。
今まで、いや、これからも会合をする意味というものが、音を立てて崩れるかのように。

「ではもう一つ、メガロメセンブリアのナンバー2はご存知ですか？今の執政官です」

「……うむ、何度か会合の席でもお会いしたことがある」

「その人も黒幕の一人です」

「戯言を！　いい加減にせぬか！！」

「まぁ時間はまだありますから調べてみてください。こと細かくね」

「そうさせてもらう！」

「で、どうしましょう？」

「何がだ？」

「いや、信用問題っていうんですかね？　牢屋とかに入っていた方がいいのでしょうか？」

「なるほど……1週間。いや、5日頼めるか」

「構いません。味方ですから。でも」

ふふふふふ……。

「何がおかしい」

「あ、ごめんなさい。その、牢屋に入ってくれと頼む絵ってシュールだなぁって」

「うるさい！　（ガチャッ）　誰かいるか？」

「殿下いかがなさいましたか」

「この者を、牢屋にて保護してくれ」

「え？　牢屋で…保護…ですか？　え、誰ですかこの女の子」

「あ、俺　男です」

「「えぇ！！？」」

見間違えられた。……やっぱり嬉しい感があるね。えへへへ。元々の俺がやってたらキモいけど、今の姿の俺なら本当にうれしいね。最高だよ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　メイドさん

私はアリカ様の専属メイドを勤めている。名前はニーナ。

就寝時間だというのに呼ばれたのは初めてではないだろうか？そんな殿下に呼ばれ部屋へ入ると、「この女の子を牢屋で保護してほしい」と言って来た。少女の歳は１０歳ぐらいだろうか。見た目はかなりの美少女なのだがその格好が印象的だった。全て黒を基調とし、片腕だけノースリーブで肘まで届かないロンググローブを付け、肘から肩まで肌を露出している。グローブの上から嵌められた指輪は魔法媒介だろう。左肩に獅子の様な魔獣を模した少し大きめのシルバーアクセサリーが鈍く光っている。後姿も見たが、まるで大剣でも収納するかのようなソードホルダーまで付いている。服装だけで言えば、武装してない傭兵の様だった。その服は、違和感もあったがこの子に非常に似合っていた。

「何か付いてます？　あ、この服ですか？　カッコいいですか？」

クルリと回って見せて来る仕草に、顔を背けてしまう。

いいえ、かわいいです。あなたは正義です。

※少し妄想入ります～♪

「この者を、牢屋にて保護してくれ」

「ふふふ、かしこまりました」

ジャラ

「あ、痛い……」

「ふふふ、ちゃ～んと保護してあげるからねぇ」

「いや、そんなの無理！」

「大丈夫、痛いのは最初だけだから」

「んんん！！い、たぁ…ぃ…！」

「ほら舌出して…そうそう、ふふふ。ん　ちゅ…んはぁ」

「はぁはぁ……。もう、　やめてください」

※妄想終了しま～す♪

「あのぉ、大丈夫ですか？」

「はっ、失礼しました！　んんっ！」

咳払いをし、首を少し横へ振り、脳を覚醒させる。

そもそも、この子は何者なのだろうか？というか本当に男の子な

のだろうか。殿下も性別を聞いたときに驚いていたから親しい仲ではないのだろう。意を決して、私は直接聞いてみることにした。

「貴方は、何者ですか？殿下と親しい仲ではないのでしょう？」

「はい、初めて会いました。アリカ様に会ってみたくて会いに来たんです」

ファンか何かなのだろうか。王女のファンクラブなんて聞いたことはない。フィギュアは出てるらしいですけど……新しくファンクラブも出来たのかしら？　非公式なら取り締まって貰わなくちゃいけませんね。

そもそも、この子はどこから入ってきたんでしょう？　入り口からなら殿下に会うことすら不可能でしょうし、侵入者なら結界ですぐに捕まるはずですし……。

「あの、失礼ですが警備の者は？　止められなかったのですか？」

「えぇ、見えなかったんでしょうね。助かりました」

イヤイヤイヤ、こんな美少女、あ、男の娘か。見逃す馬鹿はいないでしょうに。そして、少し話しているうちに牢屋に着いた。

「では、こちらにお入りください」

「お邪魔しま～す」

ガチャン！

「では、朝昼夜の食事はお持ちしますが、他に要望はございますか

？」

「あの……今晩のご飯ください……ませんか？」

ずきゅーん！何このかわいい生き物は！

しかし、夜も遅く食事の時間はすでに……。

「くっ……明日の朝まで我慢してください」

「……はい。あ、俺　ツカサって言います。お世話になります」

あ～凹んでいる姿も良い。礼儀も正しい。あ～ペットとして飼いたい。

「ニーナとお呼びください。では」

早くここを去らねば、間違いが起きてしまう。起こしてしまう。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ツカサ

ふぅ、眼つきが鋭くて少し怖い人だったな。

流石に時間も時間で晩御飯の要求は拙かったか。

「くっ……明日の朝まで我慢してください」って、よっぽど厚か

ましい奴だと思われたに違いない。顔を真っ赤にして怒って、斬って捨てるかのように行ってしまった。……。でも気にしない！　そんなことよりも……。

「はぁ……お腹すいた」

ちゅんちゅん
カツン　カツン　カツン
牢屋に響き渡る足音で目覚めると、食事を持ってきたニーナさんがいた。

「おはようございます。ツカサ様」

「おはようございます。ニーナさん」

ニーナはどこか、造ったようなぎこちない笑顔で挨拶した。食事は、パン・サラダ・ハンバーグ・スープだった。実に美味しそうだ。しかし……。

「どうかしたのですか？」

やはり嫌われているのだろうか。フォークなどが一切ない。そして、ニーナさんは笑顔だ。

「あ、いや……何でもないです。いただきます」

「はい、では失礼します。後ほど食器を下げに参ります」

最後に見た表情だけは、ものっそい笑顔に見えた。やっぱり嫌われているのだろう。数分考えたが俺が悪いことをしたとは思えない。

生理的に受け付けないってやつなのだろう。

「はぁ、仕方ない。……錬成しよう！　食材があれば出来ないことはない。ハンバーガーだ！」

何で練成するかって？　能力は使って楽しむものだからさ。それに手が汚れるしね。あ～少し冷めてきてる……。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ニーナ

朝食を届け終わると声をかけられる。城のシェフとウェイターだ。

「ニーナさん。どうでした反応は？」

ニヤニヤしながらウェイターは言う。

「何のことでしょうか？」

「いや、この馬鹿がね、くだらない悪戯をしたんですよ。止めたんですがね」

「悪戯？」

「まぁ何の罪状か知らないですけど、罪人らしく犬のように食べて

もらおうと思ってね」

「なっ！？　罪人じゃありませんよ。殿下のお知り合いです。理由は分かりませんが、牢屋を貸しているだけです！」

「「えっ！？」」

「やっちまった～……」という声が後に聞こえた気もするが、私はすぐに銀食器（シルバー）を持ち、牢屋へ向かった。辿り着いた牢屋で見たのは、青白い雷のような魔法に包まれたツカサ様の姿だった。

「上手に焼けました～♪　つーか冷めても温められるわなそりゃ。ん？　ニーナさん？」

「あの、すみませんでした！　実はシルバーをお渡し忘れていたようで！」

「よ……」

よくも、俺を馬鹿にしたな！お前なんて嫌いだ！なんて言われた日には、首を吊るしか……。

「よかった～」

え？

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ツカサ

「上手に焼けました～♪（違）　つーか冷めても温められるわなそりゃ。ん？　ニーナさん？」

「あの、すみませんでした！　実はシルバーをお渡し忘れていたようで！」

「よ……よかった～。ニーナさんに嫌われてるかと思いましたよ」

「は？　あ、いえ決してそのようなことはありえません！　いえというか、何故そのようなことに！？」

「だって、俺が迷惑かけて仕事増やしてるかもしれないし、怖い目で見られていた気もするし」

「私は仕事に誇りを持っています。それで誰かを嫌いになることはありません！　それよりも！　その……私の顔は怖いですか？」

「いいえ、怖くないです。昨日は俺という突然の侵入者のせいで、気が立っていたのかもしれませんね」

「そうですか。よかったです。……でもシルバーは要らなかったですね」

「いえいえ、仲違いにならずによかったです。じゃあ改めまして、いただきま～す」

それは、二人の壁が無くなった少し遅めの朝食の出来事でした。

Side out

第０２話「可愛いモノは牢屋に入れましょう」（後書き）

感想は随時受付中。

次回予告　ｏｐｅｎ　ｙｏｕｒ　ｅｙｅｓ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｄｒｅａｍ.

「なんちゃったー！？」

「貴方が……私のマスターですか？」

「俺の本能が叫ぶのさ――――この牢屋を壊せと！！」

「いいです！　いいです！　ここにはわけあって入ってますので問題ないです！」

「エンゲージ！」

「なっ！？」

「え？　えっ？」

次回『アリカ姫の味方』

第０３話「アリカ姫の味方」（前書き）

『信じられない事が起きる』

そんなことはまず無い。

でも、彼はそういった世界に来てしまい、

そういった力を手に入れている。

だから、毎日が信じられない光景で溢れ、

また充実感や希望に溢れている。

きっと、最高の夢のように。

第０３話「アリカ姫の味方」

Ｓｉｄｅ　ツカサ

牢屋生活が始まって２日目。
姫様の言葉通りならあと３日ぐらいで調べが付いて出られるんだろうけども……。

「ツカサ様、お食事をお持ちしました」

この人はアリカ様専属の侍女のニーナさん。少し変わったお姉さんです。

「あ、どうも。ねぇニーナさん、アリカ様は何か言ってませんでした？」

「いえ、特に言伝などは預かっておりませんが……調べてるようなのですが。私はただのメイドですので……では、また後ほど片づけに来ますね」

牢屋から出ても良いっていう許可が出ないうちは大人しくしていよう。さて、今日のお昼は、『パスタ・チーズの入ったパン・魚のフライ』　美味しくいただきましょう。

「ん～やっぱり、アレが必要かな」

進めていた食事の手を止め、戦い方を考える。戦い方が分からないからだ。何でも出来るといわれると、何をして良いのか分からないといったところだ。これから始まるであろう戦いに、投影や錬成

だけで勝てるかと言われれば、どうか分からないし……。そこで思い当たったのは大剣だった。ただの大剣ではなく、この衣装専用と言えるＦＦ７ＡＣの合体剣だった。総分離すれば６本から成る合体剣。合体させてよし、分離させて双剣にしてもよし。更にこの剣には魔法の杖、の代わりにもなってもらおう。神に持たされたカードのインストール・召喚の能力も付加させたいと思う。

「ＭＴＧからは、ドラゴン系と、精霊系と、呪文系か……。あとは、仮面ライダーのガンバライドカードに、ＧｕｎｄａｍＷａｒ、それからマクロス７のカードに真っ白な無色のカード……。で、Ｆａｔｅのサーヴァントのタロットカードか……」

無色のカードには説明書きが添えられていた。自分のオリジナルカードを作っていいらしい。絵柄とかは神様クオリティーでデザインもバッチリらしい。

俺はもう一つの疑問に思うカード。サーヴァントのタロットカードを眺めて首をかしげる。他のカードは何となくわかるよ？　でもね、これは何に使うんだ？　聖杯も無いのに召喚できるわけないよね？　そう思いながら、ふと手にした『キャスター』のカードで試してみることにした。

合体剣を錬成（理解・分解・再構築）して鍔の部分にカードの差し込み口を作った。これでカード能力の発動体にもなる。

「あどべんと♪　なんちゃって～♪」

そう言って『キャスター』のカードを入れた。

するとどうしたことでしょう。合体剣が輝き出したではありませんか。

「なんちゃったー！？」

その輝きに目を眩ませ、俺は目を閉じる。

「貴方が……私のマスターですか？」

声がして目を開けるとキャスター。裏切りの魔女である『メディア』さんがいました。通称キャス子さん。ただ違うのは……『ｈｏｌｌｏｗ』で見た若い頃のキャスターさんだ。たぶん、うろ覚えで恐らくだけど裏切りの魔女なんて言われる前の、セミロングの髪のキャスターさんだった。あぁ、なんて綺麗な人だろう。

「……可愛い」

少し呆けてしまった俺に対して、キャスターが何かを呟いた。

「え？　あ、ごめん。呼び出したのは俺だけど、何て？」

「だ、抱きついていいですか？」

わぉ。嬉しいサプライズが起こっているぞ。答えを出す前にしばらく抱きついてキャスターは落ち着いたようだ。……逆にもう少しいいですか？　延長料金払います！

「こほんっ　失礼しました。では、話をまとめますと、この世界には聖杯というものが無く、マスターのお手伝いのためだけに召喚されたと言うことですね？」

「う、うん。不味いかな？　聖杯ないと呼び出しちゃ……」

「いえ、魔力供給に問題ありませんし、確認したところ東洋の『式神』の様な存在なのですから問題はありません。聖杯に関する戦闘意識というものもありませんし――――」

ふむ。式神版のサーヴァントたちか。

聖杯を求めるために戦うということも無いらしい。助かるよ。

「その代わり――――」

ん？

「私たちのそのタロットカードは、失くされたり、破損した場合は使用不可能とお考えください。複製も不可能です」

「だ、大事にするよ。とりあえず他のサーヴァントにも挨拶しといた方がいいか」

俺は残りの6体のサーヴァントを召喚する。

「サーヴァント・セイバー。召喚に応じました」

「ランサーのサーヴァントだ。お嬢ちゃんがマスターか？」

「見目麗しいマスターではあるな。私はアサシンのサーヴァントだ」

「牢屋だと！？　我を呼び出す場所にしては劣悪だと思わんのか！？」

「ライダーのサーヴァントです。マスター命令を」

「ぶるぅぅぅぅぅあああああああああー！！！」

「「「「「「……むっ！！」」」」」」

「ストップ！　マスターの御前です。静まりなさい」
「この魔術師風情が、我に命令をするか……」
「黙りなさいアーチャー。この場ではキャスターが正しい」
キャスターが今にも獲物を刈り取りそうになるサーヴァントたちを止めに入る。アーチャーとセイバーとの掛け合いがあるが、アーチャーは険しい顔をして静まる。強制的な戦闘の意思は無くとも、サーヴァント同士が仲良くするということは難しいようだ。でも、後に「仲良くすること！」の一言で収まった。良いのか？　良いか。
「マスターどうぞ」
「あ、うん。初めましてサーヴァントの皆さん。霧崎ツカサって言います。今回は聖杯戦争というモノは全く関係なく、俺のお手伝いとして召喚されています。何か困ったことがあったらまた呼び出すのでお願いします。自己紹介は特に不要です。全員の真名も分かっています」
「まずはこの牢屋から出るのか？」
「俺の本能が叫ぶのさ――――この牢屋を壊せと！！」
そう言って牢屋を破壊しようとするサーヴァントたち。ヤバい。
「いいです！　いいです！　ここにはわけあって入ってますので問題ないです！」
「そうか？」
「今日の俺は紳士的だ。運が良かったな」

少しシュンとしているように見えるランサーとバーサーカー（？）。それにしても聞き分けいいな君達。とりあえずアサシンは佐々木小次郎の方、『金ピカ』の方のアーチャーが出てきたこと。バーサーカーに関しては『若本ボイス』で最凶キャラなバルバトス様……何故にホワイ？　まぁ、それ以外は普通の第５次聖杯戦争のメンバーだ。

しかし、何でキャスターは若い状態で出てきたんだろう？　後から聞いた話、ルールブレイカーとか、魔法に関しても問題ないらしい。能力は最強状態で若返り？　……嬉しいことしてくれるじゃないか神様。

『英霊エミヤ』がいない事に関しては問題ないかな。俺が投影使えるしね。会いたかったけどね……。別に聖杯戦争するわけじゃないし良いか。

サーヴァントの聖杯で叶える『願い』というものも無いようだ。第５次聖杯戦争ということも経験してないみたいだし。アーチャーとセイバーに関しては第４次も経験してないみたいだから、並行世界サーヴァント。みたいなイメージらしい。正式な召喚じゃないから令呪も無いしね。まぁ、『金ピカ』がセイバーに固執しなくて助かるよ。

とりあえずサーヴァント諸君にはタロットカードに戻ってもらった。合体剣は無色のオリジナル登録用のカードに設定し、カードを掲げ、『エンゲージ』と言えば瞬時に呼び出すことができるようにした。

ちなみに。マスターである俺とのリンクで、俺が男だということはサーヴァント達は分かっている。だからランサーやアサシンが『お嬢ちゃん』とか、『見目麗しい』と言ったのは冗談みたいなものだ……多分。いや、絶対そうだ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　アリカ

ここは会議等を行う部屋。私は側近と数人で書類に目を通していた。

『なら、攻めてきちゃいますよ』

ふと、５日前のあの言葉が思い出された。馬鹿馬鹿しい。子供の戯言だ。

（ツカサ、お前は……）

ガチャッ

「失礼します。グレート＝ブリッジに物資が多く運び込まれている模様です。
いつ攻めてくるやも知れません。すぐにと言うことは無いでしょうが……」

「……そうか、どこからでも構わん、多くの仲間が必要じゃ。手配せよ」

「ハッ！」

ガチャッ　バタンッ

「……子供の戯言か……少し外す」

「ハッ　かしこまりました」

踊らされたのではない。勝手に踊ったのだ。

（何を言う。全てあの子供のせいだ）

あの子は、ツカサは牢屋から出さなければならない。

（敵国のスパイだ。殺してしまえ）

だが、戦争には勝てないだろう。私はここまでだ。

（まだやるべきことがある！）

頭の中はグチャグチャだ。私の足は牢屋へと向かっていった。

どうすれば、どうすれば皆が笑える。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

食事を続けるツカサに対して、ニーナは挙動不審に視線を投げる。

理由は簡単だ。イライラしているアリカ王女殿下が目の前にいるか

らだ。しかし、ツカサは手を止めない。気付いていない訳が無い。そして、ニーナがハラハラとする中、食事が終わった。

「ご馳走様でした。で、アリカ様が牢屋（ココ）に来るなんて初めてじゃないですか？」

ツカサは牢屋にて食事を終わらせると、不遜な態度で目の前にいるこの国の王女へと口を開いた。アリカ王女は少し苛立ちを滲ませながら口を開く。

「……ツカサと言ったな。5日前にお前は『帝国はまた攻めてくる』と言ったな。その通りになっているぞ。お前は占い師か、それとも敵国の者か」

「言ったじゃないですか。アリカ様の味方ですよ」

「その様な戯言はもういい！」

「殿下……」

「そう怒らないでください。では、証拠をお見せいたしましょう」

「証拠じゃと？」

「アリカ様の味方である証拠です。ココから出る許可を頂ければ、お力になります」

「戦場に行くとでも言うのか？　貴様が戦場に行って、何が変わるというのだ。お前のような子供に……。お前のような子供に……子供に何が出来ると言うのじゃ！！」

『あ、そうそう『黄昏の姫御子』の力は使わない様にしませんとね』
（分かっておる！　……分かっておるわ。何を考えているのだ私は！　……ハハハ。そうか、私もアスナ姫を利用していたのか。子供を利用していたのか）

「私は、私はどうすれば良い。子供の甘言に踊らされ。黄昏の姫御子は使えない。結果は明らかだ。私のして来たことは何だったのだ。私は何故生きているんだ！」

そう、完全魔法無効化能力者（マジックキャンセラー）の黄昏の姫御子は使えない。なぜなら、目の前にいる牢屋の中の子供にその存在、能力を知られているからだ。ならば他国にも露見している可能性は高い。この綱渡りを今後も続けるのは危険すぎる。

子供を戦争に利用すること自体は、悪く言えばどこにでもあることだ。だが、黄昏の姫御子は王族だ。そこを、今後の会合で突かれれば終わりだ。『王族の子供を最前線に放り込み防御に使いました』その事実を誰がそれを覆せる。そして現在、巨大要塞グレート＝ブリッジを奪われている始末。そんな状況で、強力な魔法力を有するヘラス帝国に、今の連合国が対抗できる術も道理もない。

「殿下……」

「アリカ様、もう一度言います。ココから出していただければ、力になります」

キンッ

「…もう、よい…出て行け。好きにしろ」

牢屋の鍵が牢屋の中へ放り投げられる。アリカは本気で怒っていた。ツカサにではない。自分に対してだ。踊らされたとしても、踊ったのは自分だ。この子に罪は問えない。ましてや、戦争が目の前にまで迫っているのだ。このような愛らしい子供をなぜ牢屋に入れておかなければならない。言葉では厳しく言ってしまったアリカは自分に嫌悪を抱く。

……全ては私が悪いと。

「……お許しいただき、ありがとうございます。では……」

ツカサは鍵を拾わない。鍵を通り過ぎ鉄格子へ進む。出る手段は鍵だけだ。しかし拾わない。出る手段は鍵だけだ。……本当に？ツカサは一枚のカードを取り出す。何のために？

「エンゲージ！」

その一言はカードを巨大な剣に変えた。そして、左右への二振り。その剣の動作で鉄格子はその役割を終えてしまった。

カラン……カラカララン……

「なっ！？」

「え？　えっ？」

その巨大な剣が出現した瞬間の魔力量に驚いた。

ツカサからの驚きに対しての反応は無かった。そして、ツカサは笑って言った。

「ねぇアリカ様、時間あります？　お出かけしません？　ニーナさんちょっと行ってきますね。あ、アリカ様のローブだけお借りしますね」

「え？　えっ？」

「さ、アリカ様」

ツカサは大剣を横にして浮かせ、大剣の腹に乗り、アリカに手を差し伸べる。

「……う、うむ」

半ば勢いだったかもしれない。アリカは返答し、その手を取っていた。

Ｓｉｄｅ　アリカ

「アリカ様、城下には降りたことありますか？」

「あ、あるにはあるが、ただ通っただけじゃ」

「勿体無い。じゃあ行きましょう」

ツカサは何を考えているのだろう。理解は難しい。でも不安には

ならない。ツカサの笑顔は私を不安にはさせない。とても楽しそうな笑顔だ。私はこの様には笑えない。

「アリカ様、ちょっとココで座って待っててくださいね。すぐ戻りますから」

「う、うむ」

ツカサは大剣を地面に突き刺して、小さい出店のような場所へ駆けていく。大剣からは、尋常じゃない魔力が感じられた。だが、それを忘れてしまうかのように、私はツカサを目で追っていた。

出店は食べ物を売っている店の様だった。ツカサは両手に持つソレを落とさぬよう気をつけて戻ってくる。

「はい、アリカ様。ソフトクリームですよ～」

「ソフト…クリ？」

「冷たくて甘いデザートですよ」

「む、美味しい」

「アリカ様は王宮以外出たことが無いのでしょう？」

「う、うむ」

「あ、溶けますから気をつけてくださいね？　……平和になったら色々旅すると面白いですよ。ココに来るまで俺も少しはブラブラしましたけど、何もかもが新鮮で面白かったです」

「その時は、平和になったときは……ツカサ、お前も一緒に旅をしてくれるか」

私は何を言っているのだろう。自分でも自分が理解できない。

「う～ん。では、可能であれば、お願いできますか？」

「頼んでいるのは私だ。構わん」

「はい。……ふふふ。コレ食べたら買い物に行きましょう。色んなお店があるんです」

「うむ」

そして、城下町を探索していく。

「アレは何じゃ？」

「何でしょうね？」

「では、アレは何じゃ？」

「アレも何でしょうね？」

「ツカサ、私が何も知らぬと思って馬鹿にしておるのか？」

「違います違います！　本当に俺も知らないんですよ」

「そうなのか……？」

色々と城下町を探索し、町を一望できる高台へとやってきた。夕焼けに染まる街並み。行きかう人々はみな笑顔だった。

「面白かったですか？」

「分からぬ。……だが、新鮮だった」

「それは良かった。ねぇアリカ様？　この景色　守らないと、ですね？」

「ツカサ……。そうじゃな」

ツカサは味方だ。私は目に見える証拠はもらっていないが、確信を得た。

ツカサは私の味方だ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ツカサ

――――その後。

切り落とされた鉄格子。それはニーナさんの手によって固定され

ていた。手を離すと鉄格子は地面に落ちてしまう。接着剤が乾くまではその場を離れることが出来ないのだ。

「鉄格子直してくださいよぉ……鍵があるのに切っちゃうなんて……守衛さんに怒られちゃいますよぉ……」

「ごめんなさいッ！」

俺は綺麗に腰を９０度曲げて頭を下げた。ニーナさんの『可愛いモノ』に対する　表に出すことの出来ない怒りが、俺に響いたのだ。

「お、お詫びに一晩抱き枕になって下さ……！！」

「それも　ごめんなさいッ！！」

そして、何か異様な危ないオーラを感じ取り、俺は土下座へと完全移行した。

「じゃあ少しだけ手を貸して貰って良いですか？」

「はい？　手ですか？」

俺はニーナさんに手を取られ手の甲にキスされる。

「うわっ！？　な、何ですか！？」

「あー！！　アリカ様とソフトクリーム食べた上に買い物！？完全にデートじゃないですか！！　ずるいです！！」

「何でわかるの！？」

ニーナさん。それはとても不思議な人でした。

Side out

第０３話「アリカ姫の味方」（後書き）

感想は随時受付中。

次回予告　ｏｐｅｎ　ｙｏｕｒ　ｅｙｅｓ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｄｒｅａｍ.

「……あっ（ぴちゅーん）」

「マスター！？　マスターーー！！」

「何の音じゃ？　……ツカサが……沢山……？」

「「「「「あ、アリカ様」」」」」×１００（つまり５００人）

……パタリ

『俺の歌を聴けぇぇぇーーーッ！！』

≪　――――♪　――――♪　≫

次回『初めてのライブ』

第０４話「初めてのライブ」（前書き）

何でもかんでも『初めて』は怖いモノです。

周囲の目が委縮させ、動きを封じてきます。

でも、一歩を踏み出せば、

貴方が正しいのか間違っているのか、周囲の目が答えてくれます。

仮に「間違いだ」って言われても。

「間違いなんかじゃない」って――――私はそう思います。

第０４話「初めてのライブ」

牢屋生活を終えて、俺は城の一室を貸して貰って生活している。
グレート＝ブリッジ奪還作戦はまだ先になるようで、俺は王国から少し離れた場所で、日々最強の講師陣を相手に鍛えていた。

◆魔法講師キャスターさん。

キュゥゥゥン……

「そうです。そのイメージを大切にしてください。
では、そのまま3分間維持してください」

「は、はひぃ……魔法って大変だ……」

「ふふふ、終わったら休憩にしましょう」

「あぃ……ふぅ……あっとととと。
……ふぅ……難しいな……集中しないとすぐに……あっ（ぴちゅーん）」

「マスター！？　マスターーー！！」

◆戦闘指南Ａランサー兄さん。

ガキンッ！　ギンギギンッ！

「ほら！　『受け』だけだとすぐに詰みになっちまうぜ嬢ちゃん！」
「わっ！　わわっ！　っとぉ！？　あ、痛っ！……ランサー兄～血が出た～……」
ガサガサガサッ！！
「ランサー！！　マスターに何てことするんですか！！」
「いや、怪我もするだろうよ。マスターも、そんぐらいなら我慢しろ。
キャスターは覗き見するぐらい心配なら、そこで座って見てろ」

◆戦闘指南Ｂアサシン佐々木さん

「秘剣！　燕返し！！」
「おぉぉぉ～……？　本当に３撃が同時に……」
「ふふ、どうだ？　教えようか」
「是非！　……えっと……こう？」
「……合体剣（ソレ）でやるのか？」
ガサガサガサッ！！
「マスターの言うことに口出ししない！　言う通りにしなさい小次郎！」

◆料理試食セイバーさん（戦闘指南を含む）

「む、これも美味しい。料理の腕もあげていますねツカサ……（コクコク）」

「セイバーは食べるだけェ……？」

「そ、そのような事は……！

その……そう！　毒見です。ツカサの口に入る物ですから……」

「いや、作ってるの俺だし、更に言うなら、全部食べちゃってるし……」

ジィィィィィ……。

「あぁ～可愛い子が二人で中睦まじくしてる……（はぁはぁ）」

◆資金調達ギルさん（気紛れで戦闘指南を含む）

「またか貴様！　我を何だと思っているのだ！！　くっ！　離せ！」

「い・い・か・ら！！　城下街の『総額１００万ドラクマ・ドリームジャンボ宝くじ』でも当てた方が城から出た後の出費とか楽になるんだから！　何のための『黄金律』だよ！　……ん？　っていうか何で顔赤いんだ？　サーヴァントでも式神でもある奴が風邪とかひくのか？」

「う、うるさい！　ええぃっ！　引っ張るな！」

「離したら逃げだす気だろ？　ほらさっさと歩く！
ただでさえほとんど何も教えてくれなくて見てるだけで何もしてないんだから！」

「マスターの腕を取るなんて……金だけの男のくせに……（ギリギリギリ）」

◆狩猟担当ライダーさん

「戻りました。良いドラゴンの肉が手に入りましたのでアーチャーの倉庫（王の財宝（ゲート・オブ・バビロン））に入れておきました」

「ありがと～お疲れ様～」

「ありがとうございます。しかし……最初のころはバーサーカーとのコンビでやっていましたが、バーサーカーの咆哮でドラゴンが逃げてしまい大変でした」

「まぁ日常では必要なさそうな奴だよな……公の戦闘時とかか？」

「くっ、露出が多い服装でマスターを誘惑するなんて……
それにしても胸が大きいわね……」

と、そんな生活を繰り返している。キャスターさんとの遭遇頻度が多い気がするけど気のせいだろう。ついつい目で追いかけちゃうんだろうな。失礼にあたるから気をつけよう。

バーサーカーのバルバトスは、紳士的（？）じゃない日だと戦闘狂過ぎるため基本的に召喚しない。
そして、各教官から教わったことをそれぞれ影分身で更に復習して深めていく。もちろんギターの練習も欠かせません。現在のところサーヴァント達との特訓で５００人。ギターや音楽の特訓で５００人と、１０００人を半々で分けて特訓中なのです。

「何の音じゃ？　……ツカサが……沢山……？」

「「「「「「あ、アリカ様」」」」」」×１００（つまり５００人）

……パタリ

「「「「「「アリカ様ー！？　に、ニーナさん！！　アリカ様がー！！」」」」」」×１００

「大きな声でどうなされたんですか！？　というか何か声が重なってません……かっ！？　ツカサ様がいっぱい！？　（ブハッ！）」

鼻血を噴水のように噴出させたニーナさんも倒れる。何故に！？

「そうか……分身して鍛えると、一人に戻った時にその分の練習量が集約されるというわけか……変った能力を持っているのじゃな。驚いたぞ」

「びっくりしました～。一人ぐらい居なくなってもバレませんかね？」

バレバレです。何する気ですか。

「それで、音を鳴らしておったが、それは弦楽器か？」

「はい、エレキギターです。色々な音が出せるんですよ」

俺はギターを鳴らし、無線でつながっているアンプから音を出す。

「音楽やられるんですか～」

「練習中なんですけどね。
もう少し上達したら、街でやってみたいと思うんですけどね」

「その時は私も聞きに行こう。声をかけよ」

「は、恥ずかしいですよ」

「何言ってるんですか、もっと恥ずかしいこと私の頭の中でされちゃってるんですから気にしたら負けですよ。私も聞きたいです」

ニーナさんの頭の中で俺はどーなってしまっているんだろう？

俺のギタリストという理想像は布袋さん。ギター弾いて、歌って、軽く踊ってと全てをこなせる心の師匠2だ。バンビーナ♪　最近やっと布袋さんの曲をマスター出来たぞ。とは言っても布袋さんの曲は１０曲ぐらいしか練習してないですけどね。

こっちの世界に来てから約3カ月。その3カ月でギターに使った

時間は1日当たり平均3〜4時間。それを影分身で最低でも500人でやってるから500倍の練習量だ。数え切れないほど指の皮を切った。すぐに回復魔法使って、またすぐに弾きまくる。これをひたすら繰り返した。やっぱりアニソンをメインで練習したけど、大好きなギターでかなりの速さで上達するのが堪らなく楽しかった。

最初は指を見ながら練習して、何度も間違えて、何とかギターは見ずに弾けるようになって行ったけど、ミスはかなり増えて。前・ギター・前・ギターって何度も何度も視線を変えながら練習して、今ではやっとギターを見ずに弾けるようになった。やっぱりミスはするけどね。でもね心の師匠1が言ってた「歌はハートだ！」って。

えー、ここまでが……3か月ぐらい前かな？　なので、この世界に来てから約半年が過ぎていたんだ。遂に俺っちは前を見たまま、更に歌いながらでもギターのミスは激減したのだ。影分身とか絶対音感とか無かったとしたら諦めていただろう。ありがとう神様。そして、ここからが本当の試練と言うのか……。

そう、ついにこの日がやってきた。『本番』だ。俺は錬成して作った音響機材。エフェクターやアンプ。そしてギターをオリジナルの無色のカードに登録し、空飛ぶマイクと歌エネルギー変換装置のビットを作った。これで飛びながらでも踊りながらでも歌えるぞ。

一応、マクロス7の『スピーカーポッド』や、『スピーカーポッドγ（ガンマ）』も用意してあるけど……。

「これに関しては戦闘機とか戦艦向けのモノだから今は使わないけどね」

俺は街の広場にある長椅子に座り、ソフトクリームを食べる。

そして、段々と緊張していく身体。

そんな、少し振るえる身体を隠すようにローブを目深に着込む。

そう、落ち着いてソフトクリームを食べているわけではない。

そもそも食べたかったわけでもない。

「はぁ～怖いな～……

も、もう1個食べたらやろうかな？　あ、もう1個下さい」

「ま、またお嬢ちゃんかい？　そんなに食べると腹壊すぞ？」

何個目のソフトクリームだろうか？

冷たくて甘い。――――その感覚すらも麻痺して来ている気がする。

でもこれで良いんだ。何かで気を紛らわせないと何もできない気がする。

「……あー、あー、あー」

声…よし。指の感覚…よし。天気…よし。風は…穏やか。人ごみ…多し…よし。気持ち…駄目。でも……駄目でも……駄目でも行け！！

「エンゲージ！！」

俺は『ギター&音響セット』のカードを掲げて開始の合図を掛ける。

魔法のように出てくるギターたち。そう、これは魔法だ。

突然の機材の出現に街行く人達が何人か立ち止り、また訝しげな表情で過ぎ去って行く人もいる。

「ふぅ〜〜〜〜」

長く息を吐く。そして、それを取り戻すかのように大きく息を吸う。

気持ち……駄目。駄目だけど……駄目じゃない！！

「お、おりぇの……！」

噛んでしまった。落ち着け。落ち着け……。

あぁ、ローブも脱いでない。

もう一度深呼吸して俺はマイクが無いことに気がつく。

すると、小鳥のような空飛ぶフライングマイクが俺の口元にやってきた。歌をエネルギーに変換する2機のビットも俺の両肩の上をふわふわと浮いて待機している。

「俺の考えでも読めるのか君達は……まぁそう言う設定にしてあるけど……」

マイクとビットは俺の精神状態や思考パターンとリンクされており、歌える状態。歌うという状態になった時に口元へとやってくる。そんな設定だ。

さぁ、今度こそ本当に準備完了だ。覚悟完了しろ。

俺はローブを脱ぎ捨て、ギターを再度構えた。

ギターの伴奏を開始する。……視線が集まり始める。

行くぞ……行くぞ……行くぞ……俺の……俺の歌を……。

『俺の歌を聴けぇぇぇーーーッ！！』

≪ ――――♪ ――――♪ ≫

一気に加速していく空気。さっきまで重苦しかった空気は軽くなった。やり始めてしまえばどうということは無い。今まで練習してきたことが全部出ていく。出せていく。それは、自分だけでは成り立たなかった。見ている人が手拍子をしてくれる。声援をくれる。さっき通り過ぎた人達も戻ってきた。それが俺の心を軽くしてくれていた。いつも以上に上手く弾けている気がする。この高揚感がなんとも心地よかった。

誰かからこんなにも喜ばれたことなんてなかった。この世界に来てから充足感に満たされる毎日だった。俺は今、とても充実した日々を送っている。だから……これから戦争が起こるなんて考えたくもない。

これは夢かもしれない。でも夢みたいに流されてしまってほしく

ない。世界だ。例え夢の中だったとしても、俺は今ここにいる。俺はここにいるんだ。———俺は叫んだ。歌に乗せて。

そして、曲が終わる。

『皆さん聴いてくれてありがとうございました。楽しかったです』

＼　可愛い～！！　／　＼　もっと歌って～！！　／

『あ、ありがとうございます（カァァ……）　そ、その……近いうちに戦争が起こるかも知れません。俺ももっと歌いたいです。俺が戦争から帰ってきたら……また聴いてください』

ざわざわ　と、ざわめきが聞こえてくる。

「戦争に行くのか……？」

「あんなに若いのに……」

そんな声が聞けただけで、嬉しかった。

惜しんでくれる声が、凄くうれしかったんだ。

『しんみりさせちゃってごめんなさい！　最後にもう一曲聴いてください！『ｇｅｔ　ｔｈｅ　ｒｅｇｒｅｔ　ｏｖｅｒ』』

≪　～～～♪　≫

その日、俺は遂に人前で歌ったんだ。

第０４話「初めてのライブ」（後書き）

感想は随時受付中です。

次回予告　ｏｐｅｎ　ｙｏｕｒ　ｅｙｅｓ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｄｒｅａｍ.

≪　～～～♪　≫

「……美しい」

「ニーナ！」

「Ｙｅｓ，　Ｙｏｕｒ　Ｈｉｇｈｎｅｓｓ♪」

「ツカサの食事を３日間無しにせよ！　外出も禁止じゃ！」

「む、このアホみたいな魔力は！？　ツカサじゃな」

「そっか、ツカサもいるんだな。急ぐぜ！」

次回『グレート＝ブリッジ奪還作戦開始』

第０５話「グレート＝ブリッジ奪還作戦開始」（前書き）

記憶に残るほど大々的に褒められたことなんて無い。
それは彼がつまらない人間だったからかも知れない。
今は沢山の人が見てくれる。
それがこそばゆく、とても嬉しかった
彼は心の奥底で願っているのかもしれない。
夢でもいい。夢でもいいから覚めないでくれと。

第０５話「グレート＝ブリッジ奪還作戦開始」

Ｓｉｄｅ　二人の青年

スタッ……スタンッ。

「はぁはぁ……ふぃ～……やっと着いたぁ……」

「かなりの距離　飛んできたから疲れたね～」

「おい、余裕そうだな」

「そう？　こう見えても結構　疲れてるんだけど」

この二人のローブ姿の男はたった今　城下街に着いたところだ。二人は『悠久の風』の伝令役の仕事をしている。普通なら個人の魔法でなく、飛空挺などをチャーターして交通手段を取るのだが、彼らは交通費を上司から受け取った上で、杖で飛んできたのだ。理由は簡単だ。金が欲しかった。その為なら飛んでくるぐらい平気でする奴らでもあった。

彼らが来た理由。それは近くに始まるであろうグレート＝ブリッジ奪還作戦の情報提供や支援の手配をするためである。しかし、彼らが予定よりも早く来た理由。それは――――。

「さて、こっち限定のグッズを買うぞぉ」

「流石にそれはどうかと思うよ？　先に、仕事をした方、が……」
「何だよ、そう言っておきながら早速何を見つけたんだ？　アリカ様の限定フィギュアか？　流石にありゃ高いだろ」
仲間の視線の先には人だかりと歌声が聞こえた。有名人でも歌ってるのかと。人垣の隙間から見えたのは、もちろんその歌声の主だ。それは、変わった弦楽器を弾き鳴らし歌う美少女だった。
≪　～～～♪　≫
「……美しい」
『皆さん聴いてくれてありがとうございました。楽しかったです』
＼　可愛い～！！　／　＼　もっと歌って～！！　／
『あ、ありがとうございます（カァァ……）』
観衆からの声に歌い手は顔を赤らめている。
「なんて純情なんだ……」
青年は衣服の胸の部分を握りしめ、その美少女の顔を恋焦がれる様に見つめる。
「完全にイッちゃってるじゃん……確かに可愛いけどさ……」
『そ、その……近いうちに戦争が起こるかも知れません。俺ももっ

と歌いたいです。俺が戦争から帰ってきたら……また聴いてください』

ざわざわ　と、ざわめきが聞こえてくる。

「戦争に行くのか……？」

「あんなに若いのに……」

前にいる男二人から声が漏れる。そうだ。確かに若すぎる。だけど、紅き翼のナギ・スプリングフィールドも同じぐらいの年齢ではないだろうか？　で、あるならば止めるというのも無粋な事。そう考えた青年は心に誓っていた。

「この命に代えても守って見せよう。あぁ、この気持ちは嘘じゃない」

「もしも～し。あの子って性別は……」

『しんみりさせちゃってごめんなさい！　最後にもう一曲聴いてください！『ｇｅｔ　ｔｈｅ　ｒｅｇｒｅｔ　ｏｖｅｒ』』

≪　～～～♪　≫

全部で何曲歌っていたのかは知らない。全てを最初から聞けなかったことが悔やまれる。もうこれ以上聞き逃すまいと、観衆はその少女に視線を注ぎ、耳を傾けていた。

そして、そのラストソングも終わってしまった。

『本当にありがとうございました！　俺も楽しかったです。（パチ

パチパチッ）どーもー！　近く連合軍はグレート＝ブリッジを奪還しに行きます。頑張って皆が笑って暮らせるようにしますので、安心してください！　では、本当にありがとうございましたー！！』

そう言い残して少女は飛んだ。音楽の機材は一瞬で消え、恐らくあの指に輝く指輪が魔力媒介なのだろう。杖なしで飛ぶ彼女が瞬間的に感じさせた魔力は、聞き惚れていた観衆に希望を与えていた。

「……なぁ、今の魔力」
「あ、やっぱり勘違いじゃないわよね？」
「前回の帝国の侵攻作戦でも　あんなの無かっただろ」
「どれほど凄い子なのかしらね」

噂は広がっていった。歌が尋常じゃないほど巧く、魔力が尋常じゃないほど有り、更に、尋常じゃないほどの美少女だったと。その噂が本人の耳に入るまで、時間はあまりいらなかった。

「聞いたか」
「グレート＝ブリッジ奪還作戦に参加するって言ってたね」
「おいっ、さっさと仕事に行くぞ！」

そして、仕事に意欲を燃やし始めた青年は買い物を後回しにした。

「ね～僕の話聞いてた～？　『俺』って言ってたしさ～……聞いてる～？」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ツカサ

コンコン

「は～い～」

ガチャッ

やってきたのはアリカ様。最近はよく来てくれるのですが……。時には「や、やはり何でも無い」とか、「へ、部屋を間違えた」とかですぐに帰ってしまうこともしばしば……。何も話さずにお茶だけ飲んで帰るということもあるわけですが、今日は何用だろうか？

と、思ってみたものの……何か怒っていらっしゃいませんか？

「ツカサ……約束を破ったな？」

「や、約束？　ちょっ、離れてください。怖いです」

両肩をグワシッと掴まれ身動きが取れません。アリカ様はそれでも離そうとせずに少し顔を赤らめながらも怒っています。マジで何でしょう？

「話を逸らすでない。今日　城下街で一騒動あったそうではないか」

「騒動？　……いや、俺も城下街には行きましたけど……騒動？

黒猫が魚を獲って行ったとか？」

「ほほぅ……白を切るか……」

し、知らない！　俺は本当に何も知らないんだ！　そんな殺される間近の役柄を心の中で演じつつ、やはり思い当たることが無く俺は困惑してしまう。……でもね、犯人は俺だったんだ。

「その騒動は、見たことが無い機材に、見たことが無い弦楽器。そして、この世の物とは思えない美声で歌い上げる。絶世の美少女が現れたそうじゃ」

「ぅえ〝っ！？」

「やはり、ツカサじゃな。その時は聴かせよと言ったはずじゃが……私には聴かせたくないということか……？」

「違います！　違います！　えっと、その、忘れてて……」

「忘れてて！？　私のことを忘れていたということか！？　こっちはツカサの事を忘れることも、考えない時間も無いというのに！？」

ナニカ　オカシナコトニ　ナッテキテナイカ？

「ニーナ！」

ブワサァッ！！

「Ｙｅｓ，　Ｙｏｕｒ　Ｈｉｇｈｎｅｓｓ♪」

室内のカーテンを捲って現れたニーナさん。……いつからいたの！？

「ツカサの食事を3日間無しにせよ！　外出も禁止じゃ！」

「うぅ～可哀想ですが、主人の命には逆らえませんし、苦しむツカサ様を見るのも良いですね！！　……何でもしますから、ご飯を食べさせてください……なーんて言われた日にはもうっ！！　（ムッハー♪）」

「ぬわ～！！　勘弁して下さい！！　死んじゃいます！！　弱っているところへの身の危険もＭＡＸっぽいです！！」

「3日ぐらいでは死にはせん……い、嫌なら聴かせよ。ここで」

「私も良いですか～？　その噂を聞いてから聴きたくて聴きたくて……」

おぉぅ……。

「エンゲージ……」

聴かせたくないわけじゃないんだ。本当に人前で歌うことで頭がいっぱいで忘れてて……それに今の方がハードル高くないか？　二人だけのために歌うなんて……恥ずかしい。

ジャラ～ン♪

でも、やるしかないもんね。……ご飯のためにも！

「じゃ、じゃあ……俺の国の国歌　行きます『鳥の詩』」

≪　～～～♪　≫

（わぁ～……綺麗な声ですねぇ～……）

（う、うむ……これがツカサの……）

……うん、やっぱり歌い始めてしまえば楽なものだ。恥ずかしさよりも圧倒的に楽しいという感情が天元突破していくんだから。音楽ってやっぱいいよね。

パチパチパチ……

「凄く感動しました～。凄い歌ですね～魔力が回復しましたよ～？認識阻害の魔法を長時間使っていたのに。全開ですよ～」

カーテンの場所に隠れていたアレか……。

「あ、アリカ様どうでしたか？」

「う、うむ……また聴かせてほしい。……よいか？」

「……はい！　今度はちゃんと声掛けます」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

月日はまた流れ、作戦決行を明日に控えた夜のこと。

コンコン

「は～い」

ガチャッ

いつものようにツカサがドアを開けるとアリカ姫がいた。

「怪我は大事ないか？」

「治りましたよ～」

「そうか……もう止めはせぬ。止めても無駄じゃろうしな……。明日だが、ツカサは王国軍のとして行くか？　それとも連合軍として行くか？」

「仲間だって言ってくれた人達もいるんで、連合の『悠久の風』として行きます」

「仲間がおったか。……団体の名は何という？」

「紅き翼です。恐らく今は東側にいるんでしょうけど」

「紅き翼……」

「知ってるんですか……」

「……名前だけは聞いたことがある。アルギュレーの辺境の地にお

ると聞いたが、この戦いには必要じゃと言っておったな。故にこの戦いにも呼ばれているそうじゃ」

「すごく強いですよ～最強の集団です。近い内にアリカ様のお力になってくれますよ」

そして、夜明け前。

悠久の風、メガロメセンブリアの派遣軍は揃い踏みをしていた。

「『エンゲージ！』　では、アリカ様、行って来ます」

ツカサは合体剣を召喚し、別れを告げる。

「うむ。……無事に帰ってくるのじゃぞ？」

「ん～努力します」

ツカサは何度も何度も自分のサーヴァント達と戦ってきた。何度も何度も倒されて、怪我して、いつしか１０回に１回は勝てるようになってきていた。普通の戦闘においてツカサが後れを取ることはまずないだろう。しかし、これは戦争だ。死ぬ可能性だってある。戦争とは、そういうものである。

◆◆◆

――数日前。当然ながらツカサは心配された。王国のアリカ姫とメイドのニーナを筆頭に、多くの者から戦争への不参加を言い渡されたが、ツカサは「参加できないなら、ここで死にます」そう言って『セイバー』と呼ばれるサーヴァントを呼び出した。

その白銀の美しい騎士甲冑を纏った少女はまた、ツカサと同じぐらいに美少女だった。ツカサのお姉さんとも取れる身長や年齢差は気にはなるが、今はそれどころではない。そう、騎士甲冑を身に纏っているのだ。

セイバーは剣を取り、ツカサの背後で首に目掛けて構える。介錯だ。

「じょ、冗談はやめよ。ツカサが行く必要はない」

「本気です。お世話になりました。……セイバーお願い」

「分かりました」

チャキッ

「っ！？　――――――」

……ブンッ！

誰もが冗談かと思っていた。しかし、ツカサのサーヴァントであるセイバーは剣を振りおろした。

「――待てッ！！」

ピタッ

アリカ姫は立ち上がり手を振りかざして制止させた。あと一呼吸分遅れていればツカサの首は床に転がっていただろう。ツカサのサーヴァントは本気だった。それはツカサの首筋に流れる一筋の赤い液体が物語っていた。

「……ふぅ……　傷の手当てを……」

「は、はぃ～～～！！　大丈夫ですか～！？」

ニーナはどこに用意されていたか知らないが、医療キットを手にツカサに駆け寄り、すぐさま手当てをした。それを甘んじて受けながら、ツカサは視線を逸らさずにアリカ姫を見据えていた。

「行かせてもらいますね」

「……頑固者め」

「お互い様です。セイバー御苦労さま」

「いえ。ですが、やはりこういうのは良くないツカサ」

そう、本気で演技していたのだ。事前にツカサは寸止めするように言っておいたのだ。『首の皮一枚だけ切る様な寸止めをするように』と。褒められたものじゃないし、バカにしていると捉える者もいるかもしれない。しかし、ツカサは信じたのだ。数カ月とはいえ、一緒にいた時間を。アリカ姫を。――――必ず止める命令を下してくれると。

もちろん、それを知ってアリカ姫は更に怒ったが、すぐに呆れた

ようで、ツカサに歌を歌わせて手打ちとした。

◆◆◆

「あ～ふぅ……　お～　人がいっぱいだぁ。どこまで続いてるんだか」

ツカサは欠伸をしながらその数の多さに驚く、戦争とはこんなにも人を投入するものなのかと。

『静粛に！！　静粛にお願いいたします！！
これより、グレート＝ブリッジ奪還作戦を開始いたします。
ご存知の通り、我々の部隊はココ、西側より攻めます。
東側のメガロメセンブリアからも同時刻をもって作戦を開始いたします……』

まぁ要するに、挟撃するから敵味方の区別をしっかりとして事に当たれということだ。向こうの味方と打ち合っても利害の害しか無いわけだから。説明すら必要ない気もする。まぁそんなことよりもだ……。

『現在、グレート＝ブリッジには、
超弩級戦艦：３　空中母艦：１２
巡洋艦：２４　駆逐艦：３０　鬼神兵：２５
ＡＡ＋クラスの魔法使い：２０　その他の魔法使い等：３００以上
――――――が確認されております』

「おいおい、すげぇいるな」

「東側と合わせれば数では競ってるかもしれないが……」
「あぁ、要塞に陣取ってる分、アチラさんにかなり有利に傾いてるだろ」

ざわざわと不安や疑問の声が上がる。

『では、進軍を開始ししてください！』

Ｓｉｄｅ　ツカサ

（説明というか煽るのが下手だなぁ、あれじゃあ士気は下がるだけでしょうに。……っと進軍開始か。では、しょうがないから俺が士気を上げますか）

俺はファースト剣を抜き、横にして剣の腹に乗り全軍の頭上に浮き上がり叫んだ。

「俺は先に行かせてもらう！　一番槍を貰い受ける！」

ざわざわと全軍は騒ぎ立てるが、俺はその直後、雷速瞬動で空の彼方へ消えていた。

「なっ！　速い！　なぁ、あの子は！？」
「うん、広場で歌ってた子だったよね！」

「あ～もうっ！　急げぇっ！

遅れを取るな『悠久の翼』『連合軍』進軍開始ー！！」

＼　……お、ぉぉおおおおおおー！！！　／

波のように士気は波及して行く。派遣軍も釣られるように士気を上げていた。

雷速瞬動を使えば秒速１５０キロで移動できる。ここからだと１０秒もかからない。だってオスティアの喉元だもの。

斥候部隊やら敵前線部隊が目視で確認できた。俺は雷速瞬動を解除した。

「一視覚強化ー。　えーと、見える大物は……手前に空中母艦：２　巡洋艦：２　駆逐艦：３　鬼神兵：１０　か……先手必勝！　カードドロー！　『仮面ライダー５５５』！」

俺は仮面ライダー５５５の変身ベルト、ファイズギアを召喚した。そして、続けざまにベルトを巻き、変身端末である携帯電話を開き『５５５・Ｅｎｔｅｒ』と入力する。

『Ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ』

「変身！」

『Ｃｏｍｐｌｅｔｅ！』

「行くぜ……（ピピッ）」

『Ｓｔａｒｔ　ｕｐ！』

この様にファイズアクセルを起動させる事で１０秒間のみ通常の１０００倍という驚愕の速さで動く事が出来る加速モード・アクセルモードに突入する。アクセルフォームの動きは周囲のものには殆ど見えなくなるためターゲットとなった敵にはその攻撃から逃れる事ができない。さぁ高速の１０秒間……耐えられるか？

『Ｒｅａｄｙ！　（ピピッ）Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ！』

「ハァァァッ！　ィヤァァァァァーッ！！」

俺はファイズポインターを使用し、まだ数体固まっている鬼神兵に向けてクリムゾンスマッシュを放った。

「『シャドウ・サーヴァント！』『アイシクル・エッジ！』『ファイアランス！』」

変身を解き、一斉に戦艦から放たれる拡散型の精霊砲を回避しつつ、俺はヴァルキリープロファイルの魔法で応戦した。十分通用するんだな。込める魔力をもう少しだけ上げれば『雷の暴風』ぐらいの威力に上がりそうだ。

総崩れを起こす帝国軍。これで鬼神兵を１０体に付近の戦艦を潰した。味方は、まだ来ないか。『スピーカーポッド』をグレート＝ブリッジに撃ち込みつつ東側まで行くか。

ミサイルより爆発力のあるサウンドを聴かせてやるぜ！！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

戦いは始まったばかり、連合軍への被害は０。しかし、敵側は混乱するほどの被害を受けていた。何せ、一人の子供が１０数秒でここに配置されていた鬼神兵に戦艦を全て撃破したからだ。

――――――その頃、東側では。

「なぁ、ナギよぉ　戦力が足りないと思わないか？」

「何とかなんだろ、何せ俺は『千の呪文の男』だからな！」

「また自分で言ってるのか」

「ふふふ、ノリノリですね」

「む、このアホみたいな魔力は……　ツカサじゃな」

「そっか、ツカサもいるんだな。急ぐぜ！」

「「おう」」

「ええ」

「うむ」

「邪魔だぜ……『千の雷！！！』」

近い未来、歴戦の勇者になる魔法使いたちは、

この日　凄まじい進撃を開始した。

第０５話「グレート＝ブリッジ奪還作戦開始」（後書き）

感想は随時受付中です。

次回予告　ｏｐｅｎ　ｙｏｕｒ　ｅｙｅｓ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｄｒｅａｍ．

「やっぱり性別は男らしいですよ？」

「当たり前だ！　あんなにかわいい子が、女のはずがないだろうが！」

「ファンクラブ？」

「えぇ、資金集めにもなりますし。先立つものが無いと戦えないでしょう？」

「案内してくれるのかな？」

「はひ。新米なんですけど、乗ってみませんか？」

次回『戦場の歌姫』

第０６話「戦場の歌姫」（前書き）

戦う事は何も相手を倒すことだけじゃない。

戦うという行為は人によって形が違う。

もしかすると形すら無いのかも知れない。

でも、彼の戦いはきっと、戦いに見えないのかもしれない。

何故なら、彼は歌うのだから。

第０６話「戦場の歌姫」

Ｓｉｄｅ　ツカサ

夜が明ける。それは同時に日が昇り、朝を知らせる。どんなに明日というものが苦しく辛くても、今日というものは終わりを告げ、どんなに今日というものが楽しくても続けたくても、明日というものは来る。何にだって終わりは来る。戦いが終われば平和が始まる。

終わりは来るが、戦いはまだ終わらない。だが早く終わらせて、早く平和にすることは出来るはずなんだ。

「『我放つ、光の白刃！』『ブレイバー！』」

「変わった魔法に剣技を使うんだな。お嬢ちゃんが最近有名な千の呪文の……っと、女の子じゃ違うか？」

声の方へ振り返ると、銜えタバコに白いスーツを着こなすメガネに髭の男がいた。原作のタカミチの師匠。無音拳の使い手、ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグさんだ。

「俺は男です。『バーン・ストーム！』」

「それは失礼。じゃあ千の呪文の男ってのは君なのか？」

「俺はナギさんじゃない。『破晄撃！』」

「そうなのか、おっと。まだこの辺も敵が多いな」

「少し離れてください。巻き込んでしまいますから」

「……ははは、中々に生意気だな君は、フンッ！　（ドゴーンッ！）しかしね、こっちも仕事で来てるんだ。子供だけに任せられないよ」

「当たっても知りませんからね？　『ライトニング・ボルト！』」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ナギ

「おいナギ。アレじゃねえか？」

「確かに魔力は、あの派手な弾幕張っておるところからじゃな。というか何故、魔力反応が２つしかないのじゃろうな……挟撃すると言っておったが、西側の戦力が２人だけということもあるまいに……」

「さぁな、考えても仕方ねぇ！　行くぜ！　『雷の斧！』」

「ふふふ、ノリノリですね」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ツカサ

俺はカードを３枚ドローした。
サーヴァントの『キャスター』『ライダー』『アーチャー』の３枚だ。

「インストール！　……任せてもいいかな？　殺さない程度でね」

「かしこまりましたマスター」

「了解です」

「フンッ　仕方あるまい。服が汚れない程度に手伝ってやろう」

おい金ぴか。何で私服で来た？

サーヴァント達はすぐさま戦闘態勢に入った。キャスターは【高速神言Ａ】のスキルからＡランク魔術を連発していく。ライダーも【騎英の手綱（ベルレフォーン）】を放とうとしているし、アーチャーも何だかんだで、【王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）】で対応してくれる。良い奴じゃん。

そんな召喚をしたところでガトウさんが再び俺に声をかけてくる。

「それは使い魔の召喚か？　連発で高威力の魔法を使い、高位の召喚もこなすとはな……名前を聞いておいてもいいかな？」

「霧崎ツカサです。よろしくお願いしますね。ガトウさん」

「どうして俺の名前を？」

「無音拳のガトウ、結構有名じゃないですか？　さっきから拳をポケットにしまって戦ってる。特徴的な戦い方です。咸卦法も使ってるみたいだし」

「これでも捜査官だからあまり名が売れても困るんだがな……まぁいいか」

ガトウさんは頭を掻くようにして、俺から視線を外した。そんな時、やっと西側のほうも追いついてきた。東側もナギ達の攻勢で問題ないだろう。この戦いの中での最大の戦艦。超弩級戦艦からの砲撃を避けながら、俺はカードの能力を発動をした。『スピーカーポッド・ガンマ』だ。

超弩級戦艦の主砲クラスの大型スピーカーを魔法で浮かせながら、俺は狙いを定める。

「なっ！？　何だその魔法は！　いや、兵器か？」

「俺はこの奪還作戦、もう戦いません」

「ソレをあの戦艦へ撃って逃げるのか？」

「いえ、俺の戦闘力は要らないかな。ってことですよ」

「そりゃあ押し切れるかも知れないが、お前はどうする？　帰るのか？」

「まさか、最後までいますよ。でも……」

「でも？」

「俺は歌う！」

「は？」

俺は『スピーカーポッド・ガンマ』を超弩級戦艦へ撃った。『スピーカーポッド・ガンマ』は超弩級戦艦に突き刺さるが、爆発しない。

「……不発弾か？」

いや、アレはそういうものじゃない。爆発するのはこれからだ。

そう、俺の歌によって！！

「エンゲージ！！　さぁ、ミサイルより爆発力のあるサウンドを聴かせてやるぜ！　うおおおおぉ！　俺の歌を聴けぇえええーーー！！」

≪　２４時間――――――♪　≫

「……本当に歌いだしやがった。……ん？　なんだ？

……これは魔力が回復しているのか！？」

俺の歌は、全長３００キロにも渡るグレート＝ブリッジに埋め込んだスピーカーポッド。そして、スピーカーポッドガンマを埋め込み、宣伝用飛行戦艦へと変貌を遂げた元・超弩級戦艦の広範囲型特大スピーカーにより、戦場に響きわたった。敵側の混乱の声と歓声が交わった気がしないでもない。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ナギ

≪　――――♪　≫

「なんだぁ！？」

「どこの馬鹿が歌ってやがんだ！」

「ツカサじゃ。ホレ、あそこじゃ」

「何ぃー！？」

お師匠が指を指す先には、見たことの無い装置を身につけ、Ｒｏｃｋな曲を歌い上げるツカサがいた。

「……俺、この曲　嫌いじゃないぜ。聞いたこと無いけど」

「まぁ…な。だが敵も味方も混乱するだろうに」

「あの装置が声を大きくしているのでしょうか。
それと、どういう仕組みか分かりませんが、魔力を回復する効果があるようですね」

「なんて奴だよアイツは……俺たちはやることやるぞ！」

「いいのか？　顔見せぐらいしても良いだろう」
「戦争を止めるのが先だ。敵さんもボロボロなのが多い様だが、全て潰すぞ！」
Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「２曲目行くぜー！」
≪　戦い続ける――――♪　≫
「……可憐だ」
「さきほど、メガロメセンブリア連合所属の無音拳のガトウ様との会話を傍受したけど、やっぱり性別は男らしいよ？」
「ふん、当たり前だ！」
「？？？　……どういうこと？」
「あんなにかわいい子が、女のはずがないだろうが！」
「えー……」
「そうと決まったらまずはファンクラブの設立からだ！！　候補に

挙がってたナギ・スプリングフィールドや、サムライマスターの青山詠春、ロリジジイの噂のあるゼクトに、謎のイケメンアルビレオ・イマも作れば俺の気持ちのカモフラージュにもなるだろう！」

「あぁ、変に頭が回ってる……まぁそれも仕事だしいいけど。あーちょっとー！？　まだ戦闘続いてるんだけど……いや、でも歌で反撃も止まってるみたいだね……凄い歌だな～……」

Ｓｉｄｅ　ツカサ

グレート＝ブリッジ奪還作戦は成功した。グレート＝ブリッジは修繕のため、すぐには機能しないが、当面の危機は無くなった。

「久しぶりですね、ナギさん」

「『さん』は余計だ。ナギでいいだろ。……参加してたんだな」

「守らなきゃいけない人がいたんでね」

「お嬢ちゃんの相手ってどんな男だ？」

「はっ倒すぞ、筋肉達磨」

「そういえばよ、ツカサは姫さんに会ったのか？」

「普通会えるわけが無いんでしょうけど」

「会いましたよ。いい人でした」
「へっ、王族なんて堅苦しそうだけどな？」
「あ、そうそう　紹介します『無音拳のガトウ』さんです」
「紅き翼のメンバーだったのか君は」
「あぁ、ツカサは俺たちの仲間だぜ？」
「ってことは、千の呪文の男ってのは……」
「おう！　サウザンド・マスターとは、俺のことだぜ」
「すみません失礼します！　今の話は本当ですか！？」
「あ、誰だよ？　ん？　どっかで見たことあるな、悠久の風の伝令役か」
「紅き翼にこの方も所属していると言うのは本当ですか？」
「ツカサのことか？　まぁ、そうだけどよ」
「これは好都合でした。実はですね……」
話によると、ファンクラブを作るらしい。まだ確定の話ではないが、恐らくこの奪還作戦で一躍有名になったであろう、綺麗どころ、イケメン、漢。の面々に対して、事前にファンクラブ設立の承認をもらいたいようだ。

「それと、ツカサさんですか？　承認いただけるなら是非、俺を会員ナンバー　1番になることも承認していただきたいのですが」
「（さっき言ってたカモフラージュの意味ないじゃん……）」

「……俺は男だぞ」

知っている奴はみんなニヤニヤしている。さぁ最高の幻滅の顔を見せろという嫌な顔をしている。しかし、期待は見事に覆される。

「それが、何か問題でもあるんですか？　というか、むしろバッチこいなんですが……」

「……変態」

「あ、良いですねその顔も！！」

「……お」

「お？」

「お前の頭が問題だー！！」

俺は至近距離で軽い魔法をぶちかました。ゴキブリのように這って戻ってくるが、それはそれは気持ち悪かった。

二つ名はと言うと、ナギは原作どおり敵からは『連合の赤毛の悪魔』と恐れられ、味方からは『千の呪文の男』というのが定着し讃

えられた。ファンクラブも順調に会員を増やしているらしい。

「ねぇねぇアル～。ファンクラブって必要なの？」

「そうですね。資金集めにもなりますし、英雄像というものがないと、人は戦争に対してマイナスのイメージしか持たなくなってしまいますからね。それに、先立つものが無いと戦えないでしょう？」

なるほど。裏では色々と動いてるんだぞ。と、いう感じで、割と深く難しい話だということは分かった。

そして、このグレート＝ブリッジ奪還作戦により、『戦場の歌姫』という二つ名を俺は手に入れた。

――――――、一夜明けて。

俺はニュースを見ていた。ほとんどの時間で報道されているのは『グレート＝ブリッジ奪還作戦』についてだった。

『何と言ってもこの突如として現れた【戦場の歌姫】ですね。性別は男ということですが……如何でしょうか？』

『ここまで来ると神秘的ですね。戦場にいち早く駆けつけ、４割強をこの霧崎ツカサさんが対応したようで、遅れてきた連合軍が来たところで、歌によるバックアップ。何度も報じられており、御存知

の方が多いかと思われますが、彼の歌には【癒し・魔力回復】などの効果があるようで――』

「どの番組もマスターの事ばかりですね。鼻が高いです」
「ほう、我も映っているではないか」
「どこにですか？　あぁ、この豆粒のようなのが貴方ですか英雄王」

「デカイだけが取り柄の女……口に気をつけろ（ビキビキビキ……！）」
「貴方も口に気をつけた方が良いと思いますが？　それにこの後すぐにやる気を無くして、マスターにカードに戻されていたではありませんか」

「このデカブツ女がぁー！！」
「やりますか慢心王？」

「止めなさい！！　マスターの前でケンカなどみっともない」

まぁそんな話は置いといて、戦場の歌姫か～。良いね良いね♪
ファンクラブも昨日設立されたばかりなのに、１億人を突破したらしい。凄い勢いだ。確かこの魔法世界の人口は１２億人ぐらいだから、１２人に１人が俺のファンクラブ会員だということらしい。

だから、外に出れば……

＼　歌ってーーー！！　／

とか

＼　可愛いーーーッ！！　／

とか

＼　サインくださーい！！　／

とかになるわけだ。１日でこれなわけだ。凄くうれしい。……んだけども。こんなに大変だったのか人気者。っていうかアイドルって。全員にサインとか書いてあげたいけど、ファンクラブが出来たことによって、『ツカサちゃんマジ勝手に仕事しないで！』的な感じになった。それが今日の朝の事。

早朝の修行をしているときに、通りかかったファンの人がサインくださいって来て、書いてあげたらネズミ算式に増えていって、歌ったら大盛り上がり。じゃあ、ありがとうございましたー。って逃げてきたんだけど、さっき悠久の風から連絡がきた。『営利目的とした活動をしてください』とのこと。何のためのファンクラブだって事らしい。

そういえばアルも言ってたな。『先立つものが無いと戦えないでしょう？』だっけか……結局戦争やってるんだからお金がかかるって事だ。アイドルも大変です。

あ、もちろんある程度の譲歩はしてもらって、好きな時に歌うのは、ある程度の制限付きで許可が出ました。サインも月に３枚までなら勝手にしてもＯＫらしいです。

と、まぁそんな感じで城の部屋の中に引き籠っているわけですよ。アリカ様とかは忙しいらしい。そりゃそうだ。グレート＝ブリッジが昨日奪還されたんだもの。寝る暇もないぐらい大変らしい。

そんな中流れるコマーシャル。

『――――私たち【水先案内人（ウンディーネ）】が案内します。【オレンジぷらねっと】』

そこに映っていたのは小舟で観光案内をする水先案内人と呼ばれるものだった。

「観光か……認識阻害のメガネでもかけて行ってみますか」

という安直な考えで、地方に浮かぶ【浮島】と呼ばれる場所にやってきた。オスティアとかは浮いてる巨大な島で、下……つまり浮いてない陸地がある。そこへ、この浮島から降りれるらしい。下に降りるとこれまた見事な街並みがある。水の都【ＡＱＵＡ（アクア）】と呼ばれるこの陸地。ヴェネツィアを模した様な街並みに、多くの水路が芸術的だ。

「で、何でゴンドラに乗りに来たのに乗れないんだ……」

「申し訳ございません。本日は当店【オレンジぷらねっと】の予約がいっぱいでして……」

予約が必要なほどに流行っているのか……。流石は最大手（さっき知った）のゴンドラ屋さんだ。あとは有名なところでだと……これか【姫屋】。折角来たんだ。探してみるか。俺はパンフレットを片手にまた歩き始めた。

「姫屋？　あーそれならそこ2本目の路地を左に入って……」

「姫屋？　え？　あっちから来たのよね？　通り過ぎてるわよ？　オレンジぷらねっとから来たんなら歩いて２０分ぐらいなんだけど……」

「姫屋まで行くのかい？　大変だね……ここからだと2時間以上は歩くよ？」

……街並み楽しむために歩いて来たが、もう飛んでも良いんじゃねーか？　流石に路地とかが入り組み過ぎてて道が全然わからない。

「あの～、お困りですかぁ？」

「ん？　あぁ、ゴンドラに乗りたかったんだけどさ、姫屋って店がどこにあるのか分からなくて道に迷ってるんだ……ってゴンドラだ。乗れるの？」

「あ、私シングルなので私だけだとお客様を乗せることは出来ないんです……」

シングル？

「あ、シングルって言うのはコレです。片手だけ手袋はめてるんですけど、半人前の証なんです。この黒いゴンドラもそうです。半人前は一人前の先輩と一緒じゃないとお客様を乗せちゃいけないんです。一人前なら手袋も取れて、白いゴンドラに乗るようになるんです。今も私　練習中でして……」

「マジか……折角空いてるゴンドラ見つけたと思ったら……歩くしかないか？　飛ぶか？　あー面倒くさくなってきたな。……帰るか」

「あの……もし迷惑じゃなければ、友達って事なら乗せても大丈夫なんですけど……」

「案内してくれるのかな？　……ってゆーか友達？　あーお金発生しないってことか？」

「はひぃ。ぶつけちゃうかもしれませんけど……折角来たんですからただ帰るだけなんて悲しいですよね？　まだまだ新米ですけど乗ってみませんか？」

「でも悪いよ……半人前とはいえタダで乗せてもらうなんて」

「う～ん。あ、それじゃあ私は練習のために。お客様はお試しでってことで乗ってみませんか？　やっぱりもったいないですって。この街を経験しないなんて損ですって」

ふむ。よっぽどこの街が好きなんだろうな。無理やりというわけでもないみたいだ。

「じゃあ、少しだけ」

「はい♪　私、水無（みずなし）　灯里（あかり）って言います」

「あぁ、よろしく」

名乗ると余計なことしか起きない。名乗ったら名乗ったで、認識阻害の効果も薄れてしまうだろうしね。ここはスルーさせてもらお

う。

「――じゃあ旧世界から来られたんですか？」

「ん～一応そうなるのかな？　聞き上手だね～」

しかし、綺麗なところだな。水は澄んでるし、時間はゆったりしてるし、すれ違う人みんなが笑顔な気がする。

「本当、ゆったりとした街だな……（ぐ～きゅるるる～……）そう言えば今日は何も食べてなかったかも……」

「寄り道します？」

ゴンドラの進行方向にはじゃがバターの店があった。あ、いいにほい……。

「ほい。食べるだろ？」

「わっ！　良いんですか？」

「友達として乗せてもらってるからね」

「ここのじゃがバター最高なんですよね～（もぎゅもぎゅ）ほふほふ……ん～♪」

「湯気が……むおっ！　メガネ邪魔だな……」

スチャ……

「あ、本物」

「へ？　何が？　お、美味い♪　（もぎゅもぎゅ）」

「戦場の歌姫じゃないですか！？　凄いです！」

「あ、やべ……静かにしてくれ、内緒にしといてくれるかな？」

「あーアリア社長もアリシアさんも何でいないんだろう……」

「おい聞け……全く」

「でも、こんなところにいていいんですか？　グレート＝ブリッジの調査とか復旧とかで忙しいんじゃないんですか？」

「そういうのはそういう人たちに任せてあるから良いの。……お？　浮島のロープウェイ駅だ。戻ってきたんだな……うん、ここで良いや」

「はひ～。すみませんでした。じゃがバターまで貰ってしまって」

「いいさ、友達なんだろ？　また来るよ。そん時は一人前になってろよ？」

「はひ！　がんばります！」

……ＡＱＵＡか。火星ってこうゆうゆったりした場所もあるんだな。

……あ、姫屋……ま、いっか。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「ツカサ……この記事は何じゃ？」

「記事？」

そこには『【ＡＱＵＡ】をお忍びで遊ぶ歌姫』という記事があった。

「あー……他人の空似じゃないですかね？」

「じゃがバターは美味しかったか？」

「そりゃあもう。ホクホクで……あれ？　ちょっと？　何ですか……？　ニャァァァァァァァッ！？」

王家の魔力を込めたビンタは凄く痛いらしい……。

第０６話「戦場の歌姫」（後書き）

感想は随時受付中です。

次回予告　ｏｐｅｎ　ｙｏｕｒ　ｅｙｅｓ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｄｒｅａｍ．

「きゃーーーーーーー！！　ツカサ様ー！！」↑女性ファン

「おおおおおおぉぉぉぉ！！　ツカサちゃーん！！」↑男性ファン

女はまだ良いが、男共は俺が男だと知った上でやってないよな！？

駄目な大人じゃないよな！？

「じゃあアリカ様。助けてもらいましょう」

「……だれにだ？」

「決まってるでしょ？　ピンチのときはヒーローに頼るもんですよ」

「悪いのは全て【完全なる世界】だ」

次回『完全なる世界の影』

第０７話「完全なる世界の影」（前書き）

生きることに対して必ずと言っていいほどに付いて回るモノがある。

したいのに出来ない。したくないのにやらなければならない。

……彼は歌いたかったはずだ。

しかし歌わされるという事はまた意味合いが違ってくる。

それでも、歌わなければならない。

彼の事を待っている人が大勢出来てしまったのだから。

第07話「完全なる世界の影」

Ｓｉｄｅ　ツカサ

ここは王都オスティアの闘技場だ。闘技場は六角形を描くように６つと、真ん中の大闘技場の計７つで構成されている。近頃は目玉になるような大きな試合もないらしく、あまり人も集まらない。そんな中、俺は大闘技場の選手入場口へ誘導され、入場のタイミングを待っている。

『第３試合ここに決着ー！　素晴らしい連撃の攻勢でしたが流石ベテラン拳闘士、冷静な状況判断に反撃のタイミング。実に素晴らしい試合でした。では、ここで次の試合の前にハーフタイムショーに入らせていただきます。お手洗いの方は今のうちにどうぞ、……では今回のハーフタイムショーのゲストは今話題のぉ～【戦場の歌姫】霧崎ツカサさんでーす！！　本日は２曲続けてどうぞ！！』

＼　きゃーーーーーーーー！！　ツカサ様ー！！　／

＼　おおおおおおぉぉぉぉ！！　ツカサちゃーん！！　／

女はまだ良いが、男共は俺が男だと知った上でやってないよな！？　駄目な大人じゃないよな！？　俺は可愛いモノが好きで声援をくれるのはありがたいが、この前の伝令役だったっけ？　あーゆー男が好きな男みたいのは困るぞ？

さて、ここから見える限りで言えば誰も席を立たない。お前ら試合観戦はどうした。トイレはどうした。何故に今、本日最高の盛り上がりを見せた。嬉しいけどね！！

「さぁ　ツカサ様。お願いいたします」

「はーい」

「手を、こうでしたよね？」

「ありがとうございまーす。（パチンッ）行ってきまーす！」

俺は自分のテンションを一気に上げるために、ハイタッチのお願いをしていた。こう、なんて言うか一気に上がるアクションとでも言うのか……まぁオマジナイみたいなものだ。

闘技場に現れる俺の姿を確認すると、更に声は高まり熱気を感じる。この感じは良いね。大好きだ。というか、扇形のステージではなく、闘技場のど真ん中に立たせて、全方位から見られるのは、回りながら歌えばいいのだろうか。まぁ全方位行けますけどね～。

「ふぅ……おっしゃ！　エンゲージ！『行くぜぇ！　俺の歌を聴けぇーッ！！』」

＼　キャーキャー！！　／　＼　ワーワー！！　／

つーか、どうしてこんな事になってんだっけ？　振り返れば事の発端は2日前のアレか。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

――――――遡る事　２日前。

グレート＝ブリッジ奪還作戦が成功して、敵軍を攻め戻し帝国領内へ躍進している最中ではあるが、ようやく一息も入れられるようになった頃。アリカ姫はツカサの部屋に向かっていた。すると、向こう側からツカサが歩いてくるのが見える。

「ツカサ……あ」

アリカ姫の声に返事は無く、ツカサは恭しく頭を下げ、アリカ姫の横をすり抜けて行った。

「お手洗いでも急いでいたとか、小腹が空いて食堂へ行ったとか？」

「ニーナ！？」

「最近な～んかツカサ様の様子が変なんですよね～」

アリカ姫は自分にだけの態度ではないと分かって少しホッとする。

「何か思い当たることはないのか」

「ず～っとお部屋に篭っているんですよ。掃除しに伺っても出て行ってくれなくて、ずっとベッドでゴロゴロと寝返りを打っては『歌いたい～歌いたい～』って唸って……」

「歌いたいとは……確かファンクラブが作られてから規制も出来たのじゃったな？」

「はい。好きに歌う事は出来ず、基本的には営利目的としての音楽活動を言い渡されていますね。少し前に妥協点が出来ましたけど、その妥協点自体の約束も破っちゃいましたからね。あ、いけない。お掃除途中でした。では私はこれで失礼します」

ファンクラブの運営委員の出してきた妥協点と言うのは、営利じゃなくてもライブを行って良いが、その場合は客数を集めても５０名まで、それ以上は警備なども配置しないと苦しくなるため、金銭が発生してしまう。歌えるならと、ツカサはすぐに了解した。しかし、歌い始めた矢先に１００人を越す人員を広場に集めてしまった。その後もどんどん人は増え、その広場に集まったのは１０００人を越えるほどだった。

これにより妥協点は無理だと判断され、運営委員から回される仕事を待つのだが、ツカサ自身の中に束縛されるような感覚があるらしく、更に妥協して、ツカサが歌いたい時に運営委員に申請すると言う非常に非効率的な活動をしている。

コンコン

「……は～い」

ガチャ

「アリカ様、どうしたんですか？」

「大丈夫なのか？」

「はい？　何がです？」

「昼間、廊下ですれ違ってもいつもと違ったであろう。それに、ニーナが掃除が出来なかったと困っていたぞ」

「昼間？　え？　おわっ！　もう夜！？」

気付けば外は真っ暗。と言うことは……夜である。ツカサは自由に歌えない事に少しばかり苦悩していた。人気が出ると言う事は持て囃される輝かしいイメージとは裏腹に管理されるという面がある。食べるモノや生活の仕方も制限されてしまうことだってある。有名人は有名人で大変なのだ。その苦痛の入り口をツカサは味わっていたのだ。

「ご飯食べてないぃ～、気付いたらお腹空いてきたぁ～……。俺、ちょっと出てきますね」

「こんな夜にどこに行くのだ」

「空いてる店探して、ご飯を……」

「では、私も連れてゆけ」

「駄目ですよお姫様なのに～不良ですよ？　というか何でですか？」

「話をしたいだけじゃ」

「はぁ？　じゃあバレないように行きますから」

「うむ」
ツカサは久々にステルス迷彩・ＥＣＳ・ミラージュコロイドの起動をした。
「こちらスネーク。大佐、実は困ったことになった」
「どうしたスネーク。……ほう」
「ツカサ？　誰と、というか何を一人で話しているんだ？」
「ご覧の通りだ大佐。お姫様を城の外まで連れ出さなきゃならん。どうしたら良い？」
「ふむ、いいかスネーク、お姫様の隣で□ボタンを押すと手を繋ぐ、□ボタンを離すと、手も離れる。□ボタンと×ボタン両方押したまま移動すれば走ることが可能だ」
「分かった。やってみよう」
「ところでスネーク。行くならば『ベイトール』という店がお勧めだ。お姫様の口にも合う料理だろう。特に『店長のお勧め』はその時々の　その客に合わせた料理が出てくる。それと、店長には逆らわないことだ」
「分かった。だが、どうして食事の店を探していることが分かったんだ？」
「それは、プレーヤーなら分かることだ」
「プレーヤー？　おい、大佐　俺に一体何を隠しているんだ？」
「これ以上の通信は危険だスネーク。成功を祈る」
「おい大佐、大佐　……ふぅ」
「……なんだか分からぬが、終わったのか？」
「はい、あの独り言をしないと発動できない魔法がありまして、す

みません」

とうぜん嘘だ。ただツカサ自身のテンションの維持のためだ。

「では、お手をよろしいですか？」

「うむ」

こうして二人は警備兵の横を楽々すり抜け、城を後にした。

「初めて私と会ったときも、この魔法で来たのか」

「そうですね」

厳密にいえば魔法ではない。魔法だとしたら魔力感知でバレてしまう。が、魔法であっても魔法でなくても特に意味は無い。

「ここですね。『ベイトール』」

ガチャッ　バタン

「まだ大丈夫ですか？」

落ち着いた店だ。飲み屋の様で騒がしくは無い。良いお店。それが老舗のベイトールだった。

「いらっしゃいませ。おや『戦場の歌姫』様にアリカ王女様ですか」

「……何で知ってるんですか？」

「ニュースで大々的にやってますから。ニュース見ます？」

「いや　いいです。『店長のお勧め』２つもらえますか？」

「かしこまりました」

「で、アリカ様。話って何ですか？」

「うむ、実は決定事項な上に、拒否権が無く申し訳ないのだが、２日後の拳闘士大会で歌って欲しいのだ。要請もきていての。試合の合間に２曲でも構わぬから歌ってくれとな」

用意された仕事。それでも歌わないよりはマシだった。結局は自分の気持ちを切り替えるだけで気持ちよく歌える。それに気付く事が出来れば、また理解出来ればツカサはもっと楽しく歌えるだろう。今の状態だと客寄せパンダの状態ではあるが……。

ガチャッ　バタン

「まだ、大丈夫かな？」

「いらっしゃいませ。どうぞ」

「ほらタカミチ入れ」

「ん？（タカミチ？）　あ、ガトウさんだ。あ、アリカ様　グレー

ト＝ブリッジ奪還作戦で知り合った人です。かなり優秀な人ですよ」
「ん？　ツカサか。ツカサ　俺も仲間になったぞ」
「紅き翼にですか。それはどうも、よろしく」
「失礼、この様な場所でお会いできて光栄です殿下」
「よい。ここでは、ただの客だ」
「紅き翼に入ったガトウさんは何してるんですか？　他の皆もいるんですか？」
「いや、このタカミチ少年と少年探偵団をやってるんだ。ナギ達はアルギュレーの方へ戻って戦線を押し戻す回復行動をしている」
「あぁ、じゃあ別行動で『完全なる世界』調べてるんですね」
「知ってたのか！？」
「存在だけはね、でも誰が関係者とかはあまり知らない。でもかなり根深く入り込んでるんでしょ？」
「あぁ……。殿下この国にもかなり」
「そうか……だが、この話はここまでだ。ガトウと言ったか、日を改めて話を聞きたい。明日城へ来れるか？」
「かしこまりました　伺いましょう。ツカサ、俺とタカミチ少年は少ししたら帝国側にも調査しに行ってくる」

「了解しました〜今後ともよろしく〜」

「そんな事よりもツカサ、先ほどの話じゃが。私もその日は闘技場に行くから頼むぞ」

「いや『そんな事』じゃないでしょう……。むしろそんな事よりも『完全なる世界』でしょう普通」

ツカサはため息を吐きながらお勧めの肉を食べ始めた。

Ｓｉｄｅ　ツカサ

１曲目が終わり、歓声が響き渡る。

あーそうだった。アリカ様に言われて来たんだ。特別ＶＩＰ席にいるもんねアリカ様。当然、相変わらずの無表情だ。……楽しんでるのか分からん。

『では２曲目行きまーす！　一緒に歌ってくださーい！　【Ｃｌｉｍａｘ　Ｊｕｍｐ】』

≪　てーびょーおーしー！！　≫

＼　ワァーッ！！！　／　＼　キャァーッ！！！　／

「相変わらず素晴らしい歌声……僕の気持ちを更に膨らませてくれる歌でした」

「まだ王都にいたのか変態」

「仕事ですから！」

変態は否定してくれると嬉しかったなぁおい。サムズアップやめろおい。

「今日はガトウ様の使いで来たんです」

あー伝令役の仕事って伝書鳩的な事もしてるのね。

「うむ、響いて来たぞツカサの歌。先に戻っておるぞ」

仕事をしてください殿下。仕事でかなり大忙しのはずでしょうが。

「あ、こちらにいらしたんですねツカサ様」

声を掛けてきたのは誘導係のお姉さんだ。何の話かというと、定期的にハーフタイムショー強制参加が決まったということだった。もちろん許可を出したのは、あそこにいる少々急ぎ目に帰っていくアリカ様だ。

「……まぁ楽しんでたと言うことでいいのかな。じゃあ大会がある日は毎回2曲でいいですか？」

「はい。先ほどの運営の方にも話は通してありますので」

……変態め、運営の一人だったか。

あーあ、自由に歌いたいな……。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

後日、ガトウとタカミチは王女の下にやってきた。内容は『完全なる世界』に関連がありそうな人物の報告。最悪の事態を想定した相談も俺に持ちかけてきた。

「グレート＝ブリッジを奪還し、連合が勢いに乗る今、王都オスティアの心配は無いだろうが、それはあくまでも帝国の心配だ」

「裏で『完全なる世界』が絡んでるとしたら、またピンチってことね」

「そうだ。しかし、ピンチだからと言って、また『グレート＝ブリッジ奪還作戦』の時の様に『悠久の風』に王国が支援要請をすれば、メガロメセンブリアは噛み付いてくるだろう」

「人間の黒い部分だけ持ってる様な汚い連中だからな。なら俺たち最強の『紅き翼』に王国が【協力する】って形で、俺たちが王国を助ければいいんじゃない？」

「なるほど、それは名案だな」

「師匠」

「タカミチか、ふむ時間だな。では殿下私たちはこれで失礼します」

「うむ、ご苦労であった」

ガトウとタカミチは帝国へ、他の紅き翼の面々は東にて戦線を押し戻している。そして俺は更なる動きがあるまで歌い続けた。

――――それから数週間が過ぎた。

Ｓｉｄｅ　ナギ

アルギュレー大平原の戦線の回復が加速的になった頃、俺たちは新しい仲間のガトウからの連絡で、一度グレート＝ブリッジにて落ち合うことになった。

「俺の故郷がある旧世界じゃ超強力な科学爆弾が発明されてて、こんな大戦はもう　起こらねぇそうだ。戦を始めたが最後、みんなまとめて滅んじまうからだってよ。だが　こっちのこの戦はいつ終わる？」

俺の言葉は少し荒くなり始める。目の前にはまだ、修復作業が続けられている傷跡だらけのグレート＝ブリッジが煙を上げている。

少し前に奪還したばかりのその要塞は、要塞としての機能を失っているに等しい。俺ら連合の魔法で巨大要塞も形無しになってしまった。これと同じことだろ。

「やる気になりゃこの世界にだって旧世界の科学爆弾以上の大魔法はある。こんなこと続けてどうなる？意味ねぇぜッ！！　まるで……」

「……まるで誰かがこの世界を滅ぼそうとしているかのようだ……ですか？」

ザッ

「ある意味そのとおりかも知れないぞ」

「ガトウ」

丁度良いタイミングでガトウとタカミチが現れた。聞いてやがったな。

「俺とタカミチ少年探偵団の成果が出たぜ。やはり奴らは帝国・連合　双方の中枢にまで入り込んでいる。秘密結社『完全なる世界（コズモエンテレケイア）』だ」

「で？　何だよガトウわざわざ本国首都まで呼び出してさ」

「あってほしい人がいる協力者だ」

「協力者？」

「そうだ」

「「「マクギル元老院議員！」」」

「いや、わしちゃう　主賓はあちらのお方だ。ウェスペルタティア王国……アリカ王女」

「それと俺～♪」

ひょこっ　と、王女さんの後ろから顔を出したのは……。

「「「ツカサ！？」」」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ツカサ

帝国の調査からガトウが帰ってきたら自体は割と深刻な状況になっていた。噛み砕いて言えば、今までのヘラス帝国と連合の戦争は『完全なる世界』が企てていたと言うことなのだ。

もちろん俺は知っていたがね。だが、知らなかった姫様は凹んで

しまった。今までやってきた話し合いなど、欠片も意味が無かったからだ。積み重ねてきた努力が根本から崩されるのは心に深い傷を与えたようだ。

「じゃあアリカ様。助けてもらいましょう」

「……だれにだ？」

声にいつもの覇気が無い。相当応えているようだ。

「決まってるでしょ？　ピンチのときはヒーローに頼るもんですよ。ところでそろそろ解放してもらえませんかね？」

「まだ充電中じゃ」

魔力でも吸い取られているのだろうか？　俺はアリカ様に後ろから抱き締められるような感じの状態でいる。……フラグなのか？……まさかね。

そして、その数日後。

王都にきて紅き翼とアリカ様のご対面というわけだ。元気が無かった姫様も、国のためならばと、気持ちを無理矢理にでも切り替えた。

「気安く話しかけるな下衆が」

虚勢を張るかのように声も張り上げ、失礼なラカンに厳命した。

「どうナギ？　綺麗でしょう？」ボソボソ

「お前なぁ……俺はあんなおっかねぇ女見たコトねぇぞ」ヒソヒソ

「ツカサ、何を話している。私の傍に居れ」

「あ、すみません。久しぶりの再開につい」

「でも仲間ですよ仲間。最強の仲間達ですよ～」

「私はまだ信用し切れん……ツカサの仲間である事は分かるが……」

「アリカ様。どんな事があっても俺はアリカ様の味方です。悪いのは全て【完全なる世界】ですから。ね？」

「う、うむ……」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

第07話「完全なる世界の影」（後書き）

感想は随時受付中です。

次回予告　ｏｐｅｎ　ｙｏｕｒ　ｅｙｅｓ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｄｒｅａｍ.

「風邪をひかぬようにな。私の事は常に考えているようにな。それから――――」

「は、はぁ……」

大分おかしなことになってないかこれ？

「ん？　サインならやらないぞ」

「何故じゃ！？　妾は会員ナンバー3番じゃぞ！？」

遂に、あの娘も登場！！

「いいぜ。ツカサが騎士になるなら、俺達の杖と翼もアンタに預けよう」

「いやっ！　ちょっと今のは違くて……！」

騎士にしてしまえばこちらのモノじゃな……ふふふふふ。

次回『姫騎士の誕生』

第０８話「姫騎士の誕生」（前書き）

歌う事。それは重りの付いた鎖を引き摺る行為だった。

歌う事。それは仕事になってしまっていた。

歌姫。それは飼い馴らされたカナリヤのようだった。

それでもカナリヤは歌うことしかできない。

ならばと、カナリヤはその形を受け入れ、翼を広げることにした。

そして、籠は壊れ始めていた。

第０８話「姫騎士の誕生」

Ｓｉｄｅ　ツカサ

悠久の風から仕事が来ない。つまり休暇中は、『完全なる世界』についての内偵調査チームとバカンスチームに分かれて行動を進めていた。

「ツカサ、買い物に出かけるぞ」

アリカ様も少しは元気が出てきたようだ。しかし、

「ごめんなさいアリカ様。俺は、これからライブがありまして行けません。ナギ～アリカ様の護衛をお願いできる？」

「あ、おい　ツカサ！？」

「姫様？　これを機会に仲良くなってください。アリカ様の協力者なんですよ？　こちらから『オスティアを助けてください』ってお願いしてるんですよ？　それに俺がライブに行くのはアリカ様のせいでもありますよね？」

「む……それは分かるが……私はツカサと―――」

そう、定期的な闘技場でのライブはアリカ様が勝手に申し込んだ仕事だ。

「呼んだか？　俺が何だって？」

「しかし、そこまで言うなら……ナギと言ったな　買い物に付き合え」

「買い物に付き合え？　何で俺がッ」

バチーン☆

はい、王族の平手打ち入りましたー！！

ラカンの笑い声が遠くから聞こえるが気にしない。まぁ、楽しんでくるだろう。

――――――歌う事がわずかに重たい。

俺はあの日、戦場で歌った。そんな俺の歌で皆は希望を持った。持ってくれたんだ。そして、【戦場の歌姫】という二つを貰い受け、だからこそファンクラブが出来た。凄く嬉しい事だ。

でも、それに呼応するように歌う事に制限がついた。ただ歌う事は難しくなった。お金を取って歌う。それが仕事だ。俺はただ歌いたいだけだったのに。歌う事が少し重く感じ始めた。歓声は嬉しい、でもただ聴いてもらう事は叶わず、何かの対価が必要になってしまう。基本的にはお金だ。

ファンレターというものを日々多く貰う。その中に、『無理してお金を貯めてライブに行く』という内容のモノがたまにある。当然

もっと穏やかな文章だ。でも俺の眼にはそう見えてしまう。『お金があってもチケットが手に入らない』と言うのも見かける。

プロとしての意識が欠けている。そう言われればそこまでなのかもしれないが、プロと言う自覚なんてものはない。俺自身プロだなんて思ってないからだ。だから、お金を取って歌うという事に疑問を感じ、重苦しく思うのだ。

そのお金はと言うと、何割かが俺の口座に入り、何割かが戦争などに注がれ、何割かがスタッフなどの給料に行き、何割かが会場などの使用料などに充てられ、何割かが積み立てられる。仕方のない事だって言うのは分かる。

最初は何度も自由に歌わせて貰えるように頭を下げた。しかし、歌ってしまえばありがたい事に無数の観衆が出来上がる。でも、それによって交通の妨げや、それを整理する人の問題などが浮かぶ。仮に、急ぎで医療関係の魔法具を運んでいる便があったとする。それを妨げ、人の命にかかわる事にもなりかねない。

――――――俺にとって歌う事は、重くなっていった。

＼　ツカサちゃーん！！　／

≪　――――――♪　≫

でも最近考え方が変わってきた。受け入れてしまおうかなって。縛られる事は仕方が無いって。歌う事が俺を縛ると言うなら……それでも俺が歌う事を皆が望むと言うなら……全部俺が背負ってやるって。チケットが手に入らないなら、その分多くライブをして、チケットが高いなら俺の給料を下げて貰ってでも安くして貰おうと。

闘技場の真ん中で歌うことに変わりは無い。そのため相変わらずゆっくりと回りながら歌っている。歓声は鳴り止まない。俺の歌の力なのか、それとも二つ名などの珍しさからなのか。

それでも求められるなら俺は回り続けよう。歌い続けよう。

「お疲れ様でした」

「あ、どう…（ズズンッ）…も？」

「にゃ、にゃんですかぁ！？」

誘導係のお姉さんは噛みながらパニくっている。しかし、俺に対して萌えポイントを稼いでも無駄だお姉さん。

『今の震源について原因を調べております。危険ですので慌てず……』

アナウンスが流れる中、俺は、

「あぁ、アレか」

と冷静になっていた。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「……で、貴様は一昼夜アリカ王女殿下を連れ回した挙句、その敵本拠地とやらを壊滅させてきたのか！！」

「まぁ……あとは警察に任せて来たけど」

「敵の下部組織を潰しても意味はないっ！　何の為に秘密裏に調査してると……大体　万が一　王女殿下にお怪我でもあったらどうする気だ！！」

「でも姫さんノリノリだったぜー？　『楽しかったー』とか言って」

「嘘をつけ！」

「詠春さーん」

「あのコワイ冷血お姫様が今廊下で僕に向かってニッコリ…僕ビックリしちゃって…なんかナギさんにお礼を伝えて　だそうです。確かに笑いましたよねっ」

「うむ驚いたのじゃ」

「な？　それに…ちゃんと証拠も見つけてきたぜ」

「な…それは…」

Ｓｉｄｅ　ツカサ

「あの証拠があれば戦を終わらせられるのじゃな？」

「ま、多分な」

「では、それは主に任す。下がるがよい」

帝国の第三皇女殿下。つまりテオドラに接触しに行くアリカ様。それを見送る俺とナギ。はて？　心配だとか心配じゃないとかの会話があった気がするわけだが、それが無い。というかナギは下がれと言われて部屋に戻って行った。

「あんな馬鹿共と一緒にいるツカサの事が心配じゃが……歌は中継で聞いておるからな」

「へ？　あ、はい」

「風邪をひかぬようにな。私の事は常に考えているようにな。それから―――」

「は、はぁ……」

大分おかしなことになってないかこれ？

そして姫様は帝国の第三皇女・テオドラに接触しに行った。ナギたちはマクギル元老院議員に連絡を取り執務官の弾劾手続きを取っ

てもらうため、マクギル元老院議員のもとへ向かった。

そして、元老院議員の部屋が爆発などを起こし始めた。俺は今フェイトとは会わないほうが良いだろう。つーわけでタカミチ達の退路を確保せにゃならん。

「ツカサ！　追手が来る！！」

当然のことながらただの警備の人が多いため、攻撃なんてするわけには行かない。

「あいよ、任せなさい」

「お願いします！！」

詠春は峰打ちである程度の兵士を気絶させていく。タカミチやゼクトは走りぬけていく。さて、今回ばかりはしゃーないでしょ？自由に歌わせて貰うぜ？

「エンゲージ！　『俺の歌を聴けー！！』」

≪　Ｄｏｎ'ｔ　ｓｔｏｐ　ｍｙ　ｌｏｖｅ～♪　≫

＼　戦場の歌姫だー！！　／

＼　歌姫が出たぞー！！　ヒャッハー！！　／

＼　ヒーハー！！　／

＼　キャーッ！！　サイコーーー！！　／

「な！？　どけ！！　どかないと逮捕するぞ！？　くそっ！！」

「こちらＡ地区！！　至急応援をよこしてくれ！！　【戦場の歌姫】

の路上ライブで一般市民があふれ出して反逆者たちを追えない！！」
『何！？　すぐ行く！！　色紙色紙ー！！』
『花束も用意しろ！！』
「そーじゃねーだろー！！　応援をよこしてくれ！！」
『おうよ！　ツカサちゃんの応援にすぐ駆けつけるぜ！！』
「ばかやろー！！　俺だって応援したいわー！！」

こんなもんで良いか？　結構　時間も稼いだしあいつ等も逃げ切ったろうな。

「ツカサさんの歌サイコーですよね！！」
「うむ、聞いてて全く飽きがこぬな」
「花束買ってきたぞー！！」

「逃げろや！！」

何してんのこいつ等！？　つーか一番まともなはずの詠春がアホになってないか！？

———さてさて、事態は一変して、罠に嵌った俺たち紅き翼は犯罪者になった。そして、黒幕としてアリカ様とテオドラも捕まってしまったようだ。想定（げんさく）の範囲内です。俺はと言うと歌ってる場合ではなくなったので、暇な時間は修行を積んでいる。最近はランサー兄さんとセイバーのコンビネーションから１０本中３本は取れるようになってきた。そんな日が続いて数カ月ほどだろうか？　やっとこさアリカ様達の居場所が分かったので助けに来ました。

え？　場所知ってるだろうって？　『ナントカの迷宮』って事は

知ってたけど、「迷宮だけじゃ分からん！」とナギに怒られた。覚えてないよそこまでさぁ……。『夜の迷宮』だったのね。

「行くぞ嬢ちゃん！　オラァ！！」

「っとぉ！　そりゃ！」

ガキキィンッ！

「行きますよツカサ」

ガキンッ！！

「重っ！　ん～ショッと！！」

ランサーとセイバーのコンビネーションを双剣にて何とか対処する。常に急所狙いの修行のため、ライダーとキャスターとアサシンの3人が常に止められるように配置している。

「来ましたよマスター」

「はーい！　っしょっと！」

「ふむ。良い頃合いだろうな。そこまで！」

キャスターとアサシンが俺達を止める。ナギ達がアリカ様達を連れて、ココ秘密基地に戻ってきたようです。あれがテオドラだな。可愛いね～。もう、あぁいうのに弱いのよ俺。

「何だ　これが噂の『紅き翼』の秘密基地か！　どんな所かと思えば……掘立小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何期待してんだ　このジャリはよ（ビキビキ）」

「何だ貴様　無礼であろう！」

「そいつは馬鹿なんだ。許してやってくれヘラス帝国第三皇女殿下」

「許せるかこんな無礼…も…の！？　お主は……」

「俺は霧崎ツカサだ」

「戦場の歌姫か！　本物なのじゃ！」

「ん？　サインならやらないぞ」

「何故じゃ！？　妾は会員ナンバー3番じゃぞ！？」

欲しいのかよ。会員なのかよ。つーか1桁台かよ。すげーな。

「では、噂の歌声を聞かせてくれ」

「歌いたい時に歌う、それが歌だ！」

「よく分からん！！」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「あのやけに元気な少女が……」

「ええ、ヘラス帝国第三皇女ですね。アリカ姫と交渉の為出向いたところ一緒に敵組織に捕縛されていたのです」

「だけど確かに掘立小屋みたいだよな、ここ」

「あぁ、ツカサはこのアジトは初めてでしたね」

「うん初めて来たね。でも確かにアリカ様に失礼かな？　姫様のテオドラにも失礼かもな。よし、造ろう」

「「「「は？」」」」

ツカサは両手を合わせて、掘立小屋に触れ、ペンションに見える素敵秘密基地に錬成した。

「なんでやネン」

これにより詠春が少し壊れた。

「これで満足かな、テオドラ」

「『テオ』で良いぞツカサ。ツカサは歌うだけではなかったのじゃな」

「大抵のコトは出来ると思うぞ」

「というか、何でツカサは殿下にはタメ口で、アリカ王女には敬語なんだ」

「歳、でしょうかねアリカ様はお姉さまで、テオドラ様は友達といった感じなのでしょう」

Ｓｉｄｅ　アリカ

「さーて姫さん。助けてやったはいいけど、こっからは大変だぜ？連合にも帝国にも……あんたの国にも味方はいねぇ」

「恐れながら事実です、王女殿下。殿下のオスティアも似たような状況で、…最新の調査ではオスティアの上層部が最も『黒い』…という可能性さえも上がっています」

「やはりそうか……。しかしな。味方ならおるぞ。ツカサ……我が騎士よ」

そう不思議そうな顔をしないでほしいのだが……。

「……『騎士』って俺が！？」

「うむ。連合に帝国……そして我がオスティア。世界全てが我らの敵という訳じゃな……。じゃが……ツカサの味方であるお主ら『紅き翼』は無敵なのじゃろ？　世界全てが敵……良いではないか。こちらの兵はたったの８人。だが最強の８人じゃ。ならば我等が世界を救おう。我が騎士ツカサよ。我が盾となり我が剣となれ」

「あるぇー……？」

と言いつつ、ツカサは膝を着いて騎士の座を受け入れた。

「いいぜ。ツカサが騎士になるなら、俺達の杖と翼もアンタに預けよう」

「いやっ！　ちょっと今のは違くて……！」

騎士にしてしまえばこちらのモノじゃな……ふふふふふ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ツカサ

「やはりそうか……。しかしな。味方ならおるぞ。ツカサ……我が騎士よ」

は？　……騎士！？　ナギのはずでしょ！？

「……『騎士』って俺が！？」

「うむ。連合に帝国……そして我がオスティア。世界全てが我らの敵という訳じゃな……。じゃが……ツカサの味方であるお主ら『紅き翼』は無敵なのじゃろ？　世界全てが敵……良いではないか。こちらの兵はたったの８人。だが最強の８人じゃ。ならば我等が世界を救おう。我が騎士ツカサよ。我が盾となり我が剣となれ」

「あるぇー……？」

『あるぇー』と言いつつも結構ショックを受けている俺は、膝が折れてしまう。何とか両膝を着かずに片膝で済むが……。

「いいぜ。ツカサが騎士になるなら、俺達の杖と翼もアンタに預けよう」

何言ってんだこの赤毛のアホは……ってちょっと！？　人の肩に剣を捧げないでもらって良いですか！？

「いやっ！　ちょっと今のは違くて……！」

あぁ駄目だ。アリカ様のこの眼はもう何も聞いてない眼だ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

それは、新しい建物に変わっているアジトで、頭脳労働担当者た

ちが今後の事を話し合っている最中の出来事だった。

「ん？　どこへ行くのじゃツカサ？」

「ゲリラライブだ」

「おまっ！　馬鹿か、敵に居場所を教える様なもんだろ！」

「私も今回は賛成出来ませんね」

「もし、ライブで仲間を増やせたら？　寧ろ聴いた奴ら全てを仲間に出来たら？」

「不可能だろ、夢物語じゃねぇんだぞ？」

「私はツカサなら出来る…気がする」

「ほらアリカ様のお墨付きだ。テオ、生で聴きたいって言ったよな？　行くぞ」

「え、遠慮しようかの。敵に囲まれてまでは…ハイリスク過ぎる」

「絶対大丈夫だって、もし何かあっても命がけで守るよ」

子供の姿をしたツカサが言っても説得力の欠片も無いが、あれだけの魔力を持つ者だけに、否定は仕切れない。

「き、傷一つでも付けたら、責任をとってもらうぞ？」

「決まりだな」

「あ、いや、今のは無しじゃ！　普通そこは断るじゃろ！？」

「まぁ、俺はマジだ。味方に出来る奴は味方に付けて、戦で儲けてる奴ら、マフィアに役人に商人ってところか、そいつらを倒していけば、話は楽に進むだろ？　違うのか？」

「いや、それはそうだが……」

「良いのではないか？　ツカサやってみせよ。だが、ツカサは私の騎士だという事を忘れる出ないぞ？　必ず生きて戻る事を約束せよ」

「……はい」

そう、俺はこのメンバーの中ではすでに、『戦場の歌姫』と言う認識と共に、『アリカ王女殿下の姫騎士』としても認識されてしまっているのだった。

「どこだ？　どこで間違えたんだ？」

第０８話「姫騎士の誕生」（後書き）

感想は随時受付中です。

次回予告　ｏｐｅｎ　ｙｏｕｒ　ｅｙｅｓ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｄｒｅａｍ.

≪（キラッ☆）　≫

「……本当に歌い始めおった」

歌う事に疑問は抱かなくなった。そう！　籠から解き放たれた鳥は大空を飛ぶ！！

「で、では妾の騎士にもならぬか？」

「駄～目☆」

これ以上フラグを立ててたまるか！！

「最奥部の……墓守り人の宮殿か」

「よし　連合・帝国・アリアドネーに声掛けて決戦と洒落込もうか」

決着の着く事のない決戦にツカサは全力で挑む事を誓う。

次回『敵を仲間にしよう全国ツアー』

【座談会のコーナー】

はい。いかがでしたでしょーかー？　夢無き者は夢を見るｖｅｒ．５の第８話でした～。結構変動指数の高い回のお話でしたね。

前回の次回予告に騙された方々～挙手！　……ひーふーみーよー結構おるなぁ～？　ぐはははは騙されおって！！　『テオドラの受難』なんぞ前回と同じではないかｗｗｗ

これは『Ｖｅｒ．５』ですから？　結構変わりますとも。ここからも割と変わりますよ。一応、前回の後書きも修正しました。

さて、もしかするとの話なんですけどね？　可能性の話ね。

このｖｅｒ．５　学園編が始まらないかも？

……アイディア等もお待ちしてます。

第０９話「敵を仲間にしよう全国ツアー」（前書き）

枷は外れた。

戸惑いながらも、声を出す。

響き渡る声。

そう、自由の翼を得た鳥は、

どこまでも飛び歌う事が出来るのだ。

第０９話「敵を仲間にしよう全国ツアー」

これは、アリカ姫とテオドラを救った後の物語。ツカサは全て敵という状況を歌の力で味方にしようと考えていた。仲間からは反対の声が上がる中、アリカ姫だけは賛成という形を取った。そして、テオドラは「歌聴きたいんだろ？」と、ツカサと一緒に行動する事になってしまったのだった。

Ｓｉｄｅ　ツカサ

「ハンカチは持ったか？」

「……はい」

「お金は大丈夫か？」

「……はい」

「寝癖がついておるぞ……ふむ、良いだろう」

「……ありがとうございます」

「では必ず戻るのじゃぞ？」

「……Ｙｅｓ，　Ｙｏｕｒ　Ｈｉｇｈｎｅｓｓ」

ってな感じで俺は秘密基地を出た。おかしーねー。おかしーよー。

何故に俺がアリカ様の騎士になったんだ。ナギでしょ？　ナギのはずじゃん。しばらくそんな感じで呆けて飛んでいると、後ろのテオドラから声がかかった。

「や、やはり引き返さぬか？」

「何いってんだよ。帝国とも連合とも本当は戦う理由なんて小さな諍いからなんだろ？　悪いのは『完全なる世界』だ。なら他の連中と戦うなんてくだらねぇ」

「いや、でものぅ……」

「悪い奴らはジャックやナギ達がやってくれる。それの選別は頭脳労働担当のアリカ姫やアルとかがやってくれる……少し前に拾われて来たクルトも秀才の部類だ。頭脳労働だな」

「クルトの奴は好きになれなさそうじゃが……妾も頭脳労働が良かったかの……」

「何言ってんだ。歌った後の話し合いとかはテオドラの仕事だ。頭脳労働の仕事だぞ」

「いや、そうでは無くてだなぁ……」

テオドラは落ち込みながらも落ちないように俺の肩に掴まり、大剣の腹に乗っている。そして———

「みろ、メガロメセンブリアの艦隊だ。よしテオ、認識阻害魔法を解除するぞ。エンゲージ！」

俺はギターのカードを翳し、召喚の呪文を唱える。

「な、何をする気なのじゃ……？」

「言っただろ、ゲリラライブだ。『エネルギーフィールド』……このフィールド内なら、どんな攻撃も防げるから安心しろ。それに、特等席だ。ここから出るなよ」

≪　――あなたと生きたい♪（キラッ☆）　≫

「……本当に歌い始めおった」

そりゃ歌うさ。お尋ね者の俺達だ。会場の予約なんて入れられないし、そもそも悠久の風の変態マネージャーとかも連絡は取ったら不味い状況だ。というわけで枷は外れたも同然……だよね？　自由に歌っても良いよね？　もう歌ってるけど……うん。答えは聞いてない！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　変な髪形の男……つまり、リカード。と、その部下達。

≪　――――♪　≫

バンッ！！

「リカード艦長！」

「あぁ聞こえてる。どこの馬鹿だ？」

「ご存知ないのですか！？　彼女こそグレート＝ブリッジ奪還作戦を機に、スターの座を駆け上がっている『戦場の歌姫』霧崎ツカサちゃんです！」

コイツはこんな部下だったか？　グレート＝ブリッジ奪還作戦から変わったよな。そういえばファンクラブに入ったとかどうとか騒いでたな。

「あぁ、奪還作戦の時の……。あん時とは随分印象の違う歌だったから分からなかったぜ、行くぞ」

「やはり、逃亡者ですからね。捕縛しますか」

「は？　馬鹿かお前。逃亡者が目立つようにココに来るか？　歌を聴いて、話を聞きに行くんだよ」

「流石リカード艦長　漢気溢れています！　そこに痺れる憧れるぅ！　さぁ花束を用意して行きましょう！！」

変わったというより異常だ。まぁ、あの歌声には魅かれる物があるのは確かだ。

≪　――――♪　≫

＼　パチパチパチパチッ！　ピーピー！　／

＼　ツカサちゃーん！！　好きだぁー！！　／

「降りて来い！　話しを聞こうじゃないか！」

まぁ『完全なる世界』の事だろうな。ここ、メガロメセンブリアにも傀儡になっている奴も少なくは無い。全く、嫌な世の中になったもんだぜ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「降りて来い！　話しを聞こうじゃないか！」

「お、あの変な髪形はリカードだな」

「知っておるのか」

「確か、スヴァンフヴィートの艦長だ。さて、話し合いは任せるぞ」

「ハラハラしたのじゃ」

「話し合いでハラハラしないなら大した者だ」

「その、（良い歌じゃったぞ？）」

「ん？　何か言ったか？」

「っ！　何でもないのじゃ！」

「そうか、良し行って来い」

話し合いはすんなりと終わり、捕縛はされず逃げられてしまった。
という形を取ってもらった。

「テオドラ、次行くぞ」

「次は、アリアドネーってところか？」

「スヴァンフヴィートの艦長、リカードか」

「俺の事　知ってるのか……お前は何なんだ？　帝国の皇女様を呼び捨てにするわ、歌で俺の部下たちを虜にしてしまうわ、俺にもタメ口とか」

「お前が偉かろうが知ったことじゃねぇ、俺に関係ないからな」

「ハッ　違いねぇ。気に入ったぜ。爺どもは頭固いだろうけどな、話は押し通してみるぜ。それとな……良い歌だった。今度ゆっくり聞かせてくれ」

「平和になったら聴きに来い。じゃあな、ほら　テオドラ」

「うむ、では頼むぞリカード」

「おう皇女様もがんばれよ」

Ｓｉｄｅ　テオドラ

「ふふふ、ツカサの歌があれば大丈夫なのじゃ！」

「最初と言ってる事が違うじゃねぇか、まぁ良いけどな」

命がけで守ってくれるとも言ったしのぅ。くふふふ～。

「どうした。ニヤニヤして」

「くふふふふ、何でもないぞ。次はどこへ行くのじゃ？」

「帝国はテオの国だし後回しが良いかな。今はアリアドネーだな」

「強力な武装中立国家とも言われる魔法学術都市アリアドネーか。手を貸してくれるかのぅ？　権力は意味が無いところじゃぞ？」

「今回はテオの力は使わない。俺の歌だけだ。最悪の場合は戦うかもしれないがな」

「守ってくれるのじゃろう？」

「あぁ、もちろんだ」

「で、ではアリカだけでなく妾の騎士にもならぬか？」

「駄〜目☆」

「よし、では……って何故じゃ！？」

「騎士になっちまったのも偶然というか？　勢いというか？　わけが分からないというか？　とにかく急ぐぞしっかり掴まれ」

「おい、説明せぬか！　うわっ！？」

むぅ……妾は諦めぬぞ〜！！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

シャーギャー

「ここがアリアドネーか　つーか、さっきから何の音だ？」

シャーギャー

「どこかで聞いた事がある気もするが……なっ！？　何故ここに居るのじゃ！」

テオドラがこの音を聞いた事があるのも当然だった。聞こえた音の正体は鳴き声。その姿は間違いなくヘラス帝国の聖獣。まるで何百年、何千年と生きた大樹が世界一の名工によって削り出されたかのような、そんな美しさがあった。

それは、古龍（エインシェンドラゴン）・龍樹（ナーガシャ）だった。

「あ～、龍樹じゃ～、妾は美味いのかの～」

「お～い帰ってこーい、自分の世界に行くんじゃねぇよ。これだけデカイと聞かせ甲斐があるぜ、『エネルギーフィールド』ここにいろよテオ」

「はっ！　ま、まて、ツカサ待つのじゃ！　流石に龍樹相手では歌なんて歌う意味は……！」

「やってみなくちゃ分からねぇだろ。アイツにも俺の歌を聴かせてやるぜ！　アイツにも伝わるはずだ。さて、龍樹……俺の歌を聴けぇー！！」

≪　Ａｎｇｅｌ　ｖｏｉｃｅ　♪　≫

ギャ？　シャーギャ！

「龍樹が……反応しておるのか？　ツカサの歌に？」

龍樹は確かに反応している。

≪　Ｗｏｗｏｈｏｈ……♪　≫

シャーギャ……ギャーギャー♪

「これは……歌っておるのか！？　龍樹が……！？」

歌が進むにつれ、反応が歌に合わさって行く。人間から聞けばまだまだ下手だ。しかし、歌ったのだ。もちろん龍樹は人間より遥かに知能が高い生き物だ。だから、歌えることに疑問は抱かない。しかし、歌う事には疑問しか抱く事が出来ない。

「これが、ツカサの歌」

≪　Ｗｏｗｏｈｏｈ～……♪　≫

シャーギャーシャーギャー♪

「龍樹が帝都に向かっていく……帰るのか」

「へへっ　伝わったろ？」

「そこまで！　動かないでください！」

「何じゃ！？」

Ｓｉｄｅ　数分前。アリアドネー戦乙女騎士団・セラス

「龍樹が！？」

「はい、ここアリアドネーに向かっているようです」

龍樹は前触れも無くアリアドネーに接近していた。目的は不明。目的なんて無いのかもしれない。ただの散歩という可能性もある。

しかし、このアリアドネーの危機という可能性もありえる。こんなことは前代未聞だ。

「報告します！　龍樹が移動を停止しました！」

「何があったか分かりますか？」

「それが逃亡中であるはずの『紅き翼』の『戦場の歌姫』が……」

「戦っているというの！？」

「いえ、その……歌っていまして」

「は？」

訳が分からない。龍樹を歌で止めたというの？　そもそも『戦場の歌姫』ってツカサ様でしょう？　会員Ｎｏ．６のカードをかなりの幸運で手に入れたときには涙を流し、騎士団を仮病で１日休み、祝いの日にしたほど。あ～見たい。聴きたい。すぐ近くにいるというのに。……そうだ！

「私が行きます！」

「セラス様！？」

「お止めください！　将来はこのアリアドネーの総長の座に就くというお話もあるではないですか！」

「いくらこのアリアドネーが他国から　強力な武装国家という意見が外部からあろうとも龍樹は危険です。放って置くわけにも行きま

せん。どきなさい！」

「…そこまで仰るのでしたら…では、私もお供いたします」

「私も！」

「私もお供します！」

賛同者は次々に集まっていく。いやぁ……戦いに行くのではなく、『戦場の歌姫』を見たいだけなんですけどぉ？　どうしてこんな大事に……。

「龍樹が……歌った？」

あれは、ヘラス帝国の第三皇女殿下……ニュースだと、マクギル元老院議員を殺害した紅き翼を裏で操り、夜の迷宮に捕えたと聞きましたが……。そして、歌っているのは間違いなく霧崎ツカサ様。戦場の歌姫その人だ。

≪　Ｗｏｗｏｈｏｈ～……♪　≫

シャーギャーシャーギャー♪

「龍樹、帝都方面に向け　引き返していきます」

私は、その瞬間飛び出してしまっていた。一言で言うなら感動してしまったのだ。

「あっ　セラス様！？」

「動かないでください！」

「何じゃ！？」

「くっ！　セラス様を守れ！！」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ツカサ

「ツカサ……囲まれておるのじゃ」

「あぁ、俺の歌を聴きにきやがったのか」

「違うと思うぞ、武装しておるし」

「うおぉぉぉぉ！　俺の歌を聴けぇーー！！」

≪　Ｌｅｔ's　Ｇｏ　♪　≫

「うぁぁ……」

「セラス様！？　おのれ貴様何を！　攻撃開始！」

＼　キャァァァーーー！！　／

「おい、命令を聞け！　なっ全員か！？　どうしたんだ　みんな！　がっ！？」

一人　魔法の矢で撃墜されていくが、俺たちは攻撃はしていない。風・雷・火・闇・水・氷・光それぞれの魔法の矢が右往左往に飛んでいく。それを攻撃と呼ぶには程遠く、ライブに花を添えるかの様に綺麗な軌跡を描いていく。そう、魔法の矢は全てアリアドネー戦乙女騎士団の騎士甲冑を纏った者達により放たれていく。

「ふぅ、良いライブだったぜ！」

「で、どうするのじゃ？　コレは……」

アリアドネー戦乙女騎士団の面々は全て恍惚とした顔で俺を見つめ、キャーキャーと手を振っていたりする。

「この中の指揮官は誰だ？」

「わ、私です」

「協力して欲しい事があるんだ」

こうして、先んじてメガロメセンブリア艦隊とアリアドネーを回った【敵を仲間にしよう全国ツアー】は幕を開けた。その後のライブにテオドラは自分からついて来るようになった。

「ツカサといれば何も恐くないのじゃ」

だそうだ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

――ここは辺境の地。酒場にやって来た男は手配書を持ってやって来た。手配書は５万ドラクマ～１００万ドラクマまでと、種類がある。

◆ナギ・スプリングフィールド：３０万ドラクマ
◆ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ：３０万ドラクマ
◆ジャック・ラカン：３０万ドラクマ
◆サムライマスターｗｗｗ青山詠春：２０万ドラクマ
◆アルビレオ・イマ：２０万ドラクマ
◆ゼクト：２０万ドラクマ
◆タカミチ・Ｔ・高畑：５万ドラクマ

何れもグレート＝ブリッジ奪還作戦前後の写真を使用されているようだ。そして、もう１枚。最高額で、別の手配書とは違う一文の添えられた。ファンクラブ仕様の舌を出してピースサインをしている写真を使用された――――――。

◆霧崎ツカサ：１００万ドラクマ『人間国宝につき、傷付けぬように保護を求む！！』

――――――戦場の歌姫・霧崎ツカサであった。

「聞いたか！？　あの赤毛のバカとか紅き翼はどーでもいいとして、ツカサちゃんまでもが指名手配だってよ！」
「マジか！？　マジで紅き翼の連中の仲間だったのか……でもツカサちゃんは歌っただけなんだろ？　何の罪なんだ？　仲間だからって理由だけでこの賞金か？」

カランッ
グラスの中の氷を転がすカウンター席の男は静かに口を開いた。
「……泥棒じゃないかな？」
「何か盗んだのか！？　そんな話聞いてないぞ！？　いい加減な事言うなよアンタ！」
「……ハート泥棒さ。俺は真っ先に盗まれたぜ」

その言葉に、外は晴天のはずなのだが、酒場にいる男たちはみな、一瞬真っ暗になり雷鳴が鳴り響いた。……という錯覚をした。

「「「「「「ツカサちゃんは大変なもの盗んで行きましたッ！！」」」」」」

「そうだったな……その通りだ。俺の心も盗まれちまったんだ」
「あぁ……そうと分かればこんなところで酒なんて飲んでる場合じゃない！！」
「そう、俺達はこれから合法的に国から認められて、仕事でツカサちゃんの追っかけが出来るんだ！」
「いやあ、良い時代になったもんだぜ！」
「ツカサちゃんの次のゲリラライブは何所だろうか……お前ら、今までの開催位置のデータとか持ってこい、予測するぞ！」
「あ、じゃあ俺は人数分の現地潜入装備（応援グッズ）の用意して

くる！」
「これから忙しくなるぞー！！」
「……待て貴様ら」
グラスの中の氷を転がすのをやめた男は入り口で飛び出さんとする男達を止めた。
「何だ！？」
「俺達の愛を止めようってのか！？」
「邪魔すんじゃねーや！！　おらどけっ！」
「ふっ……そうじゃないさ」
どさっ！！
「「「「「っ！！？」」」」」
「応援グッズはここで買って行くがいい！！　クククククッ！　俺こそが霧崎ツカサのファンクラブを設立させた男だ！！（俺に名前など与えられてない！！　俺こそ最強のモブキャラだ！！）」
「こ、これは……ファンクラブ会員限定のツカサちゃんの使ってる弦楽器のレプリカ！？　流石に高くて買えないが……普通の品揃えじゃねぇ！！」
「こっちは限定フィギュアもあるぞ！？」
「お、俺買うぞ！！」
「俺もだ！」
「私も！！」
「僕も買うよ！！」

「クハハハハ！！　紅き翼と連絡を取る事はまだ危険が多く不可能だがな、こうして水面下で歩み寄る事は出来るんだ。資金を今の内に掻き集めて、紅き翼の手助けをする！！　そうすれば！！」

（お、俺の為にこんなに頑張ってくれてたんだな……）
（ツカサちゃんの苦労に比べたらこれぐらいなんてことないさ）
（最初は変態とか言って悪かったな。誤解してたよ。そーゆー奴嫌いじゃないっていうか……むしろ好きだぞ？　……今夜、空いてるか？　ホテル取るよ）
（ツカサちゃん……それって……俺、もう止まらないよ？）
（あぁ、滅茶苦茶にしてくれよ……（ポッ））

「なーんつって！！　なーんつって！！　ダハハハハッ！！！　……ん？　あれ？」

「どこのアバズレだそりゃー！！」
「ツカサちゃんを汚すんじゃねー！！」
「死ね！　汚物は消毒じゃー！！」

「ギャーーーーーーッ！！！」

ツカサの【敵を仲間にしよう全国ツアー】のライブも好調で仲間は日々集まり、戦争で儲ける者や『完全なる世界』を下からとはいえ、徐々に潰していく。

「戻ったぞ、いやぁ　あのマフィア共　楽勝だったぜ！」
「では、次にヘラス帝国の上層部なのじゃが――――」
「いや、姫さんよぉ、俺達たった今帰ってきたばかりなんだが……」
「何じゃと？　ツカサは日々命懸けでライブをしておると言うのに、貴様という奴は疲れたとぬかすか！？　さっさと行かぬか！！」
そして、その終焉が見えてきたのが、約半年後の事だった。

「やはり王都でしたか」
「最奥部の……墓守り人の宮殿か」
「よし。連合・帝国・アリアドネーに声掛けて決戦と洒落込もうか」
『完全なる世界』によって、いがみ合い。殺し合い。戦い抜いてきた者達は揃って諸悪の根源へ刃を向け、遂に最終決戦に突入する。

……オマケ。
「ちっ　あの鉄仮面姫様め……さて、次の目標はっと～……」
「や、やっと合流できた……。これ、今まで貯めてきた資金です。ファングッズはほとんど売り切れまして……お困りでしょう？」

「あ？　おぉ！　悠久の風の変態伝令じゃねーか！　資金なら潤沢に集まってるぞ？」

「は？　……はいいいい！？　な、何で！？」

「ツカサのライブで、資金援助が後を絶たないんだ。無料でライブやっても深く受け止めてるファンが多いんだとよ。ちなみにツカサもライブで大忙しで戻ってないぞ？」

「そ、そんな……じゃあホテルは……？」

「何の話だ？　……モブ？　死ぬなモーブッ！！」

「それ……名前じゃ……ねーっす（ガクッ）」

チーーーン♪

第０９話「敵を仲間にしよう全国ツアー」（後書き）

感想は随時受付中です。

次回予告　ｏｐｅｎ　ｙｏｕｒ　ｅｙｅｓ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｄｒｅａｍ.

「ハッ！それであの…ナギ殿」

「ん？　サインか？　しょーがねーなー♪」

「つ、ツカサ様はどこでしょうか？」

「……あっちだ」

……あぁ、無情。

「ランサー兄！！」

「へっ……やるじゃねーか……」

「小次郎！！」

「不覚……いや、見事と言うべきであろう……」

一人、また一人と消えていく。

「お前は……ここで殺す！！」

「ははははははは！！　私を倒すか人間、それもよかろう！！」

次回

『何度でも殺してあげる』

【座談会のコーナー】

少々、【ながも〜　様】からのネタを入れてみました。

ネタ提供あざーすっ！

はい、久しぶりに良い投稿ペースと相成りました。珍しいね！！

今回の仮タイトルは、『モブと名付けよう』ですｗｗｗ

特に意味は無し！

さて、次回は遂に始まりの魔法使いとの対決！！

予定は未定の予告は改定になりかねませんので悪しからず。

なんか良いアイディアありませんかのー？

では、また次回。

第１０話「絶対なんてあるわけない」（前書き）

この世界には『０％』と『１００％』は無い。なんてよく言われる。

この世界には『絶対』はない。とも言われる事がある。

それでも『あの人なら……』という絶対的な信頼がある。

でもきっと、絶対信頼できても、絶対に裏切られないなんてことはない。

絶対はある……悔しいが。そして、絶対なんてない。悔しいが。

第１０話「絶対なんてあるわけない」

Ｓｉｄｅ　ツカサ

「マスター、そろそろ休憩にしましょう。お疲れでしょう？」

キャスターに止められる俺達の修行。セイバーと小次郎はそれに従い剣を収める。確かに疲れた。テオドラを連れて歌いに行って、数週間ぶりにこの秘密基地に帰っきて、すぐさま修行。ひたすら修行。バリバリ修行。これの繰り返し。アリカ様も頭脳労働と一緒に説得行動にも足を運んでいるため、最近は出会わない。……別に寂しくねーよ？

とりあえず、影分身による１０００人での修行は続けているわけですよ。しかし、それでもナギやジャックには及ばない。それについてキャスターに相談した事がある。

◆　◆　◆

「我々サーヴァントは確かに常人を遥かに超える戦闘力は有しています。ですが、例えばそうですね……真祖の吸血鬼ですとか、そう言った類のモノと戦闘した場合は負けてしまうでしょう」

「そうなの？」

「えぇ、仮に真祖の吸血鬼と戦うと仮定した場合。『3体のサーヴァントで何とか勝てるかも』と言ったところでしょうか。あくまで

も目算ですが、ジャック・ラカン等も同様に私達は3人で勝負になると言ったところですね」

「じゃあ、龍樹とか、ナギとかにも3人がかりで何とかってぐらいなのか……。じゃあ今のところ2人相手に互角ぐらいの俺って……」

「その域にはまだ達していませんね。確かにマスターの攻撃でジャック・ラカンが気絶した事があるそうですが……潜在能力が一気に噴き出したのでしょう」

「あぁ……（初めて会った時の飯をひっくり返された時か……）」

「しかし、常に勝てるわけではないですね。もちろん少しずつその差は埋まって行っています。分身しての修行と言うのはそれを埋める最高の能力と言えるでしょう……。その……」

「ん？　どうしたの？」

「い、いえ……すぐに強くなりたいですか？　今すぐにでも彼らを超える力を手に入れたいですか？」

「いや、別にそういうわけじゃないんだけど……何か方法あったりするの？」

「……い、いえ！　私達も頑張らないと、と思いまして。頑張ってマスターの力を引き上げて見せます！」

「あ、うん。ありがとう」

◆◆◆

というわけで、俺はまだまだナギやジャックの域に達していないそうだ。まぁそれでも？　１年とちょっとぐらいでこの強さになっているのだから十分なチートと言えるね。修行も今のままで行こうと思うよ。

ざっくり３等分するように、３００人はライダー・セイバー・ランサー・アサシンによる近接戦闘訓練。３００人はキャスターさんによる魔法訓練と、金ぴかアーチャーによる遠距離からの攻撃と防御の訓練。３００人は歌やギターの練習。

そして、残りの１００人は　炊事洗濯など家事をすることだ。へ？　バーサーカーの相手？　あいつマジ加減を知らねーから無理。週に１，２回は分身１０人で一気に戦闘訓練するも、すぐに本体だけにされてボコボコ。マジ狂戦士。カードの能力とか使えば勝てるよ？　例えば仮面ライダー５５５のアクセルとか、カブトのクロックアップとか使えば勝てるんだがそれをやっちまうと訓練終了後にすぐに目覚めて『アイテムなんぞ使ってんじゃねぇ！！』ってボコボコにされる。終了後にだぞ？　マジこえーよ……。

まぁそれもそのはず、バーサーカーのクラスの固有スキルである『狂化』により、理性や一部の技術を失う代償に能力が引き上げられており、その破壊力は圧倒的だ。通常バーサーカーのクラスは制御や維持の難しさから、『弱い』英霊を狂化し能力を高めて使役するが、ウチのバーサーカーは元の英霊としての格も非常に高く、手のつけられない怪物となっている。バルバトスだからなー……。そりゃ異常だよな……。何故か理性とか残っちゃってるけど……。それを含めても異常だ。キャスターが言うには通常のサーヴァントの

3倍ぐらい強いらしい。……あれ？　だとしたらナギやジャック級の強さじゃね？

「なぁ、教えなくて良いのか？」

「もう少しだけ、マスターと一緒にいたいのよ……あなたは違うの？」

「んなこと聞くんじゃねーよ。……当たり前だろ」

「しかし、次の戦は熾烈を極めるでしょう。私達も無事に済むとは思えない」

「気に食わん……我が消えるなどと……」

「まだ決まったわけではありません慢心王。気を引き締めてください」

「まぁ落ち着かれよ。いずれにせよマスターとは遅かれ早かれ別れが必ず来る」

俺は合体剣の分離・合体を繰り返している。この動作も修行の一つだ。この切り替えの速さも戦闘の一環だからな。ってサーヴァントだけで何か会議中か？

「何話してんだー？　もう少し休憩するかー？」

「やる気ですねツカサ。次は私とランサーとライダーで行きますよ」
「3人！？　これに勝てるようになればナギやラカン級の強さか……うっしやろう！」

「マスター……」

そして数カ月が経ち、俺は何も気付かずに戦いの場へと進んでいたんだ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ナギ

ここは王都の端っこだ。敵は俺たちに勘付いていないのだろうか？　『墓守り人の宮殿』は目視で確認出来ていると言うのに静か過ぎる気もする。俺たちはガトウの連絡を待っていた。メガロメセンブリアが重い腰を動かさないのと、テオドラの姫さんの帝国の手を借りたいところなのだが……恐らく俺達だけでやるしかないのだろう。

まぁそれでも味方はいる。正規軍が動かないだけだ。ツカサのファンクラブの会員が　かなりの割合を占めているらしいけど……。帝国・連合・そして、アリアドネーの混合部隊の準備はまもなく完了するだろう。

「不気味なくらい静かだな　やつら」

「なめてんだろ　悪の組織なんてそんなもんだ」

「ナギ殿！　帝国・連合アリアドネー混合部隊　準備完了しました」

「おう……。あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ俺たちが本丸に突入できる　頼んだぜ」

「ハッ！それであの…ナギ殿」

「ん？　サインか？」

「つ、ツカサ様はどこでしょうか？」

「……あぁ、あそこだ。龍樹と遊んでるぜ。まぁツカサは遊撃のアンタ等の方に回るから別に良いんだけどな……って聞いてね～……」

俺はアリアドネーの指揮官のセラスという女の後姿を見送った。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ツカサ

龍樹は俺のところへ来ていた。勝手にここに来て良いのかな？
帝国の守護聖獣なんでしょ？　まぁ、背中に乗せてもらったりして空のライブもやった仲だ。今も龍樹の頭に乗って１曲終わったところだ。

「もう一曲行くか？」

シャーギャ♪

「良し！」

≪　――――つ～らぬく　Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　Ｓｔａｒ～♪　≫

「ツカサ様！」

「ん？」
ギャ？

「混合部隊　準備完了しました」

アリアドネーのセラスさんが俺の下にやって来た。

「そっか……そろそろだってさ」

シャーギャ！

「セラスさん、戦いが始まったら　少しの間　部隊を下がらせてて」

「何をなさるのですか？」

「先ずは数を減らしたりしないと士気が下がるでしょ？　正規軍も帝国軍もいないんだから、こっちの数が少なすぎる」

「分かりました。ツカサ様がおっしゃるのでしたら……。それで、あの……ササ　サインをお願いできないでしょうか！？」

「いいよ、最近書いてなかったし……はい」

「あ、ありがとうございます！　／／／」

「じゃあ行こうか」

シャーギャー！

「はい！」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「連合の正規軍の説得は間に合わん、帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう、決戦を遅らせることはできないか？」

「無理ですね。私達でやるしかないでしょう。」

「既にタイムリミットだ。」

「ええ、彼らはもう始めています…『世界を無に帰す儀式』を。世界の鍵『黄昏の姫御子』は今　彼等の手にあるのです」

「絶対大丈夫だよ！　なんとかなるって！！」

「ツカサ……ああ！　……よぉしっ野郎共　行くぜっ！！」

世界と『完全なる世界』との戦いが今、ここに始まった。

『汝、その諷意なる封印の中で安息を得るだろう、永遠に儚く……』

「何だ！？　この魔力！！」

「ツカサじゃ」

「俺たちに当てないよな？」

『セレスティアルスター！！』

大魔法は迷宮から大量に召喚され出てくる悪魔と、召喚士。そして、戦艦の目視できる限りの中での７０％を消し去った。これで兵器はなくなった。後は召喚され続ける魔族と、召喚士を片付ければ宮殿以外は大丈夫だ。

「……負けるわけがねぇな」

「勝てる勝てないじゃなく、勝ちますね」

シャーギャー！

「おう、そうだな龍樹。混成部隊！　まだまだ出てくるぞ！　進めぇー！！　エンゲージ！　『さぁ最終決戦だ　俺の歌を聴けぇー！！』

≪　――――取り戻そうぜ～♪　≫

「魔力がみなぎる？……これなら！」

「これが、ツカサ様の歌の力……」

魔力は無尽蔵に揮われる。敵の魔法が飛んできてもツカサの歌が障壁のようにはじく。『戦場の歌姫』それは、間違いなく　そこに力強く存在していた。

≪　ＰＬＡＮＥＴ　ＤＡＮＣＥ～♪　≫

Ｓｉｄｅ　ツカサ

こんだけ敵の数を減らせば大丈夫だろう。

ギャ？

「龍樹。ここを頼めるか？　俺、アイツ等のとこに行きたい」

シャーギャ！

「ありがとう。セラスさん！　俺、宮殿内に行って来る！　後は任せた！」

「了解しました！　お気をつけて！」

単純計算で考えればだよ？　まだ見てないけど、エヴァンジェリンさんは真祖の吸血鬼だよね。でだ、『エヴァ　ナギ　ジャック』という図式があるよね。でだ、キャスターさんが言うには3人のサーヴァントで真祖と渡り合える。という事は、ナギが何とか勝った始まりの魔法使いにサーヴァント全員で挑めば……？

これ、勝てるっしょ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ナギ

あいつ等も終わったみてーだな。俺を含めてボロボロだ……。

「見事…理不尽なまでの強さだ…」

「黄昏の姫御子は…どこだ？消える前に吐け」

「フ…フフフ…まさか君は未だに僕が全ての黒幕だと思っているのかい？」

「なん……だと？」

バスッ！

俺は何かに突き刺された。目の前の男と一緒に。

「ナギィッ！！！」

「誰だ！？」

「！？　いかんッ『最強防護（クラティステー・アイギス）！！』」

皆の声が聞こえる……。

そして、膨大な魔力の爆発を感じる。

それから守られているのも感じる。

守られていると言っても薄い壁がある程度だろうな。

……それほどまでに爆発が強い。

俺の前にいたのは詠春か？　血ダルマじゃねーかよ。えぇ？　サムライマスターｗｗｗ。

……あぁ？　ははは……ジャック、腕がねえじゃねーかよ。しかも両方かよ……。

お師匠も……アルもボロボロか……。

「待てコラてめぇっ！！！」

はっ、腕が無くなっても威勢が良いな……俺は何やってるんだよ！！　立てやオラ！　姫子ちゃんを助けんだろうが！！　わけの分からねー組織なんざに負けるわけにもいかねーだろうがよ！！

ザッ

そうだよ。立てるじゃねーか。もう少しもてよ……。

「任せなジャック」

「　い…いけませんナギ！　そのお身体では！！」

「アル　お前の残りの魔力全部で俺の傷を治せ」

「し　しかしそんな無茶な治癒ではッ」

「３０分もてば十分だ」

「ですがッ……」

「ふふ　よかろう。ワシもいくぞナギ……ワシが一番傷も浅い」

「お師匠……」

「ゼクト！たった2人では無理です！」

「ナギ待て！奴はマズイ　奴は別物だ！　死ぬぞ！態勢を立て直してだな…」

「バーカ、んなことしてたら間にあわねぇよ。らしくもねぇなジャック……俺は無敵の『千の呪文の男』だぜ？　俺は勝つ！！　任せとけ！！！」

とか言いつつ、フラフラしやがる……。確かに無茶な治癒だな……。

～～～♪

あ？　なんの音だ？

～～～♪

聞き覚えがある……歌だ。

≪　明日を愛せるさー♪　≫

そうだ。ツカサだ。……魔力が回復していく。だが、その回復も受け付けないほどに魔力のタンクもボロボロだ。お師匠以外はみんな同じらしい。

ツカサはタロットカードを取りだす。

「ここなら足場もあるから大丈夫だろ」

カードはツカサの大剣に入れられていく。

「遅れてごめん」

ごめんって……。お前はもともとコッチに来ない予定だったろうが……。そして召喚されていくツカサのサーヴァント達。

「後は、俺に任せてみてよ。さぁ、行こうか」

「「「はい」」」

「おうよ」

「参る」

「ふん」

任せてみてよって……お前、戦闘はまだまだ弱いだろうがよ……。

サーヴァント達を従え、ツカサは更に奥へと進んで行った。

「お主らはここにおるがよい。ワシが行こう。ナギも無茶な治癒では死ぬぞ？　休んでいるがいい」

「お師匠……」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ツカサ

……とんだ計算違いだ。

威勢よく出てきたのがこの様か……。

５５５のアクセルモードで攻撃をしようと思ったが、隙が無さ過ぎる攻撃の前に使えないとは……奴の攻撃が激しすぎる。魔力が無尽蔵のようだ。

ガラガラガラ……

壁に叩き付けられ、俺はそこから立ち上がる。何度でも。何度でも……。

「ぐふっ　……始まりの魔法使い……お前はここで……！！」

「フ、人間は面白いな……」

バスッ！！

「ガハッ！！」

黒い矢に腹を刺された。こりゃ強い……勝てる気がしねーよ。……一人じゃ無理だ。だから皆でって思って来たんだけどな……。全員でかかってもこれかよ。相性が悪かったか？

「マスター！！？　くっ！！」

「刺し穿つ死棘の槍（ゲイ・ボルグ）！！！」

「秘剣！　燕返し！！」

「約束（エクスカリバー）された勝利の剣！！」

「天の鎖よ！！　天地乖離（エヌマ・エリシュ）す開闢の星！！」

「騎英（ベルレフォーン）の手綱！！」

最強の連続攻撃だ。しかし回避され、無力化され、カウンターを取られ、各個撃破されていくサーヴァント達が目の前にいる。そんな姿は見た事がなかった。想像もしなかった。サーヴァントが負けるわけがないと、どこかで思い込んでいたんだ。仮にナギと戦った場合でも1人で拮抗すると思い込んでいたんだ。キャスターに3人で勝負できるレベルと言われても、どこかで信じてなかったんだ。過信・慢心をしていたんだ。

――――――私たちのそのタロットカードは、失くされたり、破損した場合は使用不可能とお考えください。複製も不可能です。

破損。それは死と同義語である。しかし、そんな事があるわけないって、絶対に無いって思ってたんだ。俺はバカだ。

ズドンッ！！

「あぁ……ぁぁぁ……ランサー兄！！」

「へっ……やるじゃねーか……後は任せたぜ……ツカサ」

いつもは『嬢ちゃん』って言うじゃないかよ……。何だよ最後みたいに……。

ズシャンッ！

「小次郎！！」

「不覚……いや、見事と言うべきであろう……」

一人、また一人とカードに戻るように消えていく。そして、カードはどんどんその絵を薄くし、消していく。無防備な俺をライダーが小脇に抱えて距離を取る。

「キャスター！　マスターを任せました！！」

「……（コクリ）」

ライダーは再び始まりの魔法使いに突撃していく。そして、キャスターは、魔法の砲撃支援をしながら、俺の下へとやってくる。そして、どんどん薄れていくアサシンとランサーのカードを拾い、俺に渡してくる。

「マスター……お願いがあります。私達を吸って下さい」

キャスターは俺に命を吸えと言いだした。元を正せば式神だ。命と言うのもおかしな話かもしれない。でも、ずっと修行してきた。一緒に戦ってきた。そりゃあ1年ぐらいだったかもしれない。――

――――でも、楽しかったんだ。

――――――すぐに強くなりたいですか？　今すぐにでも彼らを超える力を手に入れたいですか？

数ヶ月前に言われた言葉を鮮明に思い出す。

「吸えばその分強くなりますし、私達もマスターの中で活きられます」

分かるよ。このままじゃランサー兄も小次郎も無駄死になんだって。このまま迷っててても他の仲間も消えてしまうって……。

「ぬぅぅぅっ！！　グアッ！！」

「ゼクト！　下がってください！！」

「……悔しいが、もう立ち上がれん……すまぬ、ツカサ」

「く……ふはははは……我も此処までだということか……。マスター、いや戦場の歌姫よ――――――いつを振り返っても我に従わなかったな、実に憎らしい奴よ。だが許そう。手に入らぬからこそ、美しいものもある――――――いや、中々に愉しかったぞ」

「ギル！！」

「は、そのような名前で呼ばれるとはな……精々死物狂いで謳うが良い。霧崎ツカサ、お前にはそれが似合っている」

そう、また一人。また一人とカードに戻って行く。

「すみません……マスター」

「ライダー……」

「マスター。お願いします。私達を――――――殺して下さい（イカシテクダサイ）」

「……（コクリ）……インストール『バーサーカー』」

「ぶるぅぅぅぅあぁぁぁ！！！　……全く久しく呼ばれたかと思えば……軟弱者共が……」

「お願いだバーサーカー……お前でも無理だろうけど……すまない時間稼ぎをしてくれ」

「……よかろう……この命が果てるまで殺し続けよう」

バーサーカーは跳んだ。始まりの魔法使いに向けて。交差するようにセイバーが落ちてくる。これで、始まりの魔法使いと対するのはバーサーカーだけだ。もって数分か……。皆で戦おうって気持ちで来たのにな……死んで来てくれなんてよく言えたもんだ……あーあ、俺って本当にバカだな。……畜生！

「では、私達をマスター自身への能力結合式（インストール）をはじめます。目を瞑

って下さい」

キャスターが一瞬で描いた魔法陣の上をタロットカードが円を描く様に回りだす。それは光の粒になり中心点。つまり、俺に沁み込んでいく。回復するわけじゃない。むしろ、サーヴァント達が受けたダメージもフィードバックしてくる。だけど……力は漲っていた。確かにすぐに強くなったよ。

『マスター。終わりました。回復できずにスミマセン……』

「キャス……っ！？」

声がどこから聞こえたか分からなかった。目を開いた先にはもう、無色のカードしか残っていなかった。そして、声はもう聞こえなくなっていたんだ……。すぐに強くなったけどさ……。

「何でいなくなっちゃうんだよ……」

俺は本当にバカだな。

「いてーよ……何で痛みなんかも引き継ぐかな～……痛くて涙がとまらねーよ……俺を守るためのサーヴァントじゃねーのかよ……何で……いてーよ……バカ……」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ゼクト

ギチチチチ……

筋肉が面白いほどに悲鳴をあげている。痛みの感覚も麻痺しだしている。

「……駄目じゃな。これ以上は動かせん、魔力も空……見てるだけとはな……っ！？　なんじゃ！？　……ツカサなのか？」

ツカサの気配が一気に増した。代わりにツカサのサーヴァント達の姿は『バーサーカー』を残し全て消えた。これは……取り込んだのか？　式神を？

「カァァァッ！！」

「無駄な事だ……」

バーサーカーの攻勢は凄まじいものだ。ナギやラカンに迫るものがある。しかし、それを超えるのが『始まりの魔法使い』だ。

「始まりの魔法使いと言ったな……貴様はここで終わりだ……」

「フ、サーヴァント風情が言うでない……消えよ」

「あぁ、俺はここで消える……貴様を倒す者の糧となってなァ！！」

「なに？」

バーサーカーはその姿をカードへと変えた。そして、そのカード

は糧とする者の手に渡った。戦場の歌姫。霧崎ツカサの手に。

「あまり話せなかったけどさ……助かったよバーサーカー」

『マスター……気にするな。俺の力もくれてやる……マスターの歌は、嫌いではなかったぞ……』

そして、光になり消えていく絵柄。そう、これで全てのサーヴァントは霧崎ツカサと言う人間一人に集約されたに等しい。

「……ありがとう。みんな」

そして、傷だらけの歌姫は始まりの魔法使いに再び挑んだ。

「お師匠……此処にいたのか。ツカサは？」

「ナギか……すまないが回復魔法を頼む。少しで良い。歩けさえすれば……あ奴を……ツカサをアレに触れさせてはならん……」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

凄まじい衝撃音を生みながら宮殿が崩壊していく。

「戻って来たか……私の『永遠』へ迎え入れようではないか……」

「お前が俺の永遠の一つを壊した……いや、俺もバカだったけどよ

……お前を倒さないと、浮かばれない奴らがいるんだよ……」

ドッ！！！

そして、打撃の衝撃音も鈍く響く。

「お前は……お前はここで殺す！！　エンゲージ！！」

「……クック…フフ…フフはは。ははははははは！！　私を倒すか人間それもよかろうッ！！私を倒し英雄となれ！！　羊達の慰めともなろう！！　だが　夢忘れるな！　全てを満たす解はない！いずれ彼等にも絶望の帳が下りる！　貴様も例外ではない！！」

「お前が何言ってんのか全然わかんねーんだよ！！　俺は世界なんてどーでもいいんだよ！！　ただ、いつも通りの明日が欲しいだけなんだよ！！　それを邪魔する奴が……笑い合う仲間を……。もし明日世界が滅びるってんなら滅ぼす奴をぶっ飛ばす！！　それがお前だ！！」

「くっくく……貴様もいずれ私の語る『永遠』こそが『全て』の『魂』を救える唯一の次善解だと知るだろう」

「知るか！　全てを断ち切る！！」

ツカサは合体剣を高速で振り切る。切り返す。また振り切る。切り返す。クロックアップやアクセルの能力は使っていない。

しかし、それは高速の剣幕だ。手を突っ込めば容易に切り落とされるだろう。

そして、更に速くなる。

セイバーの何よりも重い剣圧を超え、

アサシンの燕返しの速度も超え、

最速のランサーの槍捌きさえも超える。

「アアアァァァァァッ！！！」

そして、合体剣は総分離する。

――――――超究武神覇斬ｖｅｒ．５　が決まった。

ツカサは確実な手応えを感じ取り、剣をカードにもどした。そして、異変を感じ取る。光が溢れ出していく。全てを無に帰す魔法が発動したのだ。

「そうだ。アスナは？」

アスナを取り戻していないがゆえにこの光球はその形を増大していく。

『良い身体をしているな。貰うぞ『英雄』――――。フハハハハハ』

そして、突如聞こえてきた声にもう一つ思い出す。『ゼクトは……始まりの魔法使いに取り込まれていたのではないか？』と。その対象が自分になった事を驚愕し、ツカサは光の中で静かに眼を閉じ、自分の存在を諦めた。

「いかん！！　『白き雷！！』」

「ゼクトさん……何を……？」

ゼクトは追い討ちをかけた。

『フィリウス……ふむ、まぁ良かろう。我が後継者よ』

フィリウス・ゼクト。彼は造物主へとその存在を委ねた。

『……聞くがよい。武の英雄に未来を造る事はできぬ。貴様には結局何も変えられまいよ……だが果たして……自らに問うがよい。ヒトとは身を捨ててまで救うに足るものか？　……人間は度し難い英雄よ　貴様も我が２６００年の絶望を知れ。さらばだ……』

「ゼクトさん！？　どうして！！　ゼクトさーんッ！！」

第１０話「絶対なんてあるわけない」（後書き）

感想は随時受付中です。

次回予告　ｏｐｅｎ　ｙｏｕｒ　ｅｙｅｓ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｄｒｅａｍ.

「私の下へ戻って来い我が騎士よ！！」

「Ｙｅｓ　ユァ……まじぇす……てぃ」

ツカサは戻る事が出来るのか！？

次回

『女王陛下の名の下に』

【座談会のコーナー】

はいどーも。更新ペースは中々良いんじゃない？

と、勝手に思ってるフリスタです。

えー言いたい事は多々あるかと思います。感想で大いに披露してく

れ。

◆さて、造物主ですが、倒して最後に攻撃した者に取り憑くという解釈になりました。しっくりくるようなこないよーな。

◆えーこの戦で、ツカサちゃんの強さは、ざっくりナギ・ラカン・エヴァの2倍～3倍となりました事をご報告させていただきます。

◆オマケの没ネタ

ツカサ　「ランサー兄～次はこれ～」

ランサー「ん～？　今度は何だ？　……コホンッ『ソウルゲイン。その力、今一度使わせて貰うぞ！　コード麒麟！！』これで良いのか？」

ツカサ　「最高！　次はこれね！」

ランサー「……これは嬢ちゃんの……分かった分かった……コホンッ『ミサイルより爆発力のあるサウンドを聴かせてやるぜ！！　俺の歌を聴けぇぇぇ！！』……もう良いか？」

ツカサ「もう一回！！　もう一回！！」

セイバー　「楽しそうですね」
キャスター「そうね……犬の分際で」
ライダー　「中の人が同じらしいですよ？」
ギル　「駄犬の分際で……」

アサシン「私もやらされたぞ？　『ロックオン！　狙い撃つ！！』とか」

ランサー「そこー！　さっきからちょいちょい犬って言うなー！！」

バーサーカー「ぶるぅぅぅうあぁぁぁ！！　五月蠅いぞ犬が！！」

的な？

第１１話「光の中に光を見つけた」（前書き）

光が大きく広がって行く。

それは全てを無に帰す光だ。

それでも美しいと思ってしまう光。

もちろん、そんな事を感じる余裕も彼には無い。

もっと輝かしい希望の変革の光を見つけたからだ。

第１１話「光の中に光を見つけた」

Ｓｉｄｅ　ナギ

お師匠を回復したらまた少し意識を飛ばしてしまった。身体の外も中もがもうボロボロだ。目が覚めた時には丁度ツカサが親玉を倒したところだった。どういう事か分からねーが、ツカサは俺達の誰よりも……俺よりも強くなっていた。

「――――ゼクトさーんッ！！」

そして、俺が何とかツカサの下に来た時にはお師匠は光の中へ消えて行った。

その光が大きくなっているってことは世界が無に帰す魔法が完成してしまったという事だ。姫子ちゃんは見つからない。

「アル！　聞こえるかアル！」

＜やぁナギ、全くツカサの急成長には驚きましたよ……＞

「そんな事より姫子ちゃんが……！　あ、いや、それより儀式だ！親玉は倒したがヤロウ　既に儀式を完成させちまったみたいだ……マズイぞッ！」

「ゴフッ……グプッ！」

ドサッ

大量の血を吐いてツカサは倒れる。

「おい！！　ツカサ！？　おい！！　『治癒（クーラ）』　くそっ！　血が止まらねえ！！」

「だ、大丈夫……助げでぃ〝来でぐでどぅがら〟……」

「誰が止められんだよこんなモン！！　畜生！！」

＜あきらめるなナギ・スプリングフィールド！！！　この愚か者が！！＞

姫さんか！？

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ツカサ

温かい……ふわふわしてるな……。死んだのか？

最強になった瞬間に死ぬとはな……まぁ楽しかったかな……上手に歌えて、ギターも巧くなって、魔法を使えて、合体剣が使えて、それで……大事な奴らが消えちまって、俺だけ生きてるのもな……。

でも、死ぬのってどこ行くんだろうな？　守護神に怒られるのか？

「ツカサ！！　起きろ！！　『治癒（クーラ）！』」

『血は止まらんのか！！』

「止まったけどまだ起きねえんだよ！！　くそっ！！」

ナギとアリカ様の声が聞こえる……。あぁ……どうなったんだっけか……？　確か、戦艦とか沢山の魔法使い達で光球を抑え込んで、なんとかその場は凌ぐんだっけか……？

『何で戦ったのじゃ！！　歌う事がツカサの戦いではなかったのか！！？』

あぁ、そうだ……そうだったなぁ……。「歌え」ってギルにもそう言われてラスボスに挑んだのに……どうしても頭に血が上って剣を握っちまった……。そんだけお前達の事大好きだったんだぞ？　もう伝えられないけど……。逝ったら会えるのかな？　そっちに行っても怒らないでくれよ？

（戯けが、お前の中で活きて居るわ）

ギル？

（マスター、私達はマスターの中にいます）

キャスター？

（私は、ツカサは歌っていた方が強いと思います。誰に出来るわけでもないその戦いは、ツカサにしか出来ません）

セイバー……。

じゃあ……聴いてくれるか？　あんまり声も出ねーんだけどさ……。

≪　時間の…波をつかま――――♪　≫

「ツカサ！？」

『起きたのか！！？　ツカサ！！　ツカサ！！』

「あ、アリカ……様？」

あれ？　ギル達は……？　ここは……？　生きてるのか俺。

『心配させるでない……必ずだ！　必ず私の下へ戻って来い我が騎士よ！！』

アリカ様が近くに来てるってことは、親を殺して王女から、女王陛下になってるんだっけか……？　それもなんとか止めたかったけどな……失敗ばかりだな俺……。

「Ｙｅｓ　ユァ……まじぇす……てぃ……ごふっ！　あー……血が凄いなぁ……痛いわこれ……修行の時よりずっと……。えっと、状況は……最悪みたいだね」

……なんて時に起きたんだ俺は。光球が目の前で徐々に大きくな

っていく。その拡大していく速度も徐々に上がって行っているようだ。

（さぁ、マスター）

ライダー……

（歌うがいい、聴いてやろう）

ギル……

「とりあえず……『ベホマズン！！』っと」

「うおっ！？　回復した！？」

「多分、アルやジャック達も回復してるはずだよ……ナギ、ありがとう」

『艦隊も間も無くそちらに到着する！』

「エンゲージ！　……じゃあ会場（ココ）で待ってますよ！」

っと……崩れた壁の奥が見える。祭壇……？

「ナギ！！　アル達と合流してアリカ様達の手伝いして！！」

「お、おう！？」

ナギはバカだからな……アレを見たらどう行動するか分かったもんじゃない。

しかし、これは……大勝利じゃないか。

（マスター、まずは解呪をその後に――――）

よっしゃ！　お前も俺の歌を聴け！　聴いて目を覚ませ！！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　連合艦隊

「アレは！！　メガロメセンブリア国際戦略艦隊旗艦！！」

『こちらスヴァンフヴィート艦長リカード！！　遅れて悪いな助太刀するぜ！！　世界のピンチだ敵も味方も関係ねぇぜッ！！』

『そのとおりじゃ！！』

「おぉ…アレは……帝国軍北方艦隊！！」

「ハハ……遅いんだよ。じゃじゃ馬娘が……」

『ハハハハッ！　皆の者！　力を合わせてあの光球を止めるのじゃ！！　そして、ツカサを助けよ！！　あわよくば拉致って構わん！！』

『それはご勘弁願おう帝国の皇女よ……全艦隊！！　光球を取り囲み抑え込め！！　魔導兵団　大規模反転封印術式展開！！　全世界の興廃この一戦にあり！　各員全力を尽くせ後は無いぞ！！』

≪　変われる力恐れない――――――！！　≫

歌姫の歌声が響きわたる。その歌声に普段以上の魔力を込めて光球を抑え込む術者達。暴走する莫大な魔力の渦。それを抑え込まんとする外部からの圧力。それを外ではなく、内から歌というもので支え、力を与え続ける歌姫。やがて落ち着いて行く光の中から歌姫がその姿を現す。

その大戦は歴史に深く刻まれ、歌姫の伝説ともなることになる。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ツカサ

そんな戦いは艦隊の超長距離転送モニターにより全国ネットで公開され、長きにわたる戦争は終結した。という事になった。ゼクトさんが持ってかれちまったけどね。時間がどんだけかかるか知らんけど取り戻すさ。

「（おい！　ツーカーサ！　お前の番だ！）」

サムライマスターｗｗｗがうるせーんだけど？

あ？　あぁ勲章ね。俺の番を教えてくれたのね。

「傷は大丈夫か？」

「治りましたよ～もう全快♪」

俺達はメダルの勲章を首からかけて貰い、多くの声援を貰い、式典を後にした。ナギ達は昔馴染みの酒場に行った。英雄の凱旋を喜ぶ人達は多いだろう。

俺は別行動を取ってアリカ様のところに来ていた。で、今はいつものように後ろから抱き付かれる様な形で芝生の上で座ってのほほんとしている。もちろんそんな場合じゃないのは原作を知ってる俺が良く分かってる。でもね～何故か逆らえないの。王家の魔力恐るべし……？　まぁそれに何時間でものほほんとしてて問題無いんだけどね。

「ねぇアリカ様～」

「……何じゃ？」

「『もしかして』の話なんですけど～避難誘導ってしてます？」

「なっ！　どこで知ったのじゃ！？」

「まぁそこは置いておいて、その必要が無い事をお伝えしようと思いまして」

魔力消失現象。浮いてる島々も魔力によって浮いているわけだからそりゃ落ちるってなもんだ。しかし、それもアスナがいない場合の話だ。原作だと、これから魔法磁場が消えた事による大崩落がはじまる。浮いてる島々は落ちると言う事だ。このオスティア周辺だけで済むわけだが、それでもかなりの被害が出る。一応、元々下に

存在している『ＡＱＵＡ』は大崩落があっても大きな被害はない場所だ。水先案内人（ウンディーネ）が数多くいる観光スポットね。良かった良かった。

「必要が無いとはどういう事じゃ！　この地が落ちるのじゃぞ！？」

「俺ってばまだアリカ様の騎士ですよ～。変な呼び方され始めてますけど……」

そう、『姫騎士』だ。さっきも通りすがりの騎士団の人達にヒソヒソと言われた。変な称号付けやがって……。歌姫だけで良いっちゅうねん！　ま、今はそんな事よりも避難誘導が先だな。

「ミラージュコロイド・ＥＣＳ・ステルス迷彩……オールクリア」

俺は重ね掛けしてある認識阻害を解除して、対象の姿を現した。そうそれは……。

「なっ！？　アスナ……！？」

「アリカ……ツカサに助けてもらった」

そう、墓守り人の宮殿で崩れた先で見つけたのだ。アスナを覆っていた凍り漬けの様なモノもキャスターの修行による歌での解呪方法が通じた。で、さっきまで隠しておいたわけだ。式典とかだとメガロのジジイ共が狙ってくる可能性があったからだ。

しかし、取り戻しただけで大崩落が治まるわけでもなかった。アスナの力を術式で使わせてもらった。まぁ巻き戻しというわけだ。キャスターの言われたとおりにやっただけだから、俺にも良く理解出来てないんだけど、あの光球の発生すらも発生しなかった状態ま

で巻き戻したのだ。つまり、みんなの力で抑え込んだと思われているが、勝手に巻き戻されて行っただけなのだ。

時間が戻ったわけではなく、その魔法のみをキャンセルさせたに近い。アスナがいたからこその術式だった。そのために、あの時の俺はアスナを傍にずーっと歌いっぱなし。

というわけで、俺は歴史を変えた。アリカ様を監獄なんかに入れさせませんよ。でもこの場合どうなるんだろうか？　メガロ落とした方が安全なのかな？　アスナ探し続けるんだろあいつ等。それに父王殺しって事もなんとか説明せにゃならん。

Ｃｈｕ　？

……　……　……ッ！！？

「はぇ！？　な、何を！？」

「我が騎士よ……我が夫となれ」

えぇぇぇぇーーーー！！？

「で、でも……ほら、その血筋とか？　その、仮にも騎士と女王の立場というか？　ほら、俺って男だし？　なのに歌姫だし？　それから、それから……」

途中からわけが分からない説明になってしまうが、アリカ様は一言。

「嫌なのか？」

――魔王城陥落！！

「い、嫌じゃありません……その……Ｙｅｓ，　Ｙｏｕｒ　Ｍａｊｅｓｔｙ．」

俺は原作を大きく変えてしまった。助けるだけのつもりだったんだけど……。

俺は、婿入りを果たし……てしまった？

「え……ツカサ結婚しちゃうの？　……その……困る」

えー……。何この子。凄く可愛いんだけど……。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　？？？

◆◆◆

突然、そう突然に魔法界に現れた街中で歌う無名の歌姫は、グレート＝ブリッジ奪還に多大な貢献をし、誰も信じなかったがテロリストという大きな罪を背負い、世界の終わりを救った英雄の一人として知らない者は誰もいないほどの存在になった。

――――歌姫が現れてから……そう、1年と数カ月の出来事だった。一足飛びに、階段ならば何段も一気に飛ばし、文字通り飛んできた。だからこそ、その奇跡の様な存在に誰もが夢を見た。心を奪われた。

次号の『ＭＡＧＥ　ＷＥＥＫ』はそんな歌姫の素顔に迫りたいと思います。

◆　◆　◆

早めに刷り上がった来週号の雑誌を見て、一人の女性は編集長のデスクにいた。

「で、この記事を私がですか！？」

「そうだ。ジニーはこの間辞めちまって王宮担当の記者はお前しかいねーだろうが。歌姫は今、王宮にいるんだからよ。時間は1週間。写真もお前が担当しろ。戦争の所為で人手が足りねーんだよ」

「歌姫……霧崎ツカサ様……」

「上手くいけばよぉ、サインとか貰えるかもしれないだろ？　な？」

「が、頑張ります！！」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

第１１話「光の中に光を見つけた」（後書き）

感想は随時受付中です。

次回予告　ｏｐｅｎ　ｙｏｕｒ　ｅｙｅｓ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｄｒｅａｍ.

「お暇を頂きたく思います」

「なっ！？　何故じゃ！？」

「戦争の影響で私の部族が大変らしくて、妹を預けておくのも限界みたいなんですよね～」

そう言ってメイドは去っていく。

「私の手料理が食えんじゃと！？」

「その……味がしなくて……代わりに作りますから。ね？」

「私には料理も出来んというのか！？」

「そうじゃなくて……」

次回
『戦後の処理をしましょう』

はい！　というわけで、拙い文章で申し訳ない。
◆この時点でアスナ確保。→大崩落なし。
◆アリカ様ルート？
と、なりました。
ハーレムにすべきかな～？　したいけど下手だしな～。って感じです。
やっぱバトルは難しいね～。無理じゃよｗｗｗ

第１２話「戦後の処理をしましょう」（前書き）

この作品が相当遅れてますね。すみません。この作品では『あけおめことよろ』となります。よろしくです。

さてさて、始める前に既に「あれ？」と、思ってる方もいるかもしれませんが、はい。そうですね。無駄にこの前書きでカッコつけて書いていた稚拙なモノが消えます。ちなみに次回予告も消えます。

何故なら、もう無理だからです。精神的にね。ついていかないの（泣）

ではでは、お久しぶりですが、今回はこんな感じになりました。どーぞ。

第１２話「戦後の処理をしましょう」

Ｓｉｄｅ　ツカサ

ハーイ♪　みんな元気にしてるかな～？　俺はと言うと、現在味気ない食事をしている。味気ないというのは比喩表現でも何でもなくマジで……。

「……味がしません」

「私の手料理が食えんじゃと！？」

「その……味がしなくて……代わりに作りますから。ね？」

「私には料理も出来んというのか！？」

「そうじゃなくて……いや、まぁそうなのかも知れませんけど……」

そんな無味無臭のアリカ様の初めての手料理。それはマジで味が全くしませんでした。それは食材の味が引き立つだとか、野菜の甘みなどがあるとか一切なく。こんなに味がしない食事を与えられた私はきっと、弄ばれているのだろうと思いました。今では私が料理をしています。もちろん味見は欠かせません。何故なら彼女は滅茶苦茶怒っているからです。

などと某キャンディーのＣＭを彷彿とさせることを思いながら料理を仕上げる。それをアリカ様のもとに持っていくと……。テーテッテレー♪

「ウマイ！」

あ、味覚はちゃんとしてるのね。なら。
「ちゃんと味見して作りましょうね……」
「む……す、すまなかった」
こんな上目づかいにドキドキさせられます。
「ツカサ……料理美味しい」
そして、アスナにもドキドキします。あー小さい子かわいい。しかし、結婚か……マジでアリカ様とするのだろうか？　そもそもこの世界ではテオドラやアスナのような小さい子とは結婚できないのだろうか？　小さくて可愛い子が好きなんだよね～。アリカ様は俺よりも大きいんだよね～。でも胸は当然アリカ様の方が大きいんだよね～。
そこ！　ロリコンじゃねー！！　小さい子が好きなだけだ！！
べ、別にアリカ様でも良いんだからね！　と、超失礼なツンデレも演じてみる。つーかマジでね、前世は寂しい人間だったわけですよ。それがまさかのモテ期到来！　みたいな感じで、ファンはキャーキャー言ってくれるし、小さい子は可愛いしで本気で困るわけですよ。アリカ様と結婚か……どうなるんだろう？　というか、するのかな？　結婚。

――――――さて、その日は突然に訪れた。
つっても俺達が『紅き翼』が勲章を貰った3日後ぐらいだった。

「お暇を頂きたく思います」
「なっ！？　何故じゃ！？」

アリカ様の専属の侍女の二ーナさんは恭しく頭を下げた。普通サイズより一回り小さいトランクケースを自分の横に用意してあるあたり荷物は既にまとめてあるらしく、今着ているメイド服を脱いで他の侍女に渡せばそれで御勤めは終了のようだった。

「戦争の影響で私の部族が大変らしくて、妹を預けておくのも限界みたいなんですよね～。……スミマセン」

アリカ様は確かに指示は飛ばしていた。戦争が終わったとはいえ、あれほど激化していたのだ。自分の故郷などに被害。また、家族などに影響があるようならば、仕事を辞職しても厭わないと。

「そうか……」

変態チックではあったが二ーナさんは基本的に万能型のメイドさんだし、アリカ様の専属と言うこともあって、その穴は大きい。その上、気持ち的にも非常に寂しくなると言ったところだろう。

「大丈夫ですよアリカ様～ツカサ様がいますから。ね？」
「うむ……何かあれば力になろう。今まで世話になった」

そうしてメイドは去っていく。
ふむ、個人的にはこれでストーキングされたりとか、脳内でメチャクチャにされたりとかはしないだろう。……いや、脳内ではやられ続けるかもしれないが、とりあえず気は楽になる。
……別に寂しくなんて無いんだからね！　と、ツンデレを被せて

みる。特に意味はない。別に個人的に流行っているわけでもない。

――――――それから1、2ヶ月後のこと。

「さて、ツカサ。私はこれから忙しくなる。しばらく王宮にも戻れぬだろう」

「へ？　何でですか？」

「メガロメセンブリアにて会議がある。戦後であるが故に話し合う事は多い」

今はナギ達が連れ回してるけど、アスナの存在はメガロメセンブリアの連中にはバレてないだろう？　いや、バレてるのか？　だとしたら査問委員会とか？　いや、そんな理由じゃ処罰は難しいわな……アスナを手に入れようとするのも難しいはずだ。

……ん～。思い出せ。何故にアリカ様は原作で処刑扱いになったんだっけ？　オスティアが落ちたのは不可抗力だろ……？　ん～アリカ様を捕まえて、アスナの居場所を吐かせようとしていた気がする……。いかんな～原作知識が抜け落ちている。結局、オスティアは落ちてないし、何も問題なく思うのだが……。

「着いて行きましょうか？」

「……」

「ど、どうかしました？　鳩が豆鉄砲くらったような顔して……」

「いや、こちらから結婚を申し込んだが。その返事も無いのでな……それは婿入りを承諾したということか？　夫として……」

「いや、別にそう言うわけでも……（スカーンッ！）あ痛ーッ！！」

「全く……。まぁよい。帰って来た時には色好い返事を期待しておるぞ」

そう言ってアリカ様はメガロメセンブリアに飛んで行った。

ふむ。真面目にそろそろ結婚について考えないといけないようだ。昨日なんかは「一夫多妻制になりませんかね？」ってアスナに裾を引っ張られながら話したらドツかれたしな……。ハーレムは駄目ということのようだ。まぁ？　分別は弁えてますよ？　冗談じゃないですか。嫌だなぁ。……はぁ、アスナとテオドラは駄目か……。そもそも犯罪か。畜生。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　アリカ

私はメガロメセンブリアに到着すると、すぐさまメガロメセンブリアの正規兵に囲まれた。重厚な鎧に身を包んだそれ等は出迎えにはそぐわない事は一目瞭然だった。

「畏れながらアリカ陛下」

「何じゃ主らは？」

「陛下を逮捕します」
「……何故じゃ」
「父王殺し及び『完全なる世界』との関与の疑いが持ち上がっています」
そこに集まっていた元老院も口を揃えている。
「なんと父王殺し……」
「恐ろしい……」
「いやしかしこれで説明はつく全てはこの女が……」
「そうじゃそうじゃあの賢王と称えられた前オスティア王が乱心するのはオカシイと前から……」
最初からそのつもりで……（ギリッ）
「フフフ……浅はかなことをされましたな陛下。我らの情報機関の力を甘く見られたようだ」
「主ら……恥を知れ」
ツカサ……すまぬ……帰れそうにない。
私は歯軋りをしつつも、残してきた歌姫を想った。
Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ツカサ

≪　ＧＯ！　ＧＯ！　もういっちょ！　Ｈｅｙ！　≫
＼　ＧＯ！　ＧＯ！　ＧＯ！　ＧＯ！　／
『Ｙｅａｈ！　まだまだ行くぜー！【オスティア闘技場】ー！！』
＼　オオォォォーーーーーッ！！！　／

毎度の事ながらの爆音で会場は大盛り上がり。アリカ様もいない今！　もう誰にも俺の勢いは止められないぜ！！
と、思っていた時期が俺にもありました。

『ニュースの件はどーなってんだ！！！』
「うるせーーーーー！！！」

いきなりの轟音の電話に俺は切れた。相手はナギだった。爆音ライブで楽しかった昨日の余韻を苦めのお茶で「はぁ～えがったえがった～」と、老けこむように浸っているところへの電話だった。苦いものとかが好きなんだよね～健康に良さそうな気がするんだよね～。

「で？　ニュースが何だって？　（あーお茶がうめぇ）」
『姫さんが捕まってるってなんだよ！！？』

ブッフゥッーーーーーー！！！

盛大に吹いた。ソファーに正座して座っていたはずの俺はこれから映すはずのテレビに向けて盛大にお茶を吹き出した。

「何で捕まってんのーーーー！！？」
『父王殺しって何回も報道されてんだよ！　何で近くにいて守ってやらなかった！！』

ナギの怒りも尤もだ。そうだよ。『イエス　ユア　ハイネス』から『イエス　ユア　マジェスティ』に自分も言い換えたではないか。そうだよ。完全なる世界の傀儡となっていたアリカ様のお父さんを殺して王女から女王陛下になったんだから……。元老院はそこを突いてきたわけか……。やられた。

「どーじよ〝ぉー！！？」
『う、うるせー！　泣いてる場合か！！』
『代わってください！　クルトです！　ツカサさん良いですか！？
こうなってしまった以上、助け出すにしても、結局は追われる立場になってしまいます。そもそも我々【紅き翼】も英雄視されるようになったとは言え、メガロではまだお尋ね者扱いですから派手な行動にも移せません！　とりあえず今は機会を窺って……』

「えっぐえっぐ……」と、涙ながらにクルトの説明を聞いている。あぁ、じゃあやっぱり原作通りに2年後に助け出すしかないんだ。父王殺しだけでここまでやるたぁ強引だな元老院め……助けるときには禍根なく全て消し去ってやろう。

「な、泣かないでください！　べ、別にアリカ様のためであって、ツカサさんのためなんかじゃ無いんですからね！　こ、この前のライブも最高でしたけど、じ、次回も楽しみにしてるんですからね！」

あれ、何言ってんのこいつ。アリカ様に惚れてるんじゃなかったっけ？　何で俺にツンデレしてくるんだよ……。ははぁ～ん、ネタ

だな。ボケを覚えるとは中々優秀な芸人魂じゃないか。

――――――と、言うわけで。

「おい」
「なにさ？」

ジィ～～ン♪
俺はギターのチューニングをしつつ、ナギのジト目を流し見る。

「これから紛争地域を回って、戦争の被害をなくしたりするんだよな？」
「そうだね」

ピィ～～ン♪

「何でギター持ってるんだよ！」
「歌で戦争なくすからだよ！！」

「もうヤダこいつ、俺以上の馬鹿がいる～」

とナギは、自分の馬鹿をちゃんと理解した上でサムライマスターwwwに「あの子をどうにかして」と言っている。失礼な奴だ。

「いや、ツカサの歌は実際問題かなりの効果がある」
「無闇にやたらに私たちが紛争地域に仕掛けるよりも効率的でしょうね」

詠春もアルも同意見のようだ。

「つーわけで、俺は歌う！　お前らは、聴いてない奴らをボコす！　簡単だろ？」

≪　迫る～ライダー！　無敵の軍団～♪　昭和から～平成まで～悪者軍団倒すため～ＧＯ！　ＧＯ！　Ｌｅｔ’ｓ　Ｇｏ！　色んなマシン～♪　≫

＼　ツカサちゃーーーーん！！　／

「本当にこれでいいのか……？」

「まぁ実際に戦闘行動は停止してますし」

「グッズ買ってきたぞ～、さぁツカサの応援を……！」

「詠春頼むから帰ってきてくれ……こっち側に」

こうして、俺達の水面下による２年間が始まったんだ。

Ｓｉｄｅ　？？？

「え！？　居ないんですか！？」

「分かるだろ？　アリカ女王陛下もメガロメセンブリアに捕縛され、

紅き翼も各地に紛争根絶に忙しいんだよ……」

た、大変だ……。このままじゃ編集長に殺される。

「さ、探しに行かなくちゃ！！　紛争地域！　紛争地域～～～！！」

「なぁ、聞いたか？　ツカサちゃん、今度はニャンドマの方からヴァルカンの方に移動していくらしいぜ」

「知ってるよ。情報遅いぜ、会員メールにすぐに来る情報じゃねーか。でも一般客は寄らない方がいいわな」

「なんでだよ？」

「かぁ～！　もう平和ボケしてんのかよ？　紛争地域だよ。そこを止めに行ってるんだよ」

「なるほどね～。でも羨ましいね～。それにそう長くも経ってないけど懐かしくないか？　全国ツアーだぜ。全国ツアー」

「あぁ、まぁつってもメガロメセンブリアは避けるようにだろうけどな」

「だろうな。今行ってる地域が限界ギリギリのラインだろうな」

街の声に聞き耳を立て、失念していたことを思い出す。そうだ。会員情報メールで得られることもあるじゃないか！！　えぇと……今がニャンドマ近隣地域だから……今からだとヴァルカンでギリギリ間に合うかも！　これを逃したら編集長に左遷されちゃう！！

私は、速攻で飛空挺をチャーターし、ヴァルカンへ飛んだ。紛争地域だから、着陸ではなく、空から下ろされるわけだけど……飛ぶの苦手なのよね～……でもＭＡＧＥ　ＷＥＥＫのため！　ＭＡＧＥ　ＷＥＥＫ臨時『戦場の歌姫』担当記者【イスミ・カミーラ】頑張ります！！

Side out

第１２話「戦後の処理をしましょう」（後書き）

感想は随時受付中です。

一応、アリカ様は原作通りに２年後に処刑されるコース。
ツカサはその２年間で紛争地域の人々を助けまくるコース。
で、ここを少し引っ張る感じで書きたく思います。また、原作崩壊も少しずつ進めたく思います。
ではでは、今度はいつになることになるやら？　では、また次回。

第１３話「ＭＡＧＥ　ＷＥＥＫ」（前書き）

さぁさぁ前作をご覧いただいていた皆様お待たせしました。
アレが帰ってきます！　でもってＭＡＧＥ　ｗｅｅｋ　の発刊にと
今回は大忙し。

では、１３話です。どうぞ。

第13話「MAGE　WEEK」

Side　ツカサ

≪　何が君の幸せ……何をして喜ぶ……　≫

しんみりとさせる様に消えてしまった魂と鎮魂する様に静かに歌い上げる。ニャンドマ地方での締めに最後のライブを行う。どうも霧崎ツカサです。こういう風にバラード調で歌いますと、ファンの方々も涙ながらに聞いてくれます。

≪　解らないまま終わる……そんなのは嫌だ……　≫

そうは言っても俺のファンクラブのやつらもどこまでも追いかけてくる奴もチラホラ見受けられるが、基本的には、例の変態マネージャーに全会員に対してメールによる通告はさせるようにはしている。『紛争地域で危険だから近づかないように』と。そんで、今はどこに向かっているだとか、紛争地域での活動内容をブログみたいなのにアップしている状況だ。

◆　◆　◆

そして、ニャンドマでの数回目のライブの時に、俺は驚くべきことに気がついた。俺の中で活きているサーヴァント達のことだ。確かにサーヴァントのタロットカードに戻すことは不可能だ。複製も

出来ない仕様だったしね。しかし、この能力を顕現することは出来るということに気がついたのだ。だって……。

（今宵のライブも盛り上がったなぁ、なぁ歌姫よ）
（それには私も同感です。ツカサの歌は素晴らしい）

今　喋ったのはギルガメッシュとセイバーなわけだが、俺の中から声が聞こえるわけだ。というか、直接脳に。そんで、この声に声に出して反応しちゃう事があるんだよね。すると周囲の皆さんは「あぁ、疲れてるんだな」みたいな生温かい目で見てくるわけですよ。これは悲しい。

まぁとりあえず、サーヴァント達と俺の間には、ある程度の自由度があるということで、その中のキャスターに相談した。

（なるほど、別の器に私たちを入れるということですね。それであれば確かに現界することは出来ますが、問題は器ですね。それに私たちも混ざり合ってしまっていますから、別々というわけにもいかないでしょう。一つの個体に、全てのサーヴァントを納めるようなことができれば……勿論、その場合は個々の感情とでもいいますか、個というモノは消えます。新しい存在として生まれ変わります）

なるほど、俺の中に既に全員が入ってしまっているから、混ざってしまっており、分離させて取り出すことは出来ないということか。そこでツカサちゃんは閃きました！！　無駄にキラーン☆

この世界には関係ないけど、デバイス造っちゃえばいいんじゃない？　リリカルなのはのアレだよアレ。合体剣にそのデバイス機能を付けちゃえば、俺の戦闘のサポートにもなるし、音源担当としても役割を充てても良いだろう。そんで、この姿をバリアジャケット

として登録しちゃえば楽だしね。そうと決まったら……。

俺は手合わせ錬成で、自分自身と合体剣に手を添える。自分の中にある混じり合っている7つで1つの存在を認識し合体剣へ再構成する。それだけで、合体剣はデバイスとなった。あ、ついでにカートリッジシステムも付けておこう。あまり意味ないけど、ギミック的に憧れる。魔力追加のブーストを掛ける敵が現れるかも怪しいけどな。

「付けるならココしかないかなぁ」

それは剣の鍔（つば）の部分だった。そこの場所を開放してカートリッジロード出来る様にしよう。

『機能正常。仮動作チェック良好。……名前ヲ登録シテクダサイ』

「ありゃ……そっか完全に一つの個体として結合することになるんだもんな。名前は考えてなかったな……じゃあ……『アサルト』で登録」

『登録完了。シバラク　オ待チ　クダサイ。……再起動シマス。……起動シマス』

「改めてよろしく頼むぜ相棒」

『【アサルト】起動しました。実に安直（あんちょく）な素敵な名前に感謝します。マイ　マスター』

「……相棒、いま何気に毒吐かなかった？」

『小さいこと気にしてるとハゲますよ　マスター』

うん……このデバイスは……駄目（しっぱい）だ！！

「はぁ……まぁいいや、ツカサって呼んでくれ」
『了解です……マスター』

「今　分かってて『マスター』って言っただろ。言うこと聞かないと壊すぞコラ」
『私にはツカサの知識にある魔法をインストール済みですので、術式や詠唱なしでも今後は怪しまれたりしないでしょう。後は魔力を込めるだけで発動できますから』

「突然　態度変えて丁寧に説明始めやがったな。まぁ、いつも通りだな」
『寂しくないように一人旅でも話し相手になりますしね』

「本当に壊すぞ　オイ」

まぁそんなこんなで、サーヴァント達はデバイスとして俺のフルサポートととして使役することになった。これからもよろしくってわけだ。直接は話せなくなっても想いは通じ合ってるからね。問題ないさね。

◆◆◆

さてさてニャンドマを後にして、俺達は次の地域へ移動中。ヴァルカンだったかな。そんなヴァルカンも紛争地域として活発であり、死者が絶えないらしい。悲しい話だ。俺の歌で戦闘なんてくだらないって事を教えてやるぜ！　っと、そろそろ着くかな？　ちなみに俺達は飛竜で移動中ね。飛空挺なんて紛争地域に飛ばさせることな

んて出来ないっす。危険すぎ。俺は詠春の後ろに乗っている。

あーちなみにガトウさんとかクルトは来てないよ？　他の地域に行ってたりするからね。俺とアルとナギと詠春。これがこっちのメンバー。残りのメンバーは他の地方へ行ってて……まぁジャックとかが武力制圧してくれることだろう。

と、そんなところに飛空挺発見。

「ん？　飛空挺だ……珍しくない？　近頃この付近は飛ばないでしょう？」

「軍のものではないな」

「つーかよ……あーやっぱりだ」

ナギが何かに気が付いたらしい。

「何がやっぱりなんよ？」

「落下物というか……人が落ちてきてる。飛べるんだよな……？」

俺も視力強化して飛空挺からの落下してくる人物とやらを確認する。スゲー荷物を杖に引っかけてはいるが……飛んでるというよりも、徐々に？　いや、加速度的に落ちてる？　あ、バランス崩した。術者は杖にぶら下がる様に足をバタつかせてる。

「詠ちゃん、ちょっと助けてくるからよろしく」

「誰が詠ちゃんだ！」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　『ＭＡＧＥ　ＷＥＥＫ』記者　イスミ・カミーラ

「本当に降りるのかい？　紛争地域だぜ姉さんよ」

「し、仕事ですから……で、ではありがとうございました」

撮影担当もこなさなければならない私は、それなりの重量のある機材も杖に括りつけ、無理を聞いてもらった飛空挺の方にお礼を言いつつ、飛び降りた。いや、訂正しましょう。足を滑らせ落ちた。

「にゃあああああああ！！！？　バランス！　バランスーー！！」

何とか荷物を落とさずに杖に跨ることに成功するが、荷物が重すぎる。私じゃない！　荷物が！！　重過ぎて飛ぶというより、飛ぶ姿勢のままの落下運動を始める。

もちろんそんな姿勢のまま落下運動できるはずもなく、私はまたバランスを崩し、杖から落ちそうになり、杖にぶら下がるような形で足をバタつかせる事しか出来ない。

「大丈夫ですか～？　荷物は捨てても大丈夫なら捨てますけど～？」

「駄目です！！　それは私の命（仕事道具）ですから！！　落としても駄目ですし！　私が死ぬのも駄目です！！」

あぁ、私は混乱しながらもなんて自分勝手でわけの分からない事を……誰に言っているのだろう？

「じゃあ、荷物をこっちに積みますね～。バランスはそれで取れますか～？」
「や、やってみます！」
ふっと一気に重量が軽くなる。しかし、杖に戻れない。これは……ヤバイ！
「あー駄目っぽいですね～。アサルト」
『はい、ツカサ』
「合体剣を分離させて、足元に行ってあげて」
『了解しました』
「ふぇ？」
足元に足場が出来る。それに乗り、何とか杖まで跨る様に戻る事が出来た。
「あ、ありがとうございました！　荷物まで無事に……！！」
「いえいえ、でも、この辺から紛争地域ですよ？　危険なんでニャンドマの方に引き返した方が良いと思うんですけど？」
「いえ！　仕事が最優先です！　戦場の歌姫の記事を書かないといけませんか……ら……っ！？」
「へ？　俺の？」
そう、それが私と戦場の歌姫のファーストコンタクトでした。
それは私よりも小さくて、巨大な剣を杖代わりに乗りこなし飛ぶ、歌姫の姿でした。その姿が背に太陽光を浴びている事もあり、なんとも神々しく見える英雄の一人だったのです。

「戦場の……歌姫……っ！？　にゃあああぁぁぁ！！？」
「あ、またバランス崩した！？　アサルト！」
『はいは～い』

そう、これがファーストコンタクト……。なんて恥ずかしい……。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ツカサ

「メイジ　ウィーク？　その特集？」
「はい！　こちらが最新の今週号で、世間一般では明日発売になるか思うんですが、ここです。まだアポも取っていないんですが、オスティアにいるだろうと、取材に行ったら紛争地域へ行ってしまっているということで、何とか取材の方を受けていただけないでしょうか？」

おぉ、今までありそうで無かった仕事だ。つーかマネージャー通さなくて良いのかな？　まぁ未来的に考えたらタカミチも表紙飾るような雑誌だったよな？　まぁ受けちまうか。俺はマネージャーに事後報告という形で受けることにした。

「でも先に紛争を止めないといけないんで、お先にこっちの仕事させてもらいますね」
「それでしたら、私もその取材も兼ねて着いていきます」

おぉ、危険だというのに何というプロ根性。

チュドーン！
ドドドドドドドッ！！

おーおーここもまぁまぁ激化してるね。

「じゃあいつも通り行くよ～」
「あぁ」
「今回は紛争続ける奴いんのかな？」

「あ、あの……紛争を本当に歌で？」
「えぇ、爆音で行くので少し離れたほうが良いかもしれませんよ。じゃあ『エンゲージ！』」

一気に現れる音響機材達。俺の口元にやってくるフライングマイク。渋く黒く輝く俺のギター。アンプから若干のノイズが入り。さぁ……スタートだ。

『戦闘なんてくだらねーぜ！　俺の歌を聴けぇぇぇーーーー！！』

≪　Ａｈーーーーーーッ！！！　≫

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　イスミ・カミーラ

チュドーン！

ドドドドドドドッ！！

本物の戦場。私は息を飲み汗を浮かべる。歌姫を取材することが命懸けになるなんて社を出たときには思いもしなかった。王宮で話を聞いて写真を撮れば終わりだと思っていた。それがまさかこんなことになるとは……。

「じゃあいつも通り行くよ～」

「あぁ」

「今回は紛争続ける奴いんのかな？」

そんな中、紅き翼の面々は飄々としている。ニャンドマもこんな感じだったよね。と言わんばかりの余裕が見受けられる。紛争地域を魔法攻撃なしで本当にライブ一つで治めてるというの？

「あ、あの……紛争を本当に歌で？」

「えぇ、爆音で行くので少し離れたほうが良いかもしれませんよ。じゃあ『エンゲージ！』」

歌姫の周りに一気に現れる音響機材達。私は慌ててビデオカメラを構えて録画を開始した。歌姫の口元にやってくるフライングマイク。渋く黒く輝く弦楽器。アンプから若干のノイズが入り。それが始まった。

『戦闘なんてくだらねーぜ！　俺の歌を聴けぇぇぇーーーー！！』

≪　Ａｈーーーーーッ！！　≫

ズンッ！！

それは……言うなれば、『鋼の一撃』

目の前の小さな少女にしか見えない男の娘が出す全てを包み込む美しい歌声に、地を這うような低音から空まで羽ばたく様な高音を生み出す機材達。

世の中には『やって出来るときと出来ない時がある』人間と『百戦錬磨。何十回何百回でも成功させる』人間がいる。彼、戦場の歌姫は明らかに後者だ。全てを飲み込み魅了する。その証拠に魔法の攻撃の嵐は止んでいる。既に歌姫を正面に集まってきている戦闘集団達。感動して大声を出さずにはいられず、叫ぶ集団と化している。

＼　おおおぉぉぉぉーーーーー！！　ツカサちゃーーーーんっ！！　／

なんて美しい声だろう。なんて綺麗な音だろう。それは何千何万回練習されたのであろう。

『まだまだ行くぜーーー！！』

そして……なんて楽しそうに歌うのであろう。

≪　新しい明日を生きればいい！　感じてる君が見たい！！　≫

＼　オオオオオオォォォォォォォォッ！！　／

もう命懸けとかの考えは吹っ飛んでいた。私もただ一人の観客になってしまったのだから。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

◆◆◆

『一言では言い表せない『戦場の歌姫』

完全なる世界との戦いが決着した今も紛争地域を駆け巡り歌い続ける。その素顔に迫りました。

※初回特典雑誌にはヴァルカンでの初期ライブを封入！

これが戦場の歌姫だ。これが霧崎ツカサだ。見逃すな！』

と、表紙を飾ったのはギターを構えた霧崎ツカサの写真だった。

ちなみに大量に取られた写真により、写真集も出たらしい。

雑誌は初回で５億部突破。写真集もかなり好調な売れ行きらしい。印税に関しては莫大過ぎたので紛争地域の方の活動に全て回したが、それもまた雑誌増刷の原因になったらしい。という事は知らずに今日も霧崎ツカサは歌い続けている。

――――――そして、各地を回りに回って2年が経とうとしていた。

第１３話「ＭＡＧＥ　ＷＥＥＫ」（後書き）

感想は随時受付中です。

アサルトが～帰ってきた～。特に意味はないけど～帰ってきた～。

さてさて、全然引っ張れなかったけど、次回はアリカ様を助け出すぞ！

では、また次回。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8438v/

夢無き者は夢を見る ver.5

2012年1月13日15時46分発行